
オールド・オスマンの息子

lily

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オールド・オスマンの息子

【Nコード】

N2248U

【作者名】

lily

【あらすじ】

ゼロの使い魔の二次小説でオリキャラ主人公の非転生物です。主人公と魔法学院の学院長オールド・オスマンを中心としたお話し。チートやハーレムにはならないような予定ですがあくまで予定です（笑）七万の軍勢を相手に一人戦いを挑むかも知れませんがあっさり死んでしまうかも知れません。ルイズに関してはもう少し落ち着いた子に改変。虚無に関してはあまり触れないお話しです。ヒロインはオスマン・・・いえタバサ、もしくはカトレアらしいです。

広大なハルケギニア大陸西方に位置し南をガリア王国、東に帝政ゲルマニアという大国に挟まれ、西に大海を持つトリステイン王国はお世辞にも列強とは言えずハルケギニアに存在する一つの小国に過ぎない。ただ歴史は古く、この世で最も偉大なメイジにして伝説の系統、虚無の使い手たる始祖ブリミルの3人の子がうち一人が興した国であり、そこが僅かばかりの自慢と言えようか。

そんなトリステイン王国の王都トリスタニアから馬で2時間ほどの所にトリステイン魔法学院は存在する。読んで字の如く魔法を教える場所であるが誰もが入れる訳ではなく支配層たる王族や貴族のみに入学を許された学院である。

そもそも魔法というものが彼ら支配階級のみに見える代物であり魔法を使えるものをメイジと呼ぶ。それが貴族と平民とを分け隔てる明確な軛であり、その人の人と成りに関わらず貴族を貴族たらしめんとする力の一つであることが共通の認識となっている。

さて、前述の通り、ここトリステイン魔法学院は魔法を教える場所であるわけだが王国と同様、その歴史は古く数々の優秀なメイジを輩出していてこの魔法学院を卒業することは貴族としての教養と嗜みと成っている。本塔を中心に四方を外壁で囲まれそれと一体化した魔法の象徴である水・土・火・風、そして虚無を表す五つの塔から形成される外観は王城には劣るものものやはり見る者を圧倒する存在感というものを放っている。

現在はニューイの月の中頃であったため在籍する学生は目下夏休み中である。普段の喧騒はなりを潜め閑散としている。そんな学院を本塔の最上階の窓から見下ろす一人の人物がいた。すっかり真っ白

になつてしまつた長い髪にいつから伸ばしているのかわからないこれまた真つ白な長い髭、深く刻まれた顔の皺には彼が生きてきた時間の長さが窺い知れる。

その人物とはトリステイン魔法学院の学院長たるオールド・オスマンその人であつた。

「……んがつ!？」

物思いにふけるオスマンの髭が不意に引つ張られた。

「これこれ、髭を引つ張るでない」

オスマンは髭を引つ張っている犯人に目を向け優しく言う。

しかし犯人は聞きわけず依然髭はぐいぐい引つ張り続ける。しかしてそれもそのはずである。

何せ相手はまだ言葉も通じずオスマンの腕に抱かれている小さな赤子であつたのだから。

「あたた、自慢の白ひげが抜けてしまつてある。これからはわしがお前の父親代わりなのじゃぞ?じじいをあまりいじめるでない」

毎日の手入れを欠かさない自慢の髭も今はただのおもちゃへと成り替わっている。

赤子の割に強い力だがしがし引つ張ってくる小さな存在に手を焼くオスマンであつたが腕の中で無邪気にじゃれるこの赤子は実の子でもなければ親戚の子供でもない。

では誘拐してきた子供かといえどももちろんそんなことはない。それならばこの子はなぜオスマンの腕に抱かれているのか?それを知るには少しだけ昔の話をしなくてはいけなかつた。

その日はどんよりと雲が厚く、今にも雨が降り出しそうなほどで日中にも関わらずうす暗かった。そんな日に学院からも王都からも大きく離れた片田舎にオスマンと数人の傭兵メイジが足を踏み入れた。村と呼べるかどうかも怪しい村落しかないような場所に彼らが来たのにはもちろん理由があった。

そもそも理由もなしにメイジ達がこのような所にわざわざ来る由もなしだ。

では、その理由とは？

簡潔に述べるのなら亜人討伐のためであった。

しかし亜人にも多く種類がいる。オーク鬼などならこのような田舎ではなくても見ることもあるし、その程度のレベルならば高名なオスマンが出るまでもなかった。

つまり今回の討伐はオスマンが出向く必要があるほどに厄介な相手だということだ。

そしてその相手とは最悪の妖魔と称される吸血鬼なのであった。

吸血鬼、それは外見は人間と全く変わらず、牙も血を吸うとき以外は隠しておける。その上魔法でも正体を暴くことはできず、性格は狡猾。オーク鬼ほどではないが力も強く生命力も高い。

初歩のものなら先住魔法を使う事も出来る。太陽の光に弱いのが唯一の弱点であり、それ以外にはさしたる弱みはない。血を吸って殺した人間を魔術師の使い魔同様の存在「屍人鬼^{ケル}」として操ることが出来るというまったくもって厄介な相手であった。

噂によれば今回の討伐対象である吸血鬼はずいぶんと変わり者だそうだ。

なんでも始めは村の人の血を吸って害をなしていたとのことだが討伐に駆け付けた一人の女性メイジに恋をしてしまったらしい。

それ以来村の被害は無くなり、村はずれの屋敷にそのメイジと共に住みついてしまったとのこと。しかし吸血鬼の存在は恐怖でしか

い。それゆえオスマンらが派遣されたのだ。

吸血鬼が住むという屋敷へと足を踏み入れた討伐隊は一人の男と出逢った。

その男は色素の抜けたように青白い肌でずいぶんと痩せ衰えていたが品があり、堂々としていた。

状況からいってこの男が吸血鬼なのだろう。

「メイジがずらずらと私に一体何の用だ」

「そなたは吸血鬼、わしらは人間じゃ、それだけでわかるであろう。

囚われたメイジの女性を渡してもらおうかの」

「ふん、何を馬鹿なことを、私達は愛し合っているのだよ。囚われなどと言いがかりも甚だしい。お帰り願おうか。さもなければ血をみるであろう」

「どうやら話はここまでのようじゃな。押し通らせてもらおう」

吸血鬼とオスマン達の戦いは激しいものであった。

胸を抉られ心臓を潰された者、首を切り飛ばされた者、戦いで酷く荒れた屋敷にはそういった討伐隊の傭兵メイジの死体が血だまりに伏している。

気がつけば屋敷にはオスマンと吸血鬼の二人だけとなっていた。

しかし状況はオスマンの有利であった。

討伐隊はやられてしまったが吸血鬼も無傷では済まなかったからだ。吸血鬼は全身を傷だらけにし左腕を切り落とされ、ぼたぼたとその血を流し、床の染みは広がっていく。

状況が有利なのは喜ばしいことではあるがオスマンには疑問があった。

なぜ、この吸血鬼は殺した相手の血を吸わないのであろうか？

吸血鬼とは血を糧に生き、生命力の高い生き物である。血を吸えば

腕の再生も可能はずなのだ。

「そなた、なぜ血を吸わない？わし相手ではその必要もないと？」

杖を構え、睨み合つたまま疑問を口にする。

「まさか、その老体でここまで強いとは露にも思わなかったさ。正直に言えばもう私は限界に近い。しかし私には愛しい人との約束があるのだよ。私は彼女以外の血は吸わないと誓っている。その誓いに背くことは彼女への愛へ背くことに同義。そんなことできる訳がない！」

「そうか、そなたの愛に敬意を表しようぞ。だがしかし、悪いがそなたを生かしておくわけにはいかぬのじゃ」

オスマンがルーンを唱えると床から石の手が伸び吸血鬼の四肢を掴む。続けて唱えたジャベリンのルーンによりオスマンの頭上に幾つもの氷の槍が浮かぶ。

「去らばじゃ、高貴な吸血鬼よ」

動きを封じられた吸血鬼は唯的でしかなく全身にジャベリンが深く突き刺さる。

大量の血を流し既に意識が途切れそうになるなか、吸血鬼がオスマンに告げる。

「見事だ・・・人間よ。願わくば我が最後の願いを聞いて欲しい。」
「言ってみよ」

「・・・我が最愛の人と出会うことの叶わなかった我が子のことよ・・・彼女は人間だ。決して屍人鬼^{ケール}などではない。どうか！どうか彼女と生まれくる子供は丁重に扱って欲しい！」

「子供がいると言っのか!？」

驚きを禁じえなかったが吸血鬼は確かだと言う。
暫しの沈黙の後オスマンが口を開く。

「あいわかった。その願い、このオスマンがしかと聞き受けた」

「感謝する・・・高貴なメイジ、オスマンよ」

僅かに表情を緩めた吸血鬼の最後の言葉であった。

屋敷の一室に吸血鬼の愛した女性は眠っていた。

整った顔立ちに月の光りの様に美しい銀色の長髪の彼女は吸血鬼の
言った通り新たな命を宿していた。

頭の良い吸血鬼のことだから討伐隊が村にやって来たのは事前に知
っていただろう。

しかし身重な彼女を案じ逃げることを選ばず、心配をかけまいと眠
らせた後、彼女が妊娠してから碌に血も吸わず弱った体で討伐隊を
迎え撃つたのだ。

ここまで愛を貫こうとは！

オスマンの胸には驚きと後悔の念があった。

事実を知っていればもつと他にやり方があつたはずだ。

さすればこの様な結果にならずともすんだであろうに。

オスマンは目覚めた女性に全てを有りのまま告げた。

自分が吸血鬼の命を奪ったこと、最後の願いを聞き受けたこと。

女性は涙を流しひどく悲しんだがオスマンを責めはしなかった。仕
方のないことだと。

いっそのこと激しく責め立ててくれれば良かった、オスマンは尚の
こと後悔を募らせた。

彼女の体調を気遣いながら馬車で戻ったオスマンはその功績を讃えられたが露程も嬉しくはなかった。連れ帰った彼女については真相を明かすことなど到底出来ず討伐隊で死んだ傭兵メイジの残された妻という報告をした。幸い生きて帰ったのはオスマンただ一人であつたため疑われることは全くなかつた。

オスマンは魔法学院から一番近い町に彼女を匿い幾度もそこへ足を運んだ。

程なくして彼女は男児を生んだがひどい難産であつたため生まれてきた我が子を見ることなくして彼女は吸血鬼の後を追つた。

時間を学院を見下ろしていたオスマンに戻そう。

ここまでの話してお分かり頂けたかもしれないが、オスマンに抱かれた赤子は彼女と吸血鬼の間に産まれた子供であつた。

今はまだ赤子故この先どうなるかは分からないが人として生きれば其れでよし、しかし吸血鬼として血の乾きに飢え、人を襲うようなことがあれば……

オスマンの不安をよそに赤子は銜いのない笑顔をおスマンに向けるのだつた。

001 (後書き)

先ずはお読み頂きありがとうございます！いやはや投稿しているストパンの方のお話も全く進んで無いのに新たな二次小説を投稿してしまつた。。。り、両方ちゃんと書くよ！（汗）

他の人の二次小説が凄く面白かつたので（某練金殿のアレです）つい。当方、後塵を拝するが大好きであります。本当にすみませんでした。文体はストパンの方が一人称なのでこちらはいわゆる神視点を中心に書いて行きたいと思つています。wiki頼りなので話の方とか諸々間違つていく可能性が高いのですがご容赦ください。とりあえずこのお話しはオスマンルートです（笑）オスマンと息子の愛です。

アッ！

いえ、言葉が足りませんでした。家族愛です。拙い文書ですが読んで頂けたら嬉しいです。導入がなんか暗い話になってしまった気がしますが次からは明るいお話しにするつもりです。被お気に入り件数が増えると投稿のペースが上がるかも知れません（笑）最後にもう一度、ありがとうございます。

PS

ストパンの方もよろしくお願いします

月日が経つのは早いものでオスマンが子供を引き取ってから学院は多くのメイジを送り出し、また同様に多くのこれから輝くであろう若人を迎え入れた。時間とは全ての物に等しく降り注ぐものでそれは赤子とて例外ではなくむしろ一日一日成長を続ける存在故その密度は濃いのかもしれない。

オスマンの心配の種は今のところその芽を見せることはなく、至って平穏な日々を過ごしていた。

人として生き、オスマンのもと学院で六度目の夏を迎えたメイジと吸血鬼の子供の名はヴァレリーと言う。これはオスマンが名付けた訳ではなく生前吸血鬼が我が子に送ったものであった。性は母のものを継ぎヘルメスと名乗っている。

オスマンはヴァレリーを養子として引き取りはしたが自分の名を継がせようとは思わなかった。

それは忌諱や差別などからでは決してなく、ただ単純にヴァレリーの実の両親に敬意を払ってのことだった。

オスマンは彼が養子であることは既に告げていた。ただ、父親は吸血鬼討伐の際に亡くなったという説明をしたので彼は父親が討伐する側であったと知っている。

ものは言いようであり嘘ではないことは確かだ。

ヴァレリーの容姿は母方のそれを強く引き継いでいて母同様その髪は月の光りの様に美しい銀色であった。顔すら見たことがない母であったがやはり母という存在は特別であり授かった銀の髪は彼の誇りであり自慢であったのは不思議なことではない。

これは余談だがヴァレリーという名は男女両方に用いられるものであること、容姿が母似であること、さらにまだ幼かったことも相まってヴァレリーは女兒と間違われることが多かった。

それを彼より2つばかり年上の少年グループにからかわれたことから喧嘩になったことがある。3対1と非常に不利な状況であったが結果はヴァレリーの勝利、彼自身も顔にあざを作っただけでそれ以上に叩きのめされた少年グループは泣いて逃走していった。

子供にしては反射神経と力が強いのは吸血鬼の血のなせる技かもしれない。またその身体能力の割にヴァレリーはあまり外で動き回るのが好きではなかった。

彼曰く「日の光を浴びるとなんとなく疲れる」とのこと。

これも彼の血のせいかもしれない。そのせいかヴァレリーはもっぱら屋内で過ごすことが多かった。学院の授業に潜りこんだり、一日中図書館で読書に耽ったり、実験室の資材を適当に混ぜてみたりともっとも最後のは現行犯で見つかりオスマンにひどく怒られたが。

さて、今日という日はヴァレリーにとって待ちに待った一日だった。今日この日よりオスマンのもと魔法の修行を始めるのである。

生まれてからというもの多くの時間を学院で過ごし、幾度となく授業に忍び込んだ彼であり間近で魔法を使う学生を見てきただけに魔法の行使へ寄せる期待は一人であった。

既に魔法の行使の媒体たるものは用意してあったが多くのメイジが使うようなワンドではなく一つの指輪を契約するに至った。その指輪とは両親が彼に残した唯一の品であり彼は今まで肌身離さず持っていたものだった。

銀の台座にサファイアをあしらったものであり、サファイアの石言葉は慈愛、これは単なる憶測にすぎないが生きて子に愛を注ぐことの叶わなかった両親のせめてもの想いの現れではなかるうか。

「では始めるかの。ちなみにお主は何か使いたい魔法でもあるのか

の？」

「はい、父上。何よりも先ずレビテーションが使いたいです」

「はて？何故じゃ？」

「私は図書館の下段以外手が届かないのです。毎度毎度誰かに頼んで取ってもらっていても面倒で仕方ありません」

多くの子供は火や風のいかにもといった攻撃魔法を使いたがるがヴァレリーに至ってはその範疇になかった。しかし図書館で少ない時間を過ごす彼としては大問題である。なにせ図書館の本棚には普通でも上段に届かないのに30メートルもあるものまで存在するからだ。

「本を読むのは大いに結構じゃが・・・お主はもう少し外に出た方がいいぞい」

「どうにも日の光は私の体力を奪うのです。月の光は好きなのですが・・・」

「そうか、まあよい。では望み通りレビテーションから始めよう」

各属性の初級魔法のルーンを唱え自分の系統を知ることとなる。

風であればレビテーションがそれに当たりヴァレリーは既に暗記済みのルーンを唱えるが最初の一回は僅かに体を浮かせたかと思うとバランスを崩してしこたま尻を打った。

2回目は成功したものの風が彼の系統ではないようだ。

次に土、これはクリエイト・ゴーレムを行い15サントほどの小さな土人形を作り出すことが出来た。こちらは少し才能があるかも知れない。

続いて火、これはまったくもって才能がなかった。

発火のルーンを唱え、火の発現が確認できたかと思いきやそれは瞬

く間の出来事ですぐに消えてしまう。何度やっても結果は同じであった。

最後は水、これはコンデンセーションという大気中の水蒸気を液体にする初級魔法を使ってみたがかなりの量の水を生成できた。

試しに他の水系統のドットスペルも試したが悉く成功した。

ヴァレリーの系統は水ということで先ず間違いないだろう。

これからは水系統を中心に修練を積むことになる。

オスマン曰く水に関してはトライアングルに達するのもあり得ること。土や風は努力次第でライン程度には成り得るかもしれないが火に関してはライン到達は難しいかもしれない。

「さて、これよりお主もメイジとしての一步を踏み出したわけじゃが・・・一つ心しておくのじゃ。魔法というのは貴族を貴族たらしめん一つの左証じゃがそれが全てではない。魔法は己の行い、あり方を映す鏡じゃ。それを心得よ。まあ、何が言いたいのかというところ努力せよということじゃ」

言い出しは厳格に、結びは優しい笑顔でオスマンは言うのであった。

ヴァレリーはその後の修練を欠かすことは無く魔法の力はゆっくりであるが着実に成長していった。

念願の図書館上段に届いた時は大層はしゃぎ駆け足でオスマンに報告しに行ったほどだ。

それを聞いて喜ぶオスマンがヴァレリーの頭を撫でた際の彼の嬉しそうな無垢な笑顔は歳相応な眩しいものであった。

水の魔法を得意とするヴァレリーであったが今までの知識の蓄えと知への探求心が功を成してポーションを始めとする各種魔法薬の生成において大きく成長を見せていた。

今だ幼く学院に通ってはいなかったが既に周囲の者からは評判で多くはないが稼ぎもあった。

それを元手に質の良い材料を集めさらに質の良い薬を作る。

少しずつ貯めたお金でヴァレリーはオスマンの許可を得て学院の敷地の傍に小さな実験室と薬草を栽培する花壇を作った。日の光が疎ましく感じながらも大きな麦わら帽子を被り実験で使うべく薬草を栽培している花壇にて土弄りに精を出す。

実験の為の土弄りであったがこれは半ば一つの趣味と成っていた。歳よりくさいと中には言う人もいるがいかんせん育ての父親があのオスマンなのである。

どちらかと言えば事実ヴァレリーは歳よりくさい所があった。

花壇の隅で栽培しているハーブを摘みオスマンとゆっくりお茶を啜るのが彼の好きな時間の一つであることからこのことは言える。

過去に一度、ハーブと間違えて毒草をお茶にしまったことがあるのだがその時は仲良く痺れてテーブルに突っ伏してしまった。それを発見した学院の教師曰くオスマンに関してはよもや天に召されたのかと思つたとのこと。

割と散雑な実験室にて材料の組み合わせやその比率を細かに記した手帳を見ながら試験管の液体を混ぜ合わせ魔力を込める。この時大事なのは魔力を一度に込め過ぎないということゆっくり馴染ませるのが魔法薬生成のコツだとか。

「よし！出来た！！」

出来上がった液体はピンク色のなんとも怪しい薬。オスマン直々に依頼された品だったりする。

駆け足で本塔最上階の学院長室に向かう。

「父上！依頼の品がたった今出来上がりしました！」

「まことか！？早速効果の程を試してみるぞい！」

魔法薬を一気に呷るとオスマンの体に変化が現れる

「おお、これは素晴らしい！でかしたぞ、ヴァレリー！」

その日学院では謎の美女が目撃されておりその美女は二つのいけな
い果实を有していて男子学生の噂と成っていた。その正体とは魔法
薬で麗しい美女に姿を変えた学院長たるオスマンのだがそれを知
る者は当人と息子のヴァレリーだけであった。

怪しい趣味とそれに加担する親子のどうしようもない姿がそこには
あった。

002 (後書き)

主人公の魔法のレベルには少し悩みました。火と水に関して言えば最初から決めていたのですが土と風はもう少し才があった方が戦闘時の描写が派手になるかなと。まあ結果、系統魔法はこのレベルに落ち着きました。

‘系統魔法は’ですが。。。

第三者視点故説明じみたものが多いのでなるべく直接的な表現を避けて文章としての面白さを出したいとは思っています。自分の語彙の少なさに苦を呈しております。。。
儘なりません><

季節を一つ跨ぎ木々が色付いた衣を脱ぎすてその身を晒すハガルの月、位置柄トリスティンでは一年を通して穏やかな気候であるが、やはりこの時期の朝は少しばかり冷える。

実験室にて図書館上段から手に入れた魔法薬についての本を読んでいたらいつのまにか寝てしまったヴァレリーは寒さと体の痛みで目を覚ました。

椅子から立ち上がり固まった体を伸ばすとフラスコにワインを注ぎ蜂蜜とクローブ、オレンジを加えアルコールランプで温める。

起きがけのホットワインは渴いた体に潤いを与え内から体を温めてくれる。

窓から見えるはヴァレリーの細やかな自慢である庭に朝靄が架った姿。

彼は箱庭と謙遜して称するが夏の始めには一つの小さな花壇のみであつたが瞬く間にその規模は拡大し今や縦15メートル横25メートル程の敷地内には季節を問わず草木が茂り鮮やかな花を咲かせ目を和ませる。

ヴァレリーは何気なくそちらをみやると一人の女生徒が敷地に居ることに気づく。

近頃自分の庭が違い引きの場として学生から人気があるのを知っていたヴァレリーは彼女もまたそうであろうと憶測をつけ冷ややかな目でそれを眺める。

別に惹かれあう男女の仲を妬ましいなどとは思わないし自慢の庭で恋の花が咲くとあれば場を貸すことも吝かではないが愛を囁くにあたって勝手に花を摘まないでほしいのである。

もちろん鑑賞のための面も在るがあくまで魔法薬生成の材料であり

改良を加え質を向上させ丹誠籠めて育てた花々は決して野に咲く花ではないと知ってほしい。

細かく言うつもりはないが庭の花は彼の所有物であり財産だ。実際質の良い秘薬の材料は其れなりに値をはる物である。

しかしやはり一番の憤りは自身の努力の結晶を奪われる事である。

そう、例えば十年に一度花をつけるとされ賢者の石の材料とも言われるドンケルハイトの花を試行錯誤の末僅か数本だけとはいえ咲かせる事にヴァレリーは成功したのだがよりにもよって無知な学生にそれを摘まれた時は激昂のあまりまだ使えるはずのないジャベリンをバカツプル目がけて全力で撃ち込んだくらいだ。

彼曰く「あの時は本気で花を摘んだやつを腕を？いでやろうかと思つた」と恐ろしいことを語る。

そう言った経緯があり、庭の女学生を眺めていたヴァレリーであったが彼女の顔はどこか暗く浮かないのが見て取れる。待ち合わせに男が来なかったのかと思つたがどうにも彼女は今まで庭に来ていた恋する乙女の放つ空気とは違つようであり、気になつたヴァレリーはマグカップに注いだホットワインをもって彼女に声をかけた。

「こんな所には体が冷えてしまいませんか？」

どうやら声をかけるまで気付かなかつたようで彼女は金色の髪を揺らし少し驚いた様子で振り向いた。

「あら、これはオールド・オスマンの。確かに少し冷えますわね。ですが此処はそれを差し引いても素晴らしいところですよ」

「ふふ、ただの箱庭にすぎませんがそのように仰って頂けて嬉しい限りです」

そういつてホットワインを手渡すと上品な微笑みを返す彼女の名は言わずと知れたラ・ヴァリエール公爵家の長女エレオノール・アルベルティーヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエール。凜として気の強そうな彼女であるが今は少し哀愁の念が窺える。

「何か、貴方を悲しませるようなことでも？」

「いえ、大した事ではありませんわ。ちょっとした心配事ですの」

そうは言うものの自分の目の前で陰りのある笑顔を浮かべるのだからヴァレリーとしては放っておくわけにはいかない。父であるオスマンからも困っている女性には優しく接しると教わっている。

「失礼ですがそれはご家族のことです？」

エレオノールは彼の言葉に驚きを隠せなかった。

何せ彼女の心配事とはまさしく家族の事についてだったからだ。

「どうして……？」

「いえ、私が来るまで貴方はサルビアの花をご覧になっていたようでしたので……サルビアの花言葉は家族愛故」

「驚いた……御名答ですわ。最初はこの時期に咲いてるのが不思議だったので眺めていたのですけれど気がつけば家族の事を想ってしまいましたの……」

それからエレオノールは彼女の心配の種について話した。

三つ下の妹が病に伏せていること。最近は特に辛そうであること。またヴァレリーと同じ位の歳の末の妹が最近魔法の修行を始めたもののなかなかうまく進んで無いことなど。

本来ならこのような身内の話はしないのだがともすれば同学年の男子より落ち着き、品のあるかもしれないヴァレリーに事を話したの

はまだ幼いその容姿が故、貴族として肩肘張らなくて済んだがためかもしれない。

「お優しいのですね」

「そんなことないわ。私はどうにも自分の考えを押し付けてしまう節があるのを自覚しています。そのせいで姉妹で喧嘩にもなりますし学院でも時折やり過ぎてしまうことも・・・」

「私には兄弟がいませんので分りかねますが貴方は妹さんを想うてのことなのでしょう。そこに愛があるのなら貴方の想いはきつと妹さんにも届いていると思います。もちろん時には喧嘩もするでしょうがそれは姉妹故当然ではないでしょうか。最も近い存在でもやはり一人一人違うのですから。これは学院でもそうですね。相手を見て、知り、理解するのはとても難しい事です。大事なものは相手を分ろうとする、受け入れようとする気持ちではないかと思えます。・・・と偉そうなことを言って申し訳ありません。父の受け入りが多分に含まれた小僧の戯言ですのでどうかお気になさらずに」

「いえ、私は貴方に感謝しなくてはいけませんわ。貴方はきつと将来素敵な殿方になるでしょうね。もちろん今でも素敵ですわよ？」

「そ、そのような事を言われては照れてしまうではないですか！」

照れるヴァレリーを見て微笑むエレオノールは彼にとっては一回り以上歳の離れた女性であり、いくら彼が落ち着いて物事を語れようととも社交の辞には彼女に軍配が上がる。

また子供の時に年上のお姉さんに囁かれた際の胸の高鳴りは男児ならお分かり頂けるかもしれない。

恋でもなければ愛でもない憧れに近いともいえる一種の名状し難しい生理現象である。

「ふふ、それじゃああまり長居しても迷惑でしょうし今日の所は失礼しますわ。ありがとう。それと御馳走様、温まったわ。また来て

も？」

「はい、たいした御持て成しは出来ませんがお待ちしております。それと貴方にはこれを差し上げます」

そう言つてヴァレリーが渡したのは先ほどエレオノールが見ていたサルビアの花。

「貴方が大事に育てた花なのですよ？頂いてしまつてもいいのかしら？」

「はい、本来夏を飾るはずのこの花がなぜこの時期に咲いたのかは私も不思議に思つていたのですがこの花はきつと貴方の為に咲いたのでしょうか。ですのでこれは貴方にもらつて頂きたい」

「そう、でしたら喜んで頂きますわ」

来た時よりは幾分明るい表情で歸つていったエレオノールは固定化の魔法をかけ部屋に件のサルビアを飾つた。彼女はそれを見ることに心を穏やかにすることが出来、学院生活を今までより少し余裕を持つて過ごすようになったのはヴァレリーが花と言葉を用いた系統魔法でも先住魔法でもないもう一つの魔法かもしれないと言つと浪漫が過ぎるであらうか。

003 (後書き)

貴族といえば花！などというイメージが私にはありまして今後も花を交えたお話がちよくちよく出てくるかも知れませんが。ちなみにドゥケルハイトはアトリエシリーズの素材です。

それにしてもうちの主人公は6歳の癖に随分年寄りくさいですね。
。オスマンの影響ということにしておいてください。。。

あと1、2話くらい幼少期を書いたらいよいよ学院生活を書いていきたいと思います。吸血鬼設定はまだ成りを潜めております。

次回予告

ヴァレリー坊やクロツカスを送る！

春の訪れを告げるようにヴァレリーの庭には次々と可憐な花が咲く。

ハガルの月の終わりには天使が雪に魔法をかけて花に変えたとされる小さなスノードロップが、ティールの月にはスノーフレークと鈴蘭の花がその純白のスカートをもよお風に揺らす。

どちらも白く小さな花であるがスノーフレークの花は淑やかな佇まいをしておりスカートの裾の緑のアクセントが清楚で品のあるその姿をより際立させる。

一方鈴蘭の花は膨らんだスカートの裾が反り返りまるでレースのフリルのようで愛らしく、その姿は無垢な少女を思わせる。並べると麗しい姉妹のようで見ているだけで心に安息をもたらしてくれる。

ヴァレリー個人としてはスノーフレークに目を奪われるがそれは彼の女性の好みが年上の淑女であったがためかもしれない。ちなみにこれは余談だがハガルの月に咲いたスノードロップの花言葉は「希望、慰め、逆境のなかの希望」であるが人への贈り物にすると「あなたの死を望みます」という意味に変わるので注意が必要である。

さて現在トリスティン魔法学院院長オールド・オスマンの息子にしてヴァレリー・ヘルメスはエレオノールと共にラ・ヴァリエール公爵家へ向かう馬車に揺られていた。

というのもサルビアの花をプレゼントしたあの日以来、エレオノールはヴァレリーの庭に新しい花が咲く毎に彼のもとを訪れては友好を深めていて今ではヴァレリーはエレオノールのお気に入りになっている。そんな折、フェオの月の入学式前の短い休みを使いエレオ

ノールはラ・ヴァリエールへ里帰りすることとなりせつかくだからということ遊びに来ないかと誘われたのである。

「実は私、学院からほとんど出たことがなくて恥ずかしながらここ数日、興奮のあまりよく寝られませんでした」

「ふふ、そうだったの。なら少し眠ってもかまいませんわよ。まだ到着まで少し時間がかかりますし。なんなら私の膝をお貸ししましょうか？」

「い、いえ、そのような失礼は！だだ大丈夫です！」

最近ヴァレリーをからかうのに面白みを見出してるエレオノールは慌てて顔を赤くする彼を見て満足そうにほほ笑む。

「では、眠くなったら言ってください。その時に膝を貸しますわ。

そういえば誘っておいてなんですが御庭のほうは大丈夫なのかしら？私のせいであの美しい庭を枯らせてしまったら申し訳ないわ」

「はい、父上とメイドの者に庭の世話は頼んできました。父上には「美人と一緒に羨ましい」と散々言われましたよ。私もエレオノール様のような方と御一緒できて嬉しい限りです」

「褒めても何も出ませんからね」

「本心ですよ」

二人を乗せた馬車は春の木漏れ日の中をゆったり歩むのであった。

時間は少し進み、いつの間にか寝てしまったヴァレリーはラ・ヴァリエールの地についた。

エレオノールに優しく髪をなでられ起こされたが自分が彼女の膝を

枕にしているのに気付きみるみる顔を赤らめ鬼灯のように朱に染まった顔のまま口をぱくぱくさせる。

「あ……あの、その、あの……」

鼻をくすぐる甘い香りと予期せぬ状況にヴァレリーの頭の中は真っ白であり、見事な狼狽ぶりを披露する

「さあ、着きましたわ。可愛い寝顔も堪能させてもらいましたしそろそろ行きましょか」

未だ顔の熱が冷めやらぬヴァレリーが馬車を降りるとそこには高い城壁と尖塔を有す重厚で壮観なラ・ヴァリエールの城。学院も大概であつたがそれ以上の存在感に思わず息をのむ。

城内で待っていたのは一体何人いるのかもわからない召使と3人の貴族。

ヴァレリーはその内の一人に目を奪われた。

桃色がかつたブロンドに鶯色の瞳、整った顔立ちの彼女。

隣に似たような小さいのがいるがそちらではない。

エレオノールは凜とした美しい女性であつたがそれとはまた別の落ち着き優しそうな雰囲気、それでいてどこか儂げな彼女。

ラ・ヴァリエール公爵家の次女カトレアであつた。

「お帰りなさい、エレオノールお姉さま」

「ただいま、カトレア。体の方はどう？無理してない？」

「ええ、ここ数日はだいぶ調子がいいの、今朝も三人でお庭を見て回ったのよ」

「そう、それは良かったわ。ワルド様もいらしてたのですね。うちのおちびがお世話をかけてしまつて申し訳ありませんわ」

ワルドと呼ばれたその人は歳の頃はエレオノールと同じくらいの長髪で背の高い美男子。おちびと言われてむくれる小さいの髪を撫でながら口を開く。

「いえ、ルイズはともいい子にしていますよ。してそちらは？」

ワルドはヴァレリーに目を向ける。

「魔法学院のオスマンの息子、ヴァレリー・ヘルメスと申します。本日はエレオノール様の御好意でお招きしていただきました。若輩者ですがどうぞお見知りおきを」

「これはご丁寧に、その歳でしっかりしたものだ。僕の名はジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルドだ。よろしく頼むよ」

「まあ、あなたが水花すいかのヴァレリーね。お姉さまから聞いているわ」「はて？水花とは？」

おそらく自分の二つ名だとは推測がつくがいつの間にかそんな名がついたのだろーと思うヴァレリーにエレオノールが答える。

「あら、知らなかったの？学院では貴方のことをそう呼ぶ者もいますよ。美しい花に囲まれ水を操る貴方らしい二つ名だと思っわ。他にも花月なんていうのもありますわね。こちらにも花の字が付いていますそれがあのお庭を見れば当然でしょうね」

「そうだったのですか。まったく気づきませんでした。しかし水花はまあ、いいとしてさすがに花月は照れますね」

水花とは蓮の別名であり、また水しぶきを意味する言葉である。

蓮華の花言葉「雄弁」もエレオノールを諭した彼には当て嵌まる。字だけで見ても水は彼の系統を、花にはもちろん彼の自慢の庭の意

も含まれているわけで、たった二文字でその人を表した割に言い得て妙な名であった。

また花月という名も彼をなかなかに表していると言える。

花は言わずもがな、月に関しては母譲りの銀髪は月の光のようであり、またその容姿は中性的で美しい。花月といえば美しいものの代表である。加えて月は水鏡とも言うことから四系統で表すなら水に属するものであると言えなくもない。しかし花月とはずいぶんと褒め殺しの名であるが故ヴァレリーは照れたのである。

「その歳で既に二つ名を持つとは頼もしいですね」

ワルドが関心したように言うと隣の小さいのもといルイズが口をはさむ。

「ワルド様も閃光という二つ名をお持ちじゃないですか！とてもかっこいいワルド様らしい名だと私は思います！」

「あっはっは、ありがとう、優しいルイズ」

またもや髪を撫でられて悦に浸るルイズを「仕方がないわね」といった目で見ると二人の姉であった。

ラ・ヴァリエールの地には三日ほどの滞在であった。

その間ヴァレリーは三姉妹とワルドを含めた五人と共に過ごし親睦を深めた。

晩餐会ではラ・ヴァリエール公爵とカトレアに色々と聞かれたもので、なんでもエレオノールが幼いとはいえ男の子を家に招いたのは初めてだということや彼女がカトレアに送った手紙にはヴァレリーを褒める文言が多いことなどを語った。

公爵などは最初は大事な娘が連れてきた男とあって威圧感がたつぷ

りであったが帰り際には「あと十ばかり歳が上であればエレオノールの婿にいいかもしれない」と冗談を言うくらいには彼を気に入ったようである。

またヴァレリーは随分とワルドと仲を深めた。

兄弟がいないヴァレリーにとって凜々しく気立てのいい彼は兄のよくな存在であり、ワルド自身も彼を慕うヴァレリーを弟のように接した。

滞在初日には三姉妹が庭でお茶の席に着くなかその横で魔法の修練を共にしワルドに教えを乞いながらヴァレリーは風を紡ぎ花を舞わせ、得意の水魔法で虹を作り出し姉妹を喜ばせた。

二人を見た姉妹はまるで本当の兄弟のようであったと評している。

ちなみにラ・ヴァリエールの三女ルイズには一番苦労したと後にヴァレリーは語っている。

二女のカトレアと仲良く話をしていれば「ちい姉さまー！」と割って入り、ワルドと談笑していれば「ワルド様ー！」と押しのけられる。

どうにも彼女はヴァレリーに対抗心を燃やしているらしく姉や憧れる人を取られるのではと思っただらしい。

ヴァレリーにとってラ・ヴァリエールの地での3日間は実に色濃いものだった。

最も彼の心に残るのは次女、カトレアの姿。

城に迎え入れられた時より彼女に目ばかりか心も奪われ、そばにいればいつい目で追ってしまう。朝の挨拶に交す一言がただ嬉しく、時折視線が交合えば優しい笑みが脳裏に焼き付く。

彼女がもたらす胸の高鳴りはヴァレリーにとってロマリアの大聖堂の鐘の音にもひけをとらない。彼女を知りたい、また自分を知ってほしいと思うこの気持ちはなんだろうかと自問すれば自ずと答えが導

かれよう。

そう、其れは所謂一目惚れであり、ヴァレリー坊やにとっての初恋であった。

そんなヴァレリーの心境に最も早く気づいたのがワルドだったのは男同士なにか通ずるものがあつたからだろうか。それとも恋に落ちる音でも聞き取つたか、風属性のメイジは音に敏感であるらしい。

それは二日目の晚餐を終え、少し体を動かさうということとワルドとヴァレリーの二人は城内にある修練場にと足を運んだ時のことである

「君はどうやら恋をしているようだね」

軽く体を馴らしながら横目で呟くワルド

「なっ!?!なぜそのような!?!」

「やはりか」

不意を突かれて慌てたヴァレリーが気づいた時にはもう遅くかつさの反応が隠そうとした彼の想いを露呈させる。それはもう見事なまでの釣れようであった。

抗議の視線を送るヴァレリーにワルドは笑って答えた。

「なに、からかっている訳じゃないんだ。悪かったよ、そんな目で見ろな」

「どう見てもからかっている様にしか見えませんが」

「まあ、まあそう怒らないでくれ、お詫びに一つ魔法を教えよう。

僕は風を得意とするから使わないが水の系統の君なら使い勝手もい

いだろう」

そういつてワルドはレイピアの形状の杖を抜くとルーンを唱える。するとレイピアに水が集まり水鞭を成す。ワルドがその水鞭を振ると叩きつけた地面が軽くえぐれる。

「僕では単独の水魔法はこの程度だが君なら修練を積み直ぐに使いこなせるだろう、男なら好きな女の子を守るようにならなくてはな」

そのように言われてしまつてはヴァレリーとしてもこの魔法を覚えてやるうと気概を覚える。実際、新しい魔法を使えるようになるのはメイジであるなら当然喜ばしいことである。

ワルドに従い、ルーンを唱えるとヴァレリーの指輪に水が集まる。媒体が指輪であるため水を掴むという不思議な感覚ではあるが一応の形にはすることが出来た。ただ、形状や長さ、本数といった調節がなかなか難しく、意図した動きにさせるにはこれから先の鍛錬が必要そうだった。

ちなみにこのウォーター・ウィップの魔法のイメージに役立つという事で通常の鞭を振るってみたいもしたのだが今まで一度も使った事がないくせに勢いよく振ってしまったので自分に当たって泣きそうになったのは此処だけの秘密である。

滞在を終え、学院に戻つたヴァレリーは滞っていた庭の手入れをしようと肩まで伸びた母譲りの銀の髪を邪魔にならぬようにと黒のリボンで後ろに結び、鏡でその姿を確認していた。

つつい顔がニヤけるヴァレリーであつたが決して自分の容姿に熱

をあげているわけではなく、女装趣味に走ったわけでもない。彼にとつて結った黒のリボンそのものが重要だった。なぜならそれは想い人たるカトレアから貰った物だったからだ。黒色でシツクな細いそれは長髪の男性も多いハルケギニアではヴァレリーが髪をまとめるのに使っても別段おかしくはないだろう。現に父であるオスマンや仲を深めたワルドも長髪であったし時折髪をまとめている姿も見ることがあった。ただ、ヴァレリーの場合は結った髪のままドレスでも着ようものなら十中八九、女兒と間違われることになるうが。

このリボンをカトレアから貰ったのはラ・ヴァリエール家滞在三日目の夜である。彼女と二人だけで過ごした僅かばかりの時間を振り返ろう。

二日目と同じようにワルドと修練を積み、与えられた部屋にてまどろんでいたヴァレリーはノックの音で目を覚ました。扉を開けたそこに立っていたのは麗しのカトレアであり、一瞬で眠気はどこかへすっ飛んだ。

「カトレア様、何か御用でしょうか？」

冷静を装ってはみたものの内心は高鳴る胸の音が聞こえてしまつのではないかと心配してしまつほどにヴァレリーは舞い上がっていた。

「ふふ、ちょっと頼みたい事があるの。いいかしら？」

微笑むカトレアを見て自分の心境を知られているのではないかと思つてしまう。

聡い彼女の事だからそれも有り得るだろう。

「私で出来る事なら喜んで」

頼みを快諾して連れてこられたのはカトレアの自室。

それはさながら植物園と動物園が入り混じったような趣でありヴァレリーは少し驚いた。

「怪我をしている動物を見るとほっとけなくてね。気が付いたらこんなにとくさんの子達に懐かれてしまったわ。私は体が弱くてあまり外に出られないから大切な話相手ね」

ヴァレリーの表情を読んでそんな説明をするカトレアを失礼とも思うが不憫に思わずにはいられない。

「あらら、そんな顔しないで。この生活も結構楽しいのよ？それでね貴方に頼みたいのはここにある花のことなの」

顔に出てしまったらしい自分の考えを反省しカトレアが示した鉢植えを見る。

それは花こそ咲いているが弱々しく俯いている。

「日の光にはちゃんと当てていますし、水も十分に与えているのですが・・・お部屋ではやっぱりダメなのかしら？」

「ふむ、ゼラニウムにゴデチア、ヘーベですか。そうですね・・・まずはゼラニウムですがこの花は湿気を嫌います。なので日当たりがよく、風通しの良い場所が最適ですね。やや乾燥気味に育てるのがコツですよ、この時期なら水やりの回数を控えめで大丈夫です。次にゴデチア、これも過湿を嫌うので水やりは控えめに。あとこの花に関してはやせている土のほうが良く育ちますよ。最後にヘーベですがこれは剪定と一度寒さに当てる必要がありますね」

すらすらと答えるヴァレリーにカトレアは感嘆の声をあげる。

「まあ、やっぱり貴方に頼んで正解だったわね。知らないことばかりで勉強になるわ。きつと貴方のお庭はさぞかし素敵でしょうに・
・見に行くことができないのが残念ね」

「私がカトレア様の病気を治せればいいのですが・・・」

心底つらそうな表情を浮かべるヴァレリー

「もう、褒めてるんだからそんな泣きそうな顔じゃなくて笑顔を見せてほしいわ。そうだわ、ちよつと此処に座ってもらえる?」

カトレアが促され化粧台の椅子に座るヴァレリーの後ろに立ち、彼の髪を梳かす。

「あ、あの・・・?」

「いいから座ってて、ね?」

戸惑うヴァレリーであったがカトレアが微笑むものだから従うしかない。

恋に勝ち負けがあるかは知らないが惚れた時点で負けかなと思うヴァレリーであった。

「綺麗な髪ね」

「母から譲り受けたものだと聞いております。ですがカトレア様の髪もとても美しいです。その髪も相俟って初めて貴方にお会いした時は女神ではないかと思つたほどですから」

「大げさね。でもありがとう、嬉しいわ」

櫛を置きカトレアが手に取ったのは黒色のシツクナリボン。
ヴァレリーの髪を後ろで纏め、それで結ぶ。

「うん、よく似合っているわ。せつかくの綺麗な髪なんだから大事にしないとね。今日のお礼にはならないかもしれないけれどこれは貴方にあげるわ」

「よろしいのですか？」

「よろしいの。素直に貰っておくのも大事な礼儀よ」

諭すように優しく言ってコロコロ笑うカトレアを見てると心が温まるヴァレリー。

「では、ありがたく頂いておきますね」

その言葉に満足したように微笑むカトレアはやはりヴァレリーにとつては女神のようであった。

思い返せば頬が緩む。あの後も色々話をしたものでヴァレリーはますます彼女に惹かれる一方であり、学院に帰ってからもその熱は冷めることがない。

自分の年齢からいって正直に気持ちを伝えてもどうにもならないことはわかりきっている。

だがしかし、やはり彼女に想いを伝えたい。

悩んだ末にヴァレリーは一つの贈り物をするに至った。

それはヴァレリーが学院に帰ってから十日ばかり経った日のこと。
ラ・ヴァリエールの地で過ごすカトレアのもとに小さな箱とカードが届いた。

「まあ、何かしら？」

添えられたカードには一言

”我が庭に咲いた花を貴方へ”

そして箱にはライラックの香水とそれを飾るクロツカスの花。

「あらあら、ふふ、どうしましょう」

困ったような、それでいて嬉しそうに微笑むカトレア。

なぜならこの贈り物には初恋と青春の喜びが込められていたのだから。

004 (後書き)

なんだこのマセガキは！？自分で書いててそう思う。。。

＝本文の補足をば＝

ライラックの花言葉には「初恋」が、クロッカスの花言葉には「青春の喜び」などがありまして。それをテーマにしていたエレオノール・ルートと思いきやカトレア・ルートなお話でした。当初はカトレアの入浴中に坊やが浴場に来てしまうラッキー・スケベな話でも書こうと思ってたんですが・・・w
ギャグの才能の無さに断念しましたーorz
现阶段ではエレオノールやカトレアが坊やを見る目は気に入ってはいるものの、出来のいい弟を見るものに近い感じですよ。

また今回、二つ名が登場しましたが二つ名は三つほど候補がありました。

「水花」「花月」「箱庭」です。

個人的には箱庭が気に行っているのですが系統が分かりづらいですし蔑称に聞こえなくもないので泣く泣く却下（対立組織とかいれば呼ばせるかもしれませんが）

花月は気障過ぎですね。本文でもありましたが褒め殺しなので却下。残った水花はそのまんま過ぎるかと思ったのですが意味が通るのでこれに。

テイルの月ともなれば陽射しも温かく成り始め、風が花の薫りと共に優しく頬を撫でる。日の光に当たるのはあまり好きではないヴァレリーであつてもこの時期の陽射しは好ましく庭先でハーブテイでもゆっくり楽しみたくなるほどである。

小さな実験室と一つの花壇から始まつたヴァレリーの箱庭も二年半という月日の流れに沿い、さらなる拡充がなされた結果、広さで言えば縦横30メートル四方はあり、小さいながらも水を引き、ため池を新たに新設し水辺の草木の栽培にも着手を始めている。

また実験室の方も同様に増築し水車小屋に蒸留塔、備蓄倉庫と順調に規模が大きくなっていく。まずそんなことはしないがこれらの全てを売り払えば小さな城くらいなら余裕で買えるほどには資産価値があるという。栽培した秘薬や魔法薬の材料は自身が実験で使う以外は多くを学院に格安で卸し、一定の備蓄をしたうえで貴族や商人に少量を売っている。さらに作つた魔法薬は質の良さから高値で取引され、月の収入はシュヴァリエの年金をはるかに凌駕して今年で9歳になるうかという子供が持つ財産にしては馬鹿げている額を保有しているヴァレリーであつた。

最近実験の合間に新設した蒸留塔で酒を作るのがヴァレリーのちよつとした楽しみの一つと成つていてワインを蒸留して香草で風味をつけたアクアビットやラム酒、フルーツを原材料としたブランドーなどを作成している。

しかし未だ酒の良し悪しがわかる歳ではないのもつぱらオスマンやエレオノールの感想を頼りに試行錯誤中である。

オスマン曰く、「お主同様、さっぱりとしてはいるが未だ深みが足り

ない」とのこと。

酒においても人生においても深みを持ち始める歳月を経ていないのだから当然の答えではある。とは言つものの試飲する際は喜んで足を運びに来るのでオスマンの期待は高いのかも知れない。

その期待は酒の味についてか、ヴァレリーの成長についてか。きつと両方なのだろう。

さて、来月になればまた学院には新入生がやってくるがその前には当然、学院を巣立つもの達もいるわけで今日という日はまさしくそんな門出を祝う式典が学院内で催されている。

きつと今頃はオスマンが生徒諸君に向けて祝いの言葉でも送っていることだろう。

今回の卒業生にはエレオノールも含まれているので晴れてよかったと心より思うヴァレリーである。

ただそれと同時にやはりさびしいものを感じずにはいられない。ここ2年において、父であるオスマンを除けば一番多くの時間を共にしたのは彼女だった。

長期休暇があればラ・ヴァリエール家に招いてもらい、虚無の曜日には二人で町に出ることもあった。演劇を鑑賞したり、町にやって来た楽団の演奏を楽しんだり、書籍商を冷やかしたりと。

学院でも実験を手伝ってもらっていたし、議論に花を咲かせた事も何度もある。

不覚にも何度か膝枕をしてもらったこともあるし、本に夢中になり過ぎて怒られてこともある。

軽く頬をつねられることも、優しく髪を撫でられることも、それら全てが大切な物であり、卒業という一時の別れとわかっていてもついつい目頭が熱くなってしまふヴァレリーであった。

学院内の敷地に留められている学生を迎えにきた大小様々な馬車
その仕度を整えた頃になると式典も終わり、学生達が出てきてそれ
ぞれ親交を深めた者たちと暫しの別れの挨拶を交わす。

そんな中、エレオノールも同様学友との挨拶をすませると迎えの馬
車を待たせ、ヴァレリーの庭へと向かった。

相も変わらず美しいその庭に足を踏み入れるとエレオノールの前に
60 سانتほどの小さなゴーレムが現れ可愛らしくお辞儀をすると
これまた小さな鍵穴のついた箱を差し出してくる。

エレオノールがそれを受け取るとゴーレムがトコトコと歩きだし振
り返る。

少し歩いては振り返り、また歩いては振り返る。

どうやら彼は道案内をしているようで、エレオノールはそれに従う
と庭の二画についた。

そこにはなんだか黒茶色になり萎んだ葉と枯れてくすんだ黄色にな
ってしまつた花を持つ一つの木があり、お世辞にも綺麗とはいえな
い。

よりもよつてなぜこのような場所に導かれたのかはわからず、不
思議に思っているとゴーレムが木の前に立ち、再びお辞儀をした。

するとゴーレムは崩れ始め風と共に消えていき、後には一つの鍵が
残った。

「これは、この鍵で箱をあけるってことかしら？ふふ、あの子は一
体何を見せてくれるのかしら」

エレオノールが鍵を手に取り鍵穴に通すとカチッと小さな音と共に
箱が開く。

中から現れたのはじょうろを持った小さな少女、驚いたことにじょうろも少女自身も水で出来ている。少女はエレオノールにお辞儀すると枯れた木に向けてじょうろを振る。するとじょうろから水が流れ、枯れ木に降り注ぐ。

「まあ！」

エレオノールが驚きの声をあげる。

それもそのはずで先ほどまで完全に枯れたように見えていた木が降り注ぐ水を浴び、見る見る元気になっていくのだから。

葉は青く茂り、花は虹色に輝き、芳しい香りを放っている。

「その木はミロタムヌスと言つのです。ご覧になった通り水を暫く断つと一見枯れてしまったように見えるのですが水を再び与えるとたちまち依然の瑞々しい姿に戻るので復活の木とも呼ばれています」
してやったりつといった顔でどこからともなく現れたヴァレリーが声をかける。

「見送りに来てくれないから来てみれば・・・まったく貴方には驚かされてばかりですわ」

「よかった、頑張つて小細工したかいがありました」

折角の門出なのだからとヴァレリーが前々から準備していた彼らしいささやかな贈り物であった。

件の小さな箱には水石を利用した魔法がかけられていて箱を開けると中の少女が水をまいてくれるという一風変わった魔法のじょうろである。

庭を散策しながら思い出話に花を咲かせ、小休止にと庭先でハーブティーを楽しむ二人。談笑の話題はこれからの事についてである。

「卒業後の予定は決まっていますか？」

「そうね、私も今年で18になるし結婚ということもありえますわね。ヴァリエール家は後継ぎとなる子息に恵まれなかったから私が婿を迎える必要がありますし・・・けれど本音を言えば婚姻はまだしたくないわね。研究職にでも就こうかと考えてますわ、幸い学院長からアカデミーへの推薦状を頂いていますし、実家で一度のんびりしたら訪ねてみようと思ってますわ」

「そうですか、エレオノール様は優秀ですからね。父上が推薦状を出すのも当然です。以前提出した研究文書、あれは斬新でした。物質を構成するのは極小の粒であり、その結合の仕方や粒の種類で物質の性質が変わるという考えでしたね。この仮説の証明に成功すれば物質への理解が深まり錬金の精度が格段に上がると思います」

「そう言ってもらえるとやる気ができますわ。なかなか興味を示してくれる人がいなくて。でも一番の驚きは貴方がこの研究文書で私が言いたいことを理解していることですわ。私より9つも年下というのが未だに信じられませんもの。貴方なら私の良き伴侶と成り得るのに・・・。あと10年早く生まれて来ることは出来なかったの？」

「無茶言わないでくださいよ。きっとエレオノール様には私なんかより素敵な男性が現れますよ」

「そんななおざりな態度をとって・・・私なんかじゃ眼中にないってことね。悲しいですわ」

よよよと泣き崩れるエレオノール。もちろんヴァレリーをからかう冗談である。

「べ、別にそのようなことは！」

冗談とわかっていても女性の泣く素振りには男にとっては焦るものがあり、やはりその点ではエレオノールが一枚上手なのは仕方がない事かもしれない。

「いいのよ・・・貴方はカトレアに夢中ですものね。ああ、悲しいですわ」

「ぐっ・・・、それは・・・」

実際カトレアに惚れているヴァレリーとしてはどう答えたものか言葉に窮する。

「今年もあの子にライラックの香水を送ったのでしよう？それもスターチスの花まで添えて。スターチスの花言葉は変わらぬ心。それに私、知っていましたよ、貴方の手帳にあの子の絵が描いてあるでしょう？」

「ちょ！???なぜそれを!!?」

完全にヴァレリーの反応を楽しむエレオノールと隠していた事実を突き付けられ焦りに焦るヴァレリー。彼の秘薬や魔法薬、その他様々な事が書かれた元々の厚さより2倍ほど厚くなった手帳には実際問題、カトレアを想って描いた絵があった。

それはある種の落書きのようなものであったが消すに消せずそのま

まにしておいたものである。

経験がある方もいるかもしれないが意図せず自分の落書きを見られるのは相当に恥ずかしいものである。ましてや想いを寄せる異性の姿を描いたものとあっては冗談抜きで顔から火が出るといふもの。おそらく今のヴァレリーがラグドリアン湖に飛び込めば水温が一、二度上がるかも知れない。

「あんまりからかって泣かせてしまったては可愛そうですから今日のところはこの辺にしておいてあげますわ。もう時間ですしそろそろ発ちますわ」

散々ヴァレリーを弄り倒して笑顔で言うエレオノール

「エレオノール様は時折、意地悪です。そんなことでは将来の媚殿に逃げられても知りませんからね」

頬を膨らませて軽口を言うヴァレリー。せめてもの反抗である。

「あら、そんな失礼な事を言うのはどの口かしら」

「ひたひ、ほおを引っ張らないでくださひ」

結局、頬を捏ね繰り回され、アカデミーでの生活が落ち着いたら遊びに来ることとエレオノールの絵を描くことを約束させられて、エレオノールの馬車を見送ったヴァレリーであった。

馬車が見えなくなるまでエレオノールを見送った後、庭に戻ったヴァレリーを待っていたのは父オスマンである。パイプをふかしながら長い髭を撫でている。

「まったく、イチャイチャしおつてからに。待ちくたびれたわい」

「父上、いつから見ていたのですか？」

「ゴーレムで招いたあたりからじゃの」

「ほとんど最初からじゃないですか・・・覗き見してないで仕事してください。新入生の書類が溜まってたじゃないですか」

「はて？最近耳が遠くなつての。何か言つたかえ？」

「若返りの薬でも作りましようか？この世のものとは思えない苦さですけど」

「そうツンケンするでない。今日はお主に耳寄りな情報を伝えるに来たのじゃ」

「耳寄りな情報？」

「そうじゃ、しかと聞くがよい・・・」

先ほどの耄碌じじいの演技とは打って変わってやたらと思わせぶりな顔を作るオスマンに思わず息をのむヴァレリー。

「・・・ミス・ヴァリエールの・・・」

「・・・エレオノール様の・・・？」

・ ・ ・

「下着は黒じゃったわい！」

「……………」

一瞬の沈黙。思わず想像してしまったヴァレリーがハッと我に帰る。

「このエロじじいがああ！！！！何してんですか！？？」

「お主、今想像しておったじゃろ？」

「べべべ別に想像などしていません！！！」

「鼻血が出ておるが？」

思わず確かめてしまつがオスマンがにやりと笑つ。当然鼻血などは出ていない。

「だあー！なんなのですか！？おちよくりに来たのなら帰ってくださいー！」

「かつかつか、怒るな若者よ。軽い冗談じゃ」

訝しげな目を向けるヴァレリー。オスマンは冗談だと言つが本当かどうかは怪しいものである。使い魔のネズミのモートソグニルを使えば下着の色など簡単にわか

るだろう。

一服盛ってお灸をすえてやろうか真剣に考えるヴァレリーであった。

「さて、本題じゃが今期から魔法薬の授業でお主の庭を使わせて欲しいのじゃ。文献をただ読むよりは実際に目で見て、感じた方が学習の効率は高いからの。その際、時折お主には教師陣の補佐をしてほしいのじゃ。授業の効率もそうじゃがお主の今後の為にもきつと役に立つはずじゃ。なに、ただでとは言わん。引き受けてくれればフェニアのライブラリーへの立ち入り許可をだすぞい」

フェニアのライブラリーとは学院の図書館の中でも教師のみが閲覧を許された貴重な文献を保存する書庫である。知を探求するヴァレリーにとっては魅力的な提案である。

些か授業の補佐は面倒であるが断るほどの理由にはなり得ない。

故にヴァレリーは二つ返事でオスマンの申し出を快諾するに至った。実のところこの申し出には吸血鬼の血をひく息子に社会的な信用を与えんとする父としての画策があるのだがそれをヴァレリーが知るすべは未だなかった。

この年から始まったヴァレリーの庭を使つての授業は概ね好評であった。

また、ヴァレリーは庭の手入れに実験、授業の補佐、空いた時間にはフェニアのライブラリーに入り浸り知識を吸収し、忙しい幼少期を過ごすのであった。

ちなみにエレオノールを見送ったその翌朝、夢に黒の扇情的な下着姿のエレオノールが出てきてしまい、目が覚めたらベットが鼻血で

染まっていたという嫌な事件が起きた。

ヴァレリー坊やはこの秘密を墓場まで持っていこうと心に決めたとかなんだとか。

005 (後書き)

とれあえず幼少期はこの辺までにして次回から一気に成長して学生生活のお話をしたいと思います。やっとタバサが出せる！と思ったのですが既にヒロイン枠が埋まってしまったような気が・・・。

今回のお話はヴァレリー坊やを少し子供っぽく書きたかった点とエレオノールとの親睦の深まりの様子、フェニアのライブラリーに幼少から入っている設定が欲しかったのでこのような形になりました。

一枚上手な女性に遊ばれているのを書くのは楽しいですなw

今回のプレゼントである魔法のじょうろですが本当は何か凄い物かと思っていただけですがまったく浮かびませんでした><縁を水に流すとか良からぬイメージもあつたのですがきっと二人の仲はそんなことでは揺るがないのでしょうか。

ちなみにじょうろの少女ですがちっこい翠星石が笑顔で水を撒いてくれるそんなイメージ。。。

あとミロタムヌスは実際に存在する木ですが花の再生や水をかけても一瞬で元通りとはいきませんのであしからず。きっと魔法的な何かw

トリステイン魔法学院においてその入学を許される年齢は明確に決まっているわけではないが概ね女子なら15歳、男子なら16歳で学院の門をくぐるのが国内における一般的な認識であり、なんらかの理由、例えばラ・ヴァリエール家の二女、カトレアのように病弱であったり、下級貴族出で領地を持たない者は学院に通わないこともあるが、学院を卒業することは貴族としての徳を高める一つの事柄であるのが事実で今年も学院では多くの学生を迎え入れる準備をし始める季節となった。

ヴァレリーも16歳となり夏になれば17歳、今年から学院に通うことになっている。

今年の新入生には陸軍元帥を輩出した名門・グラモン伯爵家の四男やトリステイン王家と水の精霊との盟約の交渉役を何代も務めてきたド・モンモランシ家の娘、また言わずと知れた大貴族ラ・ヴァリエール家の三女、ルイズもその名を連ねている。

ことルイズに関して言えば幼少より深めたラ・ヴァリエール家との親睦により、年に数回は訪ねていたので既知の仲ではあるが他の者達は社交の場で多少の見聞がある程度なので今まで年上との付き合いがほとんどであったヴァレリーとしてはなかなか楽しみであった。

年上との付き合いと言えばラ・ヴァリエール家の長女エレオノールは今でもアカデミーで研究に勤しんでいる。今年で26になる彼女はそろそろ結婚でもして落ち着いてもいい歳の頃ではあるがラ・ヴァリエール家を継ぐ男性とあって彼女のお眼鏡は相当に厳しい。

婚姻の申し出はあるが悉く実を結ばないのはそういつた事が関係している。以前ヴァレリーが彼女のもとを訪ねた時は「ろくな殿方がいない」と酒の席で愚痴っていた。普段は優雅で品のある彼女が酒も入り、ブーたれる姿はいつもより幼く見えて可愛いと思ってしまうたのはヴァレリーの心の内に留めてある。

また二女カトレアは18歳になるとラ・ヴァリエール公爵より領地を分け与えられており名字が変わりラ・フォンテーヌとなつていく。これは公爵が病弱で家を出られず嫁ぐことができないカトレアを不憫に思つた結果であり、つまり不自由な彼女でも婿を迎えるという形で結婚が可能であることを意味している。現在23歳の彼女はやや鼻眞に見てはいるが美しく淑やか、それでいて可愛らしくどこか儂げな女性である。

婚姻の申し出をするものも多くヴァレリーにとっては気が気ではない。

幸いカトレアは全ての申し出を断っているが彼女の心を射止める者が現れる可能性は否定できない。

贈り物や行動に気持ちを含ませてはいるが未だカトレアに自身の気持ちを持ちを明確な言葉にして伝えていないヴァレリーはいよいよ正面切つて告白に踏み切ろうと考えている。

実に10年越しの恋となり、カトレアからの好意も他の求婚者よりは高いと自負しているが初恋は実らないとも言つし六歳も年下なのがヴァレリーの不安を掻き立てる。

もしもカトレアから「ごめんなさいね、貴方は弟としてしか見てないわ」などと言われようものならただでさえこもりがちなヴァレリーは完全に引きこもりになりかねない。

人は皆、平等に歳をとるがなるべく自分が歳をとつてそれでいてできるだけ早く想いを伝えたい、あれこれ考えた結果、決戦は17歳

になる夏と心に決めた青春真つ只中の坊やであった。

ちなみに名目上はカトレアが領主となっているラ・フォンティーンの屋敷にはヴァレリーは知らないがカトレアが育てている花壇がある。そこには以前ヴァレリーが送ったこともあるクロツカスが植えられているのだがこの花には青春の喜びという意味のほかに「貴方を待っています」という意味もあつたりする。彼女もまた自身の気持ちを明確な言葉にはしていないがはてさて彼女は誰を待っているのか、敢えてここでは語らずにしておこう。

さて、近況報告はこの辺にして話を進めたいと思う。

入学式を二カ月後に控えた現在、ヴァレリーはオスマンと二人、本塔の最上階にある学院長室にて書類仕事の真つ最中である。扱う書類は今年の新入生に関するもので、入学を希望する貴族から送られてきた書類に不備がないかを確認し、それをもとに一覧を作成、入学金の支払いを済ませたかを帳簿と照らし合わせた後、男女別、系統別に分けていく。

ヴァレリーが仕分けをし、オスマンが入学許可の書状にサインを認める。由緒正しき魔法学院の書状とあつて羊皮紙などではなく質の良い紙が使われており、インクを乾かすために何枚もの純白の書状が広げられている。

ちなみにこれは余談だが、入学金を納めることからわかるように魔法学院は無償ではない。国からの支援金と貴族から集める学費で運営されていて、赤字が出たからと言っておいそれと潰れるようなものではないが金があることにこしたことはない。いい教育にはそ

れなりに金がかかるものである。

学院では系統魔法の他に も一般教養として魔法薬学や魔法生物学なども教えるがこちらの授業は系統魔法の授業より金がかかる。幸い授業の中で1、2を争う出費部門である魔法薬学は試料をヴァレリーから格安で購入しているためここ数年の経費の負担は少しは軽くなったもののほかの授業、たとえば魔法生物学などはマンティコアやヒポグリフ、グリフ オンなどの維持費は馬鹿にならない。

また貴族が住まう寮とあつて修繕費をはじめとする諸経費はかなり大きい。今しがたオスマンが手掛けている書状にしても100人近い学生に送るとなるとそれだけでも経費がかさむ。この時代、手紙を出すのにも金がかかる。まして貴族宛てなので庶民と同じ郵便網を使うわけにはいかず、遠方の地に大事な書状を送る際は風竜便を使うがこれも値が張る。普段はお気楽なじじいにしか見えないオスマンであるが教育への想いは学院長を務めているだけあつて高く、毎年言葉巧みに国から支援金をふんどくってくる。そのせいか国の財務を担当するデムリ財務卿とは仲が悪いらしい。貧乏なトリステイン王国とあつて教育の長たるオスマンも国庫を担うデムリ財務卿も苦労しているようである。

話を戻そう。

一足先に仕分けを終えたヴァレリーがお茶でも入れようと椅子から立ち上がり凝り固まった体を伸ばそうとグツと背伸びをする。成長期を迎えたヴァレリーは身長は高いが線が細い。なにせ研究に読書と庭の手入れ以外はあまり動かない。容姿についていえば幼少からの中性的な顔つきからは幾分男らしくなつたはもののやはり女装でもしたら男から言い寄られかねない。

威厳がある顔かといえればあまりないかもしれない。

オスマンやワルドのように髭でも携えてみれば少しは箔が付くかと思つたヴァレリーがヴェリエール姉妹に一寸相談したことが少し昔にある。エレオノールはもつたいたいないと大反対、カトレアには散々笑われたあげく、ルイズに至つては頭は大丈夫かと心配された。そんなに似合わないわけはないだろう。失礼な人達だつと試しに付け髭で試してみたら長女は下を向いて笑いを堪えているし、次女は笑い泣き、三女はお腹を抱えて大爆笑である。鏡を渡され自身の姿を見れば、そこには道化が一人。なるほど、まったく似合つていなかった。

笑い過ぎて涙を流すカトレアがまた格別に魅力的なことと人は自分のことには案外疎いのかもしれないと改めて学んだヴァレリーであつた。

戻したそばから話が逸れてしまつたが今一度話を戻そう。

立ち上がったヴァレリーを見てオスマンが言う。

「わしゃ、ブランデーがいいのう。ほれ、お主が作つたリンゴ入りのやつがあつたじゃろ？あれが飲みたいのお」

血は繋がつてはいなくともやはり親子、オスマンにはヴァレリーが何をしようとしているかわかるらしい。

「まだ、仕事中でしょうに。酒は終わつてからにしてください」「ええい、よいではないか。ちよつとでいいんじゃ、ちよつとで」
「ダメです。そもそも休み休みやるからいけないのです。一気にやつてしまえばそんなに時間もかからないでしょう。それをすぐに休

憩と言ってパイプを吸うから」

「かっ！小姑のようなことを言いおつて。年寄りと若い者を一緒にするでない！流れる時間が違うのじゃ！」

「はあ、子供の頃は父上ももう少し威厳があつた様に思うのですが・・・」

ため息混じりに嘆くヴァレリー

「わしのこのような行動がお主の自主性を育てていることに気づかんとはお主もまだまだ子供じゃの」

「ええ、ええ、私は子供ですよ。加えて言うなれば私は新入生です。新入生が新入生を迎える仕事をするのもおかしいですね。さて、私是由緒正しい魔法学院に入学するにあたって勉強でもしておこうと思います。でわ、父上、お一人で頑張ってくださいね」

「待てーいい！わかった。酒は後でいい。いたいけななじじい一人にせんでくれ。まったく可愛いげのない成長をしておつてからに・・・誰の影響かの。だいたいお主、既に学院の座学程度ちよろいもんじゃろ」

「まず間違いなく、父上の影響だと思えますが。それとまあ、実技は別として座学はそれなりには覚えています」

オスマンが言う様に座学については実のところヴァレリーは学院に通う必要がないほど優秀である。0歳から学院で過ごしてきたヴァレリーは授業に忍び込むこと数知れず、元来頭の回転が早いこともあり知識の吸収は著しい。加えて幼少からのフェニアのライブラリー入りである。たとえ今すぐアカデミーで働き出しても問題ないだろう。

生涯学習は伊達ではない。

加えて言うなら魔法のレベルも火はからっきしだが水はトライアン

グルにまで成長しているヴァレリーであった。

「さて、そんなガリ勉のお主には今年の一年生の魔法薬学の講師を務めてもらうぞい。」

「はい？」

自身の耳を疑ったヴァレリー。念のために言うがヴァレリー・ヘルメス、16歳。今年からトリステイン魔法学院に入学予定である。

「一年生の魔法薬学の講師を務めてもらうぞい。」

「あの・・・父上？重ねて言いますが私は新入生なのですが・・・？」

「一年生の魔法薬学の講師を務めてもらうぞい」

「ですから私は新入」一年生の魔法薬学の講師を務めてもらうぞい」

「梃子でも考えを変えそうにない父親を見て折れたのは息子である。」

「はあ、わかりました。謹んで務めさせていただきます」

親が子の考えがわかるように子も親の考えはそれなりにわかるものでヴァレリーは推測する。

ふむ、人件費の削減？いや、その意味もなくはないがそれだけじゃない。大方、知識は蓄えるだけではその価値は色あせるといったところか。父上は知識は使ってこそその真価を發揮すると言いたいのだろう。また己の器を大きくするといった意味も含まれているか。同学年が講師となれば良く思わないやつも、なめてかかるやつもいるだろうしな。その点をどうするかも課題なのだろう。

「ふむ、大体わしの考えはわかっているようじゃな。これはわしの自論じゃが教育において、ひいては人生において大事なのは広い心と厳しさを併せ持つことと探究心と遊び心を忘れぬことじゃ。精進せい。我が息子よ。それともう一つお主に任せたいことがあるんじゃないが」

「まだ、何かあるんですか？」

「そんな露骨にめんどくさそうな顔をするでない。ほれ、広い心じゃ」

「厳しさも併せ持つように今しがた教わりましたが。まあいいです。して、もう一つとは？」

「うむ、この二人の事じゃが・・・」

仕分けした書類から2枚を抜き出し机に並べるオスマン。

並べられた書類は留学生のそれであり、そこにはキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストーとシャルロット・エレエヌ・オルレアンの名義が書かれている。

仕分けをする際、一度目を通してはいるが再度その書類にヴァレリーは目を落とす。

前者のツエルプストー家はゲルマニア貴族。ヴァリエール家と国境を挟んだ隣に位置しトリステイン・ゲルマニア両国の戦争ではしばしば杖を交えた間柄である上、ヴァリエール家の恋人を先祖代々奪ってきたという因縁があると聞き及んでいる。肩書きを見れば火のトリアングルという学生にしては優秀過ぎるほどであるのに本国ゲルマニアのヴィンドボナ魔法学校を中退とある。

後者のオルレアン家といえばガリア王族であるが大国ガリアからわざわざトリステインの魔法学校に来るうえにタバサという偽名を使

うとのことなのだから何か問題を抱えていることが窺える。

王族が学院に通うこともなくはないが現トリスティン王女のように学院には通わず特別教育がなされることが多い。他国の王家の事情について博識なヴァレリーといえど明るくはないが現ガリア王、無能王ことジョゼフ一世の治世においてはじき出されてしまったのだらうと憶測するヴァレリー。

こちらもトリアングルレベルで系統は風、驚いたことに14歳にして既にシュヴァリエとして爵位を得ていると書類には書かれている。爵位としてはシュヴァリエは下位だが実力とそれに見合った功績なくしてこの地位は得られない。魔法の才能と彼女の苦労がそれだけで読み取れる。

「一から十まで面倒を見るとはいわん。彼女らも幼子ではないのじやからな。しかし、気にかけておくように。なに、友人として共にあれば良いのじゃ。案外、良き友人として一生の付き合いになるかも知れんしの」

「わかりました。国外の友人を持つというのも折角、人が集まる学院生活なのだから面白いかもしれせんしね。」

「ああ、それからもう一つあったわい」

「もう聞きませんよ」

「おや、そうかの？お主宛てに手紙が届いておるのじゃがな。仕方ない。わしが読んでやろうかの。」

オスマンが懐から取り出したのは2通の手紙。見ればエレオノールとカトリアから送られたものである。オスマンが封を切るうとしたのを見てヴァレリーが手紙をひったくる。

「私宛の手紙です！父上と言えど許しませんよ」

「冗談じゃよ」

二人からの手紙には入学を祝う言葉と末の妹であるルイズをよろしく頼むと綴られている。特にエレオノールからの手紙には彼女がいかにもルイズを心配しているかがうかがいしれる。原因はわからないが未だコモンマジックすらまともに成功しないうえに性格も家族の中では一番似かよっているので学院で苦勞するだろうと。エレオノールもヴァレリーと出会うまでは学院での生活はあまりうまくいってなかったものである。

気にかけるべき人物が3人に増えたが他ならぬ二人の頼みである。またルイズは周りが年上ばかりの生活をおくってきたヴァレリーにとつての初めての同世代の友人でもある。誰から言われるでもなくルイズに何かあれば手をかすことに何ら謂れはない。

オスマンが書類仕事を終えたのはヴァレリーが手紙を読み終え、お茶を入れてから少し経った頃。椅子から立ち上がり腰をトントン叩くと口を開く。

「ふー、やっと終わったわい。支度をせい。町にでるぞい。」

「今からですか？着く頃には日が沈んでしまえますが？」

「よいのじゃ、お主に入学祝いをくれてやるうと思つての。あとブランドーを忘れるでないぞ。わし、頑張つて仕事をしたじゃろ？」

「はいはい、わかつてますって」

馬車に揺られること数時間、酒も入ってほんのり顔の赤い二人が町に着いたのは月の優しい光りが町を包み、家々からもれる灯りと談笑の聲が飾るそんな頃合い。

オスマンの導かれるままたどり着いたのは大通りから外れた一軒の

お店。

もれるのは談笑の声ではなく嬌声。夜の蝶が舞う淫靡なお店である。余談だが商いの歴史において春を売るお仕事というのは人が物を扱う様になった当初からある。いつの世もそれなりの需要があるもので時代を経る毎に彼女達が得る金額は多くなつていく。高級娼婦ともなれば庶民が畑を耕して得る金額の何十倍もの金を手にすることもあるとのこと。

「お主は花は摘めど華は摘んどらんからな」

上手いことを言つたつもりかオスマンはしたり顔である。

「余計なお世話です！いいですか父上、私には心に決めた人がいるのです！」

「ヴァリエール家の二女じゃろう？知つておるわい。じゃがな、仮にお主の想いが叶つたとしてことに及んだ時、手間取つてみる、男として恥じじやし女性に対して失礼じゃぞ。」

「それは・・・」

知識として知つてはいるが経験はないヴァレリーである。

ちなみになぜかフェニアのライブラリーに保管されていた場違いな工芸品である絵とは思えないほどの精巧な挿し絵が入った艶本を読んだ時は危うく本に鼻血を足らすところだった。興味がないと言えば嘘になる、ヴァレリーも男である。

しかし、いや、しかし！

一寸悩んだのがいけなかった。

「ええい！いいから行ってこい！」

あるうことかオスマンは杖を抜き出しヴァレリーを風の魔法で縛るとそのまま店内へと押しやった。

「あら！いらっしやい、ようこそ『月夜の女神』亭へ、可愛い坊や」
長いキセルをふかしているきわどい服装のおかみがカウンターで妖艶な笑みをこしらえる。

「さて、お相手はどの子がいいかしらね。ふふ、なんなら私でもいいよ」

「こやつは初めてなのじゃ、男にしてやってほしい」

それだけ言うとオスマンは金の入った袋をおかみに渡し、何処かへ行ってしまふ。袋の中身を確認しにっこり笑うおかみが口を開く。

「これは随分と気前がいい。うちは貴族様のお客も多い。トリスタニアにだってうちほどの質の店はそうはないよ。忘れられない夜を坊やに贈るわ。メル！リリア！とびっきりのお客さんだよ！」

おかみの声に応じて現れたのは二人の女性。一人は童顔で小柄な女の子で切り揃えた肩までの明るい髪とフリル付きのドレスをまとった元気そうな子である。もう一人はシックなドレスに身を包んだスラっとした女性で夜会巻きにした髪がよく似合っている。こちらは大人な魅力を感じる女性である。

「こんばんわあ、お兄さん！私はメルチエ。メルって呼んでね」

ヴァレリーの腕に抱きついた小柄な女の子が自己紹介をする。服越

しからでも伝わる柔らかな感触にたじろぐヴァレリー。見かけによらずいけない果実を有しているらしい。

「私はリリアだ。よろしく坊や。メル、お客様をお部屋へ」

「はい。こつちだよあ、お兄さん」

腕を引かれるままに通された部屋は大き目のベットが一つにお洒落な丸テーブルが一つ。

魔法の蓄音機からは静かに音楽が流れている。

ちなみにここまではいはい来てしまったヴァレリーだが心の内ではそれなりに葛藤していたりする。

しかし結果として此処まで来てしまったのだからやはりヴァレリーも男なのである。

テーブルを挟んで椅子に腰かけるとリリアがワインを注いでよこす。タルブ産の上物だそうだが緊張のあまり味はよくわからない。

ワインを飲んでいるうちにメルチェがベットメイクを終え、香を焚く。

脳髓を刺激するような官能的で悩ましい香りである。

「じゃあ、またあとでねえ。お兄さん」

メルチェが部屋を後にするとリリアに腕を引かれベットへと倒れこむ。

上位に位置するリリアが一枚一枚とヴァレリーの服を脱がしていき自身もその裸体をあらわにする。

形の良い乳房と丸みをおびた女性的な腰のライン。

女性の裸体とは確も美しいものなのかと思ってしまうヴァレリー。

「ん・・・」

髪を撫でられ、唇を重ねる。

香のせいもあるだろうがどうにもヴァレリーは年上の女性に髪を撫でられるのに弱いようである。

さて、夜は長いがこの後がどうなったかは此処で書くことは憚られる。

なにせこのお話は全年齢対象である。

ただ、リリアとメルチエが代わる代わる部屋を訪れては濃密な時間を過ごしたようである。

翌朝目覚めたのは『月夜の女神』亭でのベッドのこと。

隣でメルチエがやすやすと寝息を立てている。ヴァレリーより年上らしいが良くて同い年くらいにしか見えない彼女。寝返りを打つごとに胸が見え隠れするのでついつい昨晚のことを思い出してしまふ。

まさか、吸われるなんて・・・

別に、何、を吸われたかは此処では書かない。

ベッドをそつと抜け出し、身だしなみを整えるとリリアが部屋に入ってくる。

「おはよう、坊や。いやミスタ。もう行くのかい？」

「ええ、だいぶ長居してしまいましたし」

「そうそう、ミスタ。うちは殿方に素敵な時間を贈る店だけど仕事柄色々な情報が流れ込んでくるんだ。例えばどこぞの貴族様の隠し子が何人いるかとかね。そういつた意味でもうちは質のよい店だよ。気に入ったなら鼻屑にしておくね。私も脂ぎったジジイよりミスタの方がいいしね」

「か、考えておきます」

「さて、お見送りだ！起きろメル！お客より寝ているとは何事だ！」

「ふえ？うん。お兄さんもういつちやうの？」

「ええ」

未だベットでもぞもぞしているメルチエ。リリアがシーツを引き剥がす。

「や、ちょ、きゃー！」

転げ落ちるメルチエ、裸なので目のやり場に困る。

メルチエが身だしなみを整えると店の入り口まで送られる。

「では、ミスタ。また会いに来てくれるのを待っているよ」

「またねえ〜。お兄さん」

手を振る二人を後に『月夜の女神』亭をでるヴァレリーであった。

『月夜の女神』亭を後にしたヴァレリーはオスマンを探すために町をふらついた。

どこでおちあうか決めていなかったのである。

やっとのことで見つけたオスマンが一言。

「うむ、お主も一皮むけた、いやむかれたの」

破廉恥なじじいである。

今回は学生生活の導入的なお話のつもりでした。

いや、しかし後半が。。。

告白を決めたそばから何をしているんだ、坊やは。

いい子なヴァレリー坊や、唯一の過ちと言ったところでしょうか
このあとちよくちよくネタにされるかもしれません。

今回は原作の設定に付け加えたのが幾つか。

まずは魔法薬学と魔法生物学です。魔法学院だからあっても不思議
じゃないとは思いますが大丈夫ですかね><

また『月夜の女神』亭ですがこのお話では原作の「魅惑の妖精」亭
的な立ち位置です。もちろん「魅惑の妖精」亭も存在するのですが
そちらはサイトやルイズに任せて坊やはこちらに。物語の後半で使
おうと思っている場所なので今回やや無理やり気味にねじ込んだ形
です。

それとヴァレリーの女性への耐性のアップをさせたかったです。
キュルケが出てきますし。。。エロスにもっていくつもりはないで
すが。

うーん、欲しい設定ではあったのですがやらかしたかな。。。
御容赦ください><

現在は春の香り漂うフェオの月、第二週、ヘイムダルの週の始め、学院には入学式を控えた新入生が集まり出している。入学式の日時は決まっているがそれまでに到着すればいいわけで早い者は一週間前に学院の土を踏んでいる。もっとも、一番早くに学院の土を踏んだ新入生はヴァレリーに他ならない。なにせ生まれた時から学院にいる。

入学式の二日前ともなれば新入生がぞろぞろと馬車に揺られやってくる。学院の門の前には大小様々な馬車が長蛇の列をなしている。各貴族の使用人も含めると普段より倍近い人数が学院に集まっているので学院で働く使用人たちは大忙しである。

そんな喧騒を余所にヴァレリーは目下庭の手入れ中である。早いもので彼の庭も10年目、広さは縦100メートル、横75メートルほどに拡大されており、水石を利用して常に清らかな水が流れ、火石を利用した温室まである。特に温室には金がかかっており、一面ガラス張りに加え、適切な湿度と温度に調節できる装置を火の系統の教師であるコルベールと考案し稼働中。この装置のおかげで季節をずらした栽培と気候柄不可能であった草木の生育が可能になった。

装置の完成とその成果にヴァレリーとコルベールは小躍りしたとか。研究好きな二人は歳は離れていても気が合うらしい。

かなりの広さになった庭だがもちろんヴァレリー一人で手入れをするには限界なので3人ほど学院の庭師を借りている。手当は一人当たり月15エキュール、学院の方からもお給金が出るので平民の個人が稼ぐ額としてはかなりいい方であるだろう。

また実験室の方も広くしており、蒸留塔や備蓄倉庫はさらに大きくなり、棚には薬品や試料が幾つも並び、大きな長机は実験器具で占領されている。その少し脇にはびっしりと本が詰まった本棚と大きな丸テーブル（こちらは主に勉強用の机である）、その奥にベツトやら生活品が並ぶ。貴族が住むような空間ではないかもしれないがヴァレリーにとっての城である。下手をすると三日は籠りっ放しで出てこないこともあるという。何時のころから寝起きもこちらでし出したので元々の自室はほとんど使っておらず物置と化している。本来学生は寮で生活するがオスマンから魔法薬学の試料の管理として寮に住まなくてもいいとの許可をもらったのでこちらがヴァレリーの実験室兼居住スペースである。

草木の剪定をしていると庭師の一人に連れられて見知った顔の少女がヴァレリーのもとにやって来た。桃色がかったブロンドで小柄な少女、ヴァリエール家の三女ルイズである。

「やあ、ルイズ。入学おめでとう。それと我が箱庭へようこそ」

「ありがとう、貴方もおめでとう。夏以来ね。馬車の中からこの庭が見えたから学院に入る一足先によってみたんだけど、驚いたわ。エレオノールお姉さまがやたら褒めていたからどれほどのものかと興味があつただけけど、まさかこれ程とはね」

「私のささやかな自慢だからね。立ち話もなんだ、お茶でも入れよう。馬車に揺られるのも疲れただろう」

研究室前の庭を見渡せるテラスに場所を移し、歓談する二人

「そつえば貴方はどのクラスなの？」

「私はソーンだな。君は確カイルだったな」

「そうなの？一緒じゃないのね。クラスに見知った顔がいてほしかったんだけど」

「なに、一年時はクラス合同で授業することも多いから顔を合わせる機会も少なくないはずだ」

一学年はソーン、イル、シゲルとそれぞれ伝説の聖者の名が振られた三つのクラスに分けられる。

クラス分けの際に立ちあっていたので概ねの内訳は知っているヴァレリー。

先に彼が言ったようにルイズはイル、グラモン伯爵家の四男やド・モンモランシ家の娘はシゲル、ヴァレリーやタバサ、キュルケはソーンとなっている。ヴァレリーがこの二人と一緒になのはオスマンの仕業であるのは言うまでもない。

一つのクラスにトライアングルのメイジが3人集まってしまったがクラス対抗で競うようなことがなければとりあえず問題はないだろう。

「でも、私……魔法が……」

一変して暗い顔をするルイズ。なぜか全ての魔法が爆発してしまうので未だコモンスペルすら使えない彼女は学院生活に不安を覚えるのに無理はないかもしれない。

「やはり爆発してしまう？」

「うん、試してみる？」

「いや、遠慮する。庭が消し飛んだら困るし」

「んな、別に消し飛んだりしないわよ！せいぜいこのテラスが無くなるくらいだわ！」

「それも困るんだが……。また今度、安全な場所で見せてもらおうから。友人の魔法で死にたくないしな」

意地悪な顔をして言うヴァレリー。ルイズとは長い付き合いなのでこのくらいの軽口なら二人の仲でなら大丈夫だろう。ヴァレリーとしては大切な友人でもあり、歳が近い妹のような存在、それがルイズである。

「もう、なによ。可愛い友人が困っているっていうのに！」

「悪かった、悪かった。お詫びに私のクックベリーパイを献上しよう」

「お茶のおかわりも要求するわ」

「はい、はい」

ヴァレリーがお茶を注ぎ、ルイズがパイを頼張る。

「でもまあ、真面目な話、君は魔法の才能がないわけじゃないと思うんだ」

「どの呪文を唱えても爆発しかないけど？」

「そうだ。その爆発の威力だけ見ても軽くトライアングルクラスのスぺルはあるだろう。クラスが上がれば魔法の威力も上がる。言いかえれば既にトライアングルスぺルが使えるだけの力があるということにならないか？私も一応水のトライアングルだが君と真っ向からの攻撃魔法の打ち合いをしたら私の負けだろうし、下手をしたら学院の生徒の中で君の爆発の威力に敵う者はいないかもしれない」

「うーん、そういう考えもあるのね。でも失敗は失敗。はあ、せめてコモン・マジックくらいはちゃんと使えるようになりたいわ。このままじゃ二つ名も付きやしないわ」

ブーたれるルイズ、エレオノール様が酔った時もこんな感じだった

なっと思つヴァレリー。やはり姉妹なので行動が似ている。

「全てを消し飛ばす『爆発』のルイズなんてどうだい？」

「却下よ。可愛くないもの。でもこのままだと本当にそんなのが付きそつで嫌ね。貴方が羨ましいわ、『水花』なんて美しい名があつて」

「男らしいとは言い難けどな。やはり髭でも・・・」

どこから取り出したのか付け髭を手に持つヴァレリー。

「ぶっ、やめて。思い出しちゃうから。似合つてなかったから！」

あまりルイズが卑屈になつても困るのでおどけて見せるヴァレリー。やり口がオスマンと似てきているのは親子だからだろう。

「さて、そろそろ学院の門をくぐりに行こうか。案内するよ、ここ
の図書館は何時間いても飽きないぞ」

立ち上がりルイズの頭にぽんつと手を置くヴァレリー。

「確か柵が30メートルはあるって聞いたんだけど、それだと私、手が届かないわ」

必然的に上目使いでヴァレリーを見ることになるルイズだが流石は美少女だけのことはありその仕草は可愛い。

「肩車でもしようか？」

「む、貴方は私を子供扱いし過ぎよ。淑女はそんなことしないわ」

ヴァレリーの手を振り払い眉をひそめるルイズに今度は手を差し出

す。

「それは失礼いたしました。では改めて。レディ、私が学院を案内致しましょう」

「まったく貴方は。そうね、お願い致しますわ、ジエントルマン」

手を取り立ち上がると二人は花のアーチを抜けて学院へと向かった。

正門の前に列をなす馬車から見えることからわかるようにヴァレリの庭と研究室は学院の外壁の外にあり、正確に言えば正門から向かって右側、水の塔から外壁を挟んだ向かいに位置する。

正門を抜けた二人は多くの馬車が止めてあり、今年の新入生を見物に来た在校生がちらほら見えるアウストリの広場を通り外壁沿いにぐるりと一周した後、本塔にある図書館へとやって来た。

天井も高く、広い空間には古書の独特な匂いが漂う。

ふと前を見ればそこには体格に似合わず大きな杖を持った青い髪の小柄な少女がぼつんと立っていた。制服ではないので新入生であることがわかる。

首を小さく左右に振っているところから察するにどこにどういった本があるかわからないのだろう。

トリステイン国内において青い髪は珍しい、加えてガリアのオルレアン家の青い髪の色は知れている。おそらく彼女がタバサことシャルロット・エレヌ・オルレアンだろうと憶測をつけるヴァレリー。父オスマンからも言われているシルイズに図書館の説明をするのだから彼女もついでのと思いい少女に声をかける

「ミス・タバサ」

声をかけたのにも関わらず一向に返事はなく振り向いてすら来ない青い髪の少女。

「ん？知り合い？」

「いや、知り合いではないが確か同じクラスになった子だったと思うのだが・・・違ったのかな？」

「その青い髪の大きな杖を持った君」

もう一度呼びかけるが反応はない。ほかに青い髪の子も大きな杖を持った子も周りにいないので呼ばれていることはわかってはいるはずであるし、書類には耳が悪いとは書かれていなかったので聞こえているはずなのだが。どうやら無視されているらしい。それに気づいたルイズが少女に声をかけようとする。

「ちょっと、あな「いや、いいよ」「」

それを止めてヴァレリーが口を開く

「急に声をかけてすまなかったね」

猶も彼女は振り向かない。

「それでいいの？完全に無視されていたけど？」

「まあ、いいさ。彼女もいきなり知らない男から声をかけられても困るだろうしさ。同じクラスなんだしその内、話す機会もあるだろう」

「まあ、貴方がそれでいいなら私がとやかく言う事じゃないけど・・・」

「そんなことよりこの図書館の説明を少ししよう」

少し声を大き目にして無視をぶつける少女にも聞こえるように話す
ヴァレリー

「大まかに言って向かって左の二画が系統魔法関連の棚になるな。
奥から水、土、火、風の順だ。中央の二画は魔法薬学や魔法生物学、
歴史なんかの系統魔法以外の本が置いてある。右は小説やその他の
書き物。奥には自習用の机が並んでいて、さらにその奥にはフェニ
アのライブラリーがある。こちらは教師や特別な許可がないと入る
ことは出来ないけど。貸出は入り口か奥のカウンターでカードに
サインをすれば大丈夫だ。ちなみに本を汚したり、壊したりすると
司書が悪魔の形相で襲いかかってくるから注意が必要だ。私も以前
実験に失敗してこの本を何冊かダメにしてしまったことがあるん
だがあの時は恐ろしかった……。罰としてこの本の棚卸をやら
されたんだがいかにせん数が数だけに一日がかりでやっても2週間
以上かかった」

説明を終えると始めて青い髪の少女、もといタバサが反応を示した。
といつてもこちらに振り向いてヴァレリーを少し見ただけだが。

「お役に立てたかな？」

タバサは小さく頷くと短い礼だけ述べて奥の棚へと進んでいった。

「愛想のない子ね」

「まあ、人それぞれだからな。しかし入学前から図書館に来るくら
いだ、本が好きなのかも知らないな。本が好きなのはいいことだ」

うんうんと頷くヴァレリー

「貴方も大概本好きよね」

「知らないこと、新しいことに触れるのは楽しいからね」

それから図書館で少し物色した後ルイズを寮まで送り二人は別れた。ルイズも数冊、自習用に借りたようである。入学式まで暇だから勉強するのだそうだ。

魔法は爆発しかしないが元来ルイズは頭がいいし、努力家である。

ルイズに負けまいとヴァレリーも研究室に戻る事にした。

学生の立場として座学を勉強する必要はさほどないがヴァレリーに至っては教師として授業をしなくてはいけない。どういった薬の調合が学生の興味をそそのめるのか、難易度はどれくらいがいいのだろうか？そういつた事を考えながら当面の授業計画を立てる。

大方の授業計画をまとめ終わり軽く庭を見て回ったあと、ヴァレリーはローブに着替え、肩まで伸びた髪を黒のリボンでまとめると授業で使うための薬を幾つか作りそれが終わると夕食を誘いにルイズの部屋まで訪れた。

「もう、そんな時間？」

「どうやら勉強に没頭していたらしいルイズは扉から顔を出すとそんな事を言う。」

食堂は多くの学生で賑わっていて仲間内で談笑する者や新生同士でどこちない会話をしている者、新入生に話しかけている在校生が多く見受けられる。やや女子生徒を口説く男子生徒が多い気がするが物事においても恋愛に関して出始めが重要であるとも言っわけで不思議なことではない。

ルイズとヴァレリーの二人は空いている席を見つけ軽く話を挟みな

がら夕食をすませるとワインを飲みながらそのままあれやこれやと話しくつろいでいる。

そこにやって来たのは一人の新入生。

「やあ、その可憐な二人組。同じ新入生同士、仲を深めないかい？」

声をかけたのは金髪で派手な服装をした男子生徒。胸には薔薇の造花。

ここで重要なのは彼が「可憐な二人組」と言ったところだ。

彼はヴァレリーの後ろからやって来たわけで現在ヴァレリーは男子も女子も着るローブ姿、加えて肩まで伸びた銀の髪を黒のリボンでとめたポニーテール。

そう、後ろ姿は背の高い女生徒にしか見えないわけだ。

許可を取ることもなくヴァレリーの横に座った彼は頼んでもいないのに自己紹介を始める。

「僕はギ シュ。ギーシュ・ド・グラモンだ。そちらの桃色の髪が素敵で可愛い君はミス・ヴァリエールだね。何度かパーティーで会っているんだけど覚えていてくれるかな？」

「ごめんなさい、失念してしまっただね。改めて私はルイズ・フランソワズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ。よろしくね」

「そうか、まあヴァリエール家に挨拶する家が多いからね。残念だが仕方がない。僕と君との間には少なくともこれから3年間の時間があるわけだしゆっくりお互いを知って行けばいいだけさ」

そう言つてルイズにウィンクすると今度はヴァレリーの方を向くギシュ。

「こちらの月の光のように美しい髪の凜とした君の名前を今一度教えてくれるかい？どこかであつたような気はするんだけど僕としたことが失念してしまつたみたいなんだ」

ヴァレリーが男だと知っているルイズや周りの在學生は面白がつてニヤけている。

ここで悪ノリしたのはヴァレリーである。

自身が女顔であるのは自覚しているのでギシュが自分を女だと思つているのはわかる。

そこで裏声を使つての受け答えである。

「私はヴァレリー・ヘルメス。よろしく、ミス・グラモン」

「そうか、そうか！ミス・ヘルメス、これから良かったら3人で僕の部屋で飲まないかい？君たちほど美しい女性なら大歓迎だよ！」

ルイズは笑いを堪えて俯き肩を揺らし、在校生は隠すことなく笑つている。

どうやらギシュはヴァレリーを口説くのに夢中で気付かないようであるが。

「ぶつ。い、いいんじゃないかしら。どう思つ？ミス・ヘルメス？」

ルイズが笑いを堪えてなんとか言葉を発する。

「そうね、でもミス・グラモン。一つだけ言っておかなくてはいけない事があるわ」

いかにも恥ずかしかっている演技をして俯くヴァレリー。

「なんだい？言うてごらんよ。ミス・ヘルメス」

そつとヴァレリーの手を取り、優しく囁くギ シュ。
演技をやめ、いつもより低めの声で告白する。

「私は……」

「君は……？」

「……男だからな！」

「なんだそんなことか……つて、ええ！??」

周りは笑いに包まれ、ただ一人ギ シュだけが驚いている。

「騙してしまつてすまない。でも私は本当に男だからな」

「え、ちよ、本当かい？ミス・ヴァリエール？」

「ええ、本当よ。女顔ではあるけどね。そういえば部屋で飲みなおすんだつたわね。三人で」

「え、いや、まあ、いいけど。ええ、信じられないな。冗談だろ？」

「だから本当だつて。学院長オスマンの息子、あれは私だから」

「ああー、そう言えば・・・なんか聞き覚えがあると思つたら。というか君たちひどいな。出会いがしらに騙してくるなんて」

「いや、すまなかつた。しかし私を女と間違えた君も同じようなものだろう。これでちやらだ」

「わかつた。僕も悪かつたしな。でもこれから飲むのはいいとして男の君は酒、持参だからな」

「自作の酒を持っていこう、味はなかなかだぞ」

「ふむ、期待しないで待つてるよ」

それから3人は夜更けまで騒ぎ、名前で呼ぶ仲になつたとか。

ことギ シュとヴァレリーに関しては後にゴールデンペア（ギシユが一方的に命名）と呼ばれるようになるがそれはまだ先のお話。

入学式を二日後に控えたそんなある一日の出来ごと。

春といえば出会いの季節、それは恋人との出会いだけでなく友とのそれもまた然りである。

007 (後書き)

入学式まで行かなかったー！

今回はルイズとタバサ、ギ シュが出てきました。

ルイズは幼馴染ポジション、ギ シュは親友ポジションです。

タバサはまだ出始めなのでこのくらいの反応かなと思った次第です。

ちよつとギ シュとのやり取りが短すぎたかな。。。><

ギ シュは意図的に女性を口説き、ヴァレリーは無意識に女性を口説くのでその辺がゴールデンペアですかね(笑
坊やのセリフもかなり気障ですしね。

今回は入学式とヴァレリーの魔法薬学の授業を書ければっと思いません。

ちなみに坊やの顔のイメージは1947年時のストパンのエイラだったりしますw

新たに学院にやって来た若人達が真新しい白いシャツに袖を通し、学院の生徒たる印のマントを羽織る。金の五芒星が象られたマントの留め金が春の麗らかな陽射しを受けてキラキラと光る様はまるで彼らの学院生活に寄せる期待を表すかのようであり、オスマンは学院長室からそれを眺めると穏やかな顔を浮かべた。さながらそれは子を慈しむ親のそれであり彼にとっての学院の生徒は皆大切な存在であることを窺わせる。

ふと眼を向けるのは水塔の向こう側、ヴァレリーが住まう研究室。

励めよ息子よ。そして良き友を見つけるのじゃ。それがお主にとつての宝となろうぞ。願わくば我が最愛の息子に幸多からんとを……

全ての生徒の親である前に一人の父親として言葉を贈る。僅かばかりのえこ贖も今、この一時は許されよう。

さて、今日という日は入学式。ヴァレリーは少し早目に目が覚めてしまったので庭を見てまわる。今までずっと学院で生活してきたのでそこまで感慨深いことではないとは思っていたが、やはり心のどこかで期待しているらしい自身の心を少しおかしく思っていた。ルイズやギ シュと朝食をすませると一旦それぞれの部屋へと戻る。

磨いたブーツにアイロンをかけた黒のズボン、おろしたてのシャツ

の上からマントを羽織る。女性すら羨む銀の髪に櫛を通し、カトレアから貰ったお気に入りの黒のリボンで結えばそこには凜として頭の良さそうな新入生の出来上がりである。ちなみに髪を結っているリボンは黒だけでなく、カトレアから貰ったモノも何本かあるのだがやはり一番のお気に入りは最初にもらった黒のリボンである。既に10年近く使っているのにカトレアへの想い同様、まったく色あせる事がない。もちろん魔法で手入れをしているがそれ以上に大事に扱っているのである。

早々に身支度を整えると随分と時間が余ってしまった事に気づく。入学式は午後からの予定である。今更、庭の手入れや実験でもして制服を汚すのもないかと思つたヴァレリーはテラスで読書でもして時間を潰そうと椅子に腰かける。見れば同じように時間を持て余しただろう新入生が女生徒を中心に庭にちらほら見える。ヴァレリーの庭は暇つぶしにはもってこいなのだ。

本へ目を落として少しばかり経つた頃、テラスへやって来たのはルイズとギ シュの二人。彼らも早々に仕度を終えてすることが無くなつたうちである。

「ねえ、ヴァレリー！ギ シュに言つてやつてよ！私が言つても聞かないんだもの！」

「これのどこがいけないんだ？僕の華々しい学院生活の幕開けに相応しいと思うんだが……君はどう思う？」

二人を見ればルイズはきつちり制服に身を包み新入生らしい格好をしている。

そしてギ シュの方は……よく言えば個性的、悪く言えばどこぞの道化。

つまり気障全開な服装であった。

彼らしいといえれば彼らしいが襟が立ちフリル付きのシャツの胸元を開け放ち、極めつけに紫の細身なズボン。ギ シュはさもカッコイイだろうと言うような顔でマントを広げポーズを決める。口に薔薇を啜えるのも忘れない。

見せつけるようにくねくねするギ シュを見てヴァレリーは一つ大きなため息。

「はあ、ルイズが正しい」

「ええ、なぜ!? 最高にカッコイイじゃないか!??」

ルイズは「当然よ」といった面持ち、対するギ シュは納得行かない様子だ。

「いや、まあ似合っていないとは言わない。君らしい服装だしな。ただあまりにも君らしさが溢れ出ていて入学式、式典の場では相応しくないんじゃないかと思うんだ。あまり魅力を出し過ぎて周りの女の子が倒れてしまっではいけないだろ?」

引くことはあっても倒れることは先ず間違いないと思うが下手に意地を張られてこのまま入学式に出られては友人として困るので言葉をうまく使うヴァレリー。これに気を良くしたギ シュは満面の笑みである。

「さすが!さすがは僕の友だけのことはある!! そうか、魅力が溢れ出てしまっていたか! それはいけないな、いくら美しい僕の姿に見惚れたとしても倒れてしまっでは可愛そうだ。ああ、僕はなんて罪な男なんだ! 仕方ない、誠に、ま・こ・と・に遺憾だが着替え直そう!」

「ふう、よかったわ。この服装のまま話かけられたら私が恥をか

くもの。助かったわ、ヴァレリー」

心底安心した様子のルイズ。

「そうか、ルイズ。君も僕の溢れる魅力に当てられて大変だったんだね！ごめんよ、それならそうと言ってくれればよかったんだ」

「誰がよ！！！！」

「君が！僕に！！くびつたけ！！！！」

一語言う毎にポーズを決めるギ シュ。

そこで繰り出されたのはルイズの黄金の右手である。

身長の低さを活かし懐に入り込むと見事に鳩尾へストレートを放った。

「ぐはっ！？る、ルイズ・・・何もそこまで照れなくても・・・」

「何か言ったかしら？」

「うぐっ！？」

さらに一撃食らって苦しむギ シュが不憫に思えたので助け舟を出すヴァレリー

「ルイズ。見事な一発だが淑女がそんなことしないだろう」

「ふん！まあいいわ。淑女たる私に感謝しなさい、ギ シュ」

「ええ、わかりました。それはもう・・・素敵な淑女様で・・・」

「ところで君たちは何しに私の庭に来たんだ？」

庭に来ている人の注目的になっっているので話題をそらすヴァレリーに二人が答える

「暇だからお茶を飲み」とはルイズの答え

「暇だから花を愛でに」とはギ シュの答え。

ちなみにギ シュの言う花は庭に咲く花のことではないのは自明である。

ヴァレリーが3人分のお茶を注ぐと適当な話、例えば昔見た演劇などの話題で盛り上がった。

話が発展して3人の中で誰が一番演技力があるかという話になるとギ シュがテラスから見える所で女生徒が3人話しているのを見つけて、彼女らに聞こえないことをいいことに勝手にセリフを当て始めた。

「まあ、見てこの花！とつても美しいわ」

「あら、ほんと！花といえればギ シュって男の子を知っている？」

「あの、薔薇を持った素敵な方ね？あなた狙っているの？」

「え、いや、そんな・・・でもかっこいいよね」

「うん、うん」

「だよー」

ちなみに此処まで全てギ シュの一人3役である。

「大した演技力だな・・・」

「ええ、思わず涙が出そうよ・・・」

ヴァレリーとルイズが思わずそんなことを洩らす。

涙を誘うが決して感嘆の涙ではない。

それは憐れみの涙である。

これ以上ギ シュに一人でやらせるのは良心が痛むので二人も適当

なセリフを当て暇な時間を潰した。

午後になり軽い昼食をすませるといよいよ入学式。

ギ シュは先ほどの服装から着替え黒のズボンと襟が立っていないシャツへと着替え直している。

フリルは付いているがそこは譲れないようである。

入学式の会場はアルヴィーズの食堂で行われる。いつの間にもやらの食堂は飾り付けをされており、荘厳な空気を醸し出している。クラスごとに席に着くようでも3人はそれぞれの席に着く。

周りを見渡せばちよつとした緊張の色を浮かべた新入生達の顔が見て取れる。

ヴァレリーのクラスであるゾーンは集まりが悪いらしくそこまで早く来たわけではないのだが前の方へと座ることとなり、ルイズのクラスであるイルは割と集まりがよくルイズは後ろの方の席へとついた。

ヴァレリーは知らないがルイズの席の隣にはキュルケが、キュルケの隣にはタバサが座っている。

今年の生徒全員の着席を確認するといよいよ式の始まり。

中二階から姿を現したのはオスマンを先頭に教師一同。

ヴァレリーも一応教師なのだが今回は生徒側である。

生徒達を睥睨し、自慢の白髭を一撫でするとオスマンが力強く、よく通る声で言う。

「生徒諸君！先ずは君たちの入学を心より歓迎しよう！せいやっ！」

大仰な身振りで中二階から華麗に飛ぶオスマン。
一階のお立ち台の上に降り立とうと途中で杖を振り、レビテーションを唱える。

が

年ゆえにそこまで舌が速く回らなかった。

描く放物線は栄光の架け橋などではなくあの世への吊り橋である。

ここでヴァレリーは思った。これはまずい！と。主に父の名誉と生命が。

咄嗟にオスマン目がけて唱えたレビテーション。

前の方の席に座っていたことが功を奏した。

オスマンがお立ち台に激突する寸前、鼻をこするか否やといったところでヴァレリーの詠唱が間に合った。あわや大惨事となりかねない現場に思わず前列の生徒は目をつぶったが凄まじいアクロバット飛行、具体的には一度急上昇し三回転半とひねりを加えた錐揉みで10点満点の着地をした。

「そして諸君！諸君らは、トリステイン・・・いや！ハルケギニアの将来を担う有望な貴族たれ！！」

声を張り上げ、堂々たる様で言うオスマン。

パフォーマンズだと勘違いした生徒達は歓声と惜しみのない拍手を

送る。

事実を知る教師やヴァレリー、お立ち台の上のオスマンが冷や汗を掻いたのは想像に難くない。

それからの式は途中で女生徒が少し騒いだ以外は何の危険もなく終わった。

もともと入学式に危険があってもどうかとは思うが。

式が終わり暫しの休憩を挟んで今度は各授業の概要説明がある。

説明は講堂で行われるので新入生が移動を始める中、ヴァレリーは魔法薬学の授業説明があるので一旦研究室に戻り準備をしていた。

学生の印たるマントを脱いで新たに羽織ったのは袖口がゆったりとした黒のコート。これはオスマンから「月夜の女神」亭に連れて行かれたのとは別に教師として務めるヴァレリーへの祝いの品である。留め金でとめればローブにもなるうえに袖や懐の内側にやたらとポケットが付いていて魔法薬などの小物が収納できるようになっている特注品である。

全てのポケットに小物を入れると正直かなり重くなるのだが手帳や魔法薬をわざわざ手に持つ必要がなくなるのでヴァレリーは気に入っている。今も懐や袖内に幾つか薬を忍ばせている。

仕度を済ませ講堂に入れば入学式の時とは違い学生は自由に席に座り、色々な話をしていて大分騒々しい。少し周りを見回せばギョとルイズが手を振っていたのでそちらに座るヴァレリー

「ん？なんで着替えたんだ、君？」

ヴァレリーの格好を見て疑問を口にしたのはギ シュである。

「ああ、そうか。二人には話してなかったか。私は今年の一年生の魔法薬学の講師なんだ。制服のまま授業をしてもかまわないんだが父上に見た目も重要だと言われてしまったね。」

「へー、すごいじゃない。まさか貴方が講師とはね。でも貴方なら出来そうね。面白い授業を期待するわ」

「驚いたな。そうか、君が講師かー。ってことは試験の際にお友達特典が付いたりは・・・」

「しないからな」

「そうか・・・。あまり難しすぎる試験とかはやめてくれよ。君は見かけによらず容赦がないところがあるからな。しかし、まあ、そうか。僕も期待しているよ」

「ありがとう、二人とも。出来る限り頑張ってみるよ。何かあったら力になってくれるかい？」

「ええ」「もちろんだ」

ルイズとギ シュは快諾し笑顔を向ける。

二人の友人の笑みに僅かにあったヴァレリーの不安の影は照らされ消えて行った。

それから代わる代わるやってくる教師が授業説明するのを3人で聞いていた。

名前と担当教科、短い説明をするだけの者もいれば、延々と話し続ける者もいて新入生は少しだれ気味である。魔法薬学の授業説明は今回、一番最後に回されていたので一つ前の授業説明をしていた教師が講堂を出るとヴァレリーも一旦、友のメールを背に講堂を出た。

今一度身だしなみを確認し大きな深呼吸を一つ。
気持ちを落ち着けてから講堂の扉を開けた。

教師がいなくなりがやがやし始めた教室が静まり、生徒の視線がヴァレリーに集まる。

中央の教卓まで進み、教室を見渡せば今までとは違った教室の風景。授業を受ける側とする側では見えるものが多少なりとも変わってくるのである。

真面目にこちらを見ている者や爆睡している者、隠すこともなく本を読んでいる者（例えばタバサなど）や声を潜めてなにやらしゃべっている者、全ての顔が見える。

ヴァレリーは堂々とそして丁寧な口調で説明を始めた。

「まずは自己紹介をしましょう。私はヴァレリー・ヘルメス、二つ名は「水花」。今年の新入生の魔法薬学を担当します。系統は水、既に御存じの方もいるかもしれませんが私も今年の新入生です。ですが、こと魔法薬学に関しては学院長の依頼のもと授業をするように仰せつかっていますので授業のレベルに関してはそれなりのモノを提供できると思います。教師としての権限を持つのは魔法薬学の授業のみですのでそれ以外の時では学友として接してもらえればありがたいですね。ちなみに私と仲を深めても試験の採点が甘くなったりはしないですからね。」

最後だけは少し茶目つけのある言い方をして自己紹介を終える。歓喜したのは女生徒である。見た目も麗しく、先ず間違いのない美少年が教師なので、多感な年頃の彼女達にしたら舞い上がることに不思議はない。

「次に授業説明をします。まあ授業の名前の通り、魔法薬の生成が

主なモノになるのですが。魔法薬の生成には簡単に分けて3つ作り方があります。材料が既に魔法的効果があるものを単に調合するもの、魔力を込めながら作るもの、出来上がった薬に魔法をかけるものですね。一年時では主に前者2つのやり方で一般的なモノ、例えばヒーリングで使う秘薬などの調合を学習します。といってもそれだけではつまらないのでフェイスチェンジや性格改変の薬などの少し難しいものもやる予定です。二年生になれば選択演習でより高度な魔法薬学を受けることができますので興味がある人は是非取ってみてください。それと講義の場所ですが主に水塔の薬学実験室か、ご覧になった方もいるかと思いますが水塔の傍にある庭園で行います。所注意としては庭のモノを勝手に摘むと摘んだ方の命を摘むので気を付けてくださいね」

輝かんばかりの笑顔で恐ろしいことを言うヴァレリーに思わず全生徒が息をのむ。

「さて、此処までなにか質問がある人はいますか？」

今しがたの恐ろしい発言をした時とは違って穏やかに言うヴァレリー。

手を上げたのは一人の女生徒。

「ミスタ・ヘルメスに会いに行くには男子寮に行かなくてはいけないのでしょうか？」

「私は庭の隣の実験室に住んでいるんだ。授業の質問などがあれば放課後、そちらに来てくれればと思います。時間があればお茶くらいは出しますので気軽に聞きに来てください。さて、ほかには？」

もう一人、手を上げたのもまた女生徒。

「個人授業などはあったりしますか？」

いささか彼女の目が輝いている気がしなくもない。

「うん、特にする予定はないですね。わからない事があったら質問に来てください。他には？」

またも手が上がる。やはり生徒。

「ミスタ・ヘルメスは教師であり、生徒でもあるんですよね？」

「ええ、そうです」

期待に満ちた目で彼女は言う

「ではお付き合いしても何も問題ないですね」

「え？ああ、まあ・・・」

それからも女生徒からの質問は続く。「好きな女性のタイプは？」
や「意中の女性はいるのか？」などなど、授業に関わりがないことばかり、いや、彼女達からしたら取り組むべき意欲が変わってくるのかもしれないが。

最早ろくな質問は来ないだろうと最後の質問を受け付けるヴァレリ
！。

見れば初めて男子生徒が手を上げている。彼に発言を促す。

「ミスタ・ヘルメスは大そうな人気だね。ところでミスタに聞いた
いんだが実際君はどの程度魔法が使えて、どこまでの知識を有して
いるんだい？僕には女性ばかりに現を抜かしている君があまり出来

るようには見えないんだ。折角、学院に通っているのにためにならない授業じゃ困るんだ」

質問ですらない。ただのやつかみである。挑発的な発言をした彼は周りに同調を求め、立ち上がったのは彼の周囲にいた5人。どうやら元々の知り合いらしい。

「魔法のレベルは一応トライアングルです。魔法薬の知識には最初に言ったように学院長に依頼されているのでそれを信じてもらうしかないですね」

口調を変えずに丁寧に言うヴァレリーだが彼らはそれが気に食わないらしい。

「しかし、君は学院長の息子らしいじゃないか？ 鼻屑にされてるんじゃないか？」

立ち上がった生徒の一人が言う。

ここで反論したのはヴァレリーでなくギ シュ。立ち上がり6人のグループに向かって言う。

「確かに彼は学院長の息子だが、仮に彼が魔法のレベルも魔法薬学の知識もなかったとしたらわざわざ教師になんてしないとかわらないかい？」

「そうかもしれない。だが所詮は魔法薬学だし、一年時のレベルの低いものじゃないか！」

「君達の言い分を聞いていれば単なるひがみにしか聞こえないよ。同学年に優秀な者がいるのがそんなに嫌なのかい？ まったくもって美しくないね！ 僕は君たちみたいなのやつが同学年にいる方がよっぽど嫌だね。醜いったらない！」

「なっ！？言わせておけばこの気障やろう！」

「気障で結構！醜い君達よりはるかにましだ！」

完全に火がついたギ シュと6人組みは今にも杖を抜いて魔法戦をし出しそうな勢いである。

はあ、何かしら起こるかと思っていたがまさかのつけからは……。子供だからと思つて寛容に接してみたが彼らから見たら私も子供だしな。その辺が感に触つたのかもしれないな。しかし、こんな大勢の中で真つ向から挑発してくるのもなかなかの度胸だが・
・ふむ、ギ シュ。やるじゃないか。見直したよ

ギ シュらが激しい言葉の応酬をする中、彼らのちようど真ん中あたりでぼん！と小規模な爆発が起きる。ルイズの爆発である。

「貴方達、今はヴァレリーの話の途中よ。黙つて聞きなさい」

どうやらルイズも相当挑発してきた6人に腹を立てているようである。それだけ言うと6人を睨みつけ座った。

教室が一旦、静まりかえる。

そんな中、口を開いたのはヴァレリーである。

「静かになったね。ありがとう、ルイズ。ギ シュもわざわざすまなかつた」

二人に向けて言うとルイズはふんつと鼻を鳴らし、ギ シュはウイ

ンクを寄こす。

「さて、問題の解決には私が実力を示せばいいわけだが……。こういうのはどうだろう？今から君達6人と私が魔法の打ち合いをする。決闘は禁じられているがこれはあくまで授業の一環なのでお咎めはなしだ。私は水のトライアングルだが今回は水の魔法は使わない。その代りに魔法薬は使わせてもらうよ。君達は6人がかりで本来の系統を使わない私に勝てば……。そうだな、授業に出なくていいし、試験も免除しよう。そのかわり私が勝ったら文句を言わずに授業を受けてもらう」

「いいだろう。その約束は守ってもらうからな」

流石に教室内で魔法の打ち合いをするわけにはいかないの一旦、外に出てヴェストリの広場での戦いとなる。授業説明は魔法薬学で最後であったし、ヴァレリーも説明は終えていたので解散にして自由に帰ってもいいことにしてあるが帰る者はおらず全新生が立ちあう中での試合となった。

「まず、始めに君が水のトライアングルかどうか証明してもらおう」

六人の内のリーダーと思われる生徒が言う。

ヴァレリーはそれに応じて詠唱するとやたらと大きな氷の粒が混ざった竜巻を発生させる。

水のトライアングルスペルの一つ、アイス・ストームだ。

6人組みはその見た目の大きさと当たりどころが悪ければ死にかねない氷の塊にたじろいだが今回は水の魔法は使わない条件なので彼らの心配は薄い。本来魔法は自身の系統以外のモノを単発で使うと

大きく威力が落ちるのである。多くの学生がそうであるように6人は全員ドットメイジであったが、数で勝り、得意な系統を使わない相手に負けるはずがないと思っている。実際、ヴァレリーは水はトライアングル、土と風がライン、火がドットであったが土や風、火の同レベルのメイジと同じ魔法を唱えれば間違いなく打ち負けるだろう。

多くの新入生が見守る中、両者は15マイル程離れ対峙する。6人は杖を抜き、ヴァレリーに向けて構える。

「いざ！」

先に動いたのは6人。

それぞれが詠唱をしヴァレリー目がけて火球や風の刃、石のつぶてを一斉に飛ばす。

飛んでくる魔法から推測するに火が三人、風が二人、土が一人のようである。

受けるヴァレリーは土の魔法で壁を作り、すぐさまフライで後ろへ飛び距離をとる。

土の壁は一度作ると他の系統の壁と違いそのままそこに残るので次の詠唱に繋ぎやすい。土の壁が魔法を受けて崩れていく中、ヴァレリーは袖から一つの試験管を取り出し、中の液体を飲みほした。

「今のは魔力の増強剤。一時的に魔力が上がります」

周りに聞こえるように少し大きな声で言う。

ヴァレリー以外は決闘だと思っているがヴァレリーとしてはこの戦いも授業の一環なのである。

壁の崩壊と共にもう一度、魔法の斉射が来るが今度は風の魔法で飛んでくる攻撃をそらすと、先ほどよりも速いフライで一気に距離を詰める。

飛びながら懐から取り出したのはまたも何かの液体。

栓を開けたそれを6人に向かって投げ、発火の呪文を唱えれば一瞬にして炎が彼らに襲いかかる。

「今のは燃える水です。アルコールを魔法薬で改良したものですね」

運悪くもろに炎を浴びた風の一人を蹴り飛ばし、となりにいた火のメイジらしい生徒の杖を持つ腕に別の液体をかける。

ブレイドで斬りかかって来た一人をそのままフライでかわすと先ほど蹴り飛ばして倒れた風の生徒の上に勢いよく着地。

苦しむ生徒に追い打ちの魔法薬を口にプレゼントするともう一度距離をあける。距離が空けば魔法が飛んでくるが5人の内の一人、腕に液体をかけられた生徒がファイア・ボールを唱えた途端、ヴァレリーに向かうはずの火球が彼を包んだ。

ヴァレリーは厚めに作った土の壁で他の4人の攻撃を防ぐと続けて礫を飛ばす。

ファイア・ボールが暴発した生徒は防げず顔や、腹に直撃し倒れる。

「彼にかけたのも燃える水ですが、あちらは揮発性が高いので彼の周囲は火がつきやすいんですね。あとそっちの彼には嘔吐剤をあげたので今頃、気分は最悪ですね」

礫の直撃で気絶したのが一人、真っ青な顔で四つん這いになっているのが一人。

フライで少し高めに飛びもう一度距離を詰めるが今回は4人の生徒

はタイミングを計り、ヴァレリーを打ち落とそうとする。

彼らが魔法を放とうとするタイミングを見てフライを切り、落下しながらライトを唱えればあまりの光度に4人の目はくらみ、放った魔法はあらぬ方向へ飛んでいく。

そのまま風の一人にとび膝蹴りをかまして落すと試験管を二つほど地面にたたきつけて割る。

ヴァレリーは急いでその場を離れながらウインドで風を操作して残った3人を包む。

目がくらんだままの3人は適当に魔法を放つが当然それがヴァレリーに当たることなく、二つの試験管に入っていた液体が反応して煙を発生し、操作された風の内にいる3人を包む。

慌てて風の外へ出てきた3人だがそろって足をもつれさせ、派手に転んだ。

「さっきの煙は体を痺れさせる成分があります。即席のモノですが案外即効性がありましたね」

全身に痺れがまわった3人は口をぱくぱくさせ突っ伏している。

6人は地に伏し、立っているのはヴァレリーのみ。

新入生が歓声に湧きたつ。

誰がどう見てもヴァレリーの完全勝利である。

多くの生徒がヴァレリーを褒めたたえる中、彼は倒れている6人を一瞥して大きくため息をついた。

「さて！此処までやつといてなんですが実はこれは演技です。初回だから皆を驚かせたくてね。あの6人も身を呈してやられ役を協力

してくれたんだ。本当はもつと強いメイジはずだ。見世物としてはなかなかだっただろう？最初の授業では私が最初に飲んだ増強剤を作りますので各自、簡単に調べておくように！以上！今日はこれにて解散！」

半ば強引に集まりを解散させ、新入生らは帰っていく。

正直、演技だと言われて信じた生徒はあまり多くは無いが名目上はそういうことにしたヴァレリー。自業自得ではあるが伸びている6人が学院生活の始めから不名誉を被るのは少し酷かと思ったのだ。今は一応、教師としての立場である。

学生が全て帰ると残ったのはヴァレリーとルイズ、ギ シュの3人と件の6人組み。ヴァレリーは6人に治療を施すと彼らに言った。

「すまなかつたね。いいかい、さっきの戦いは演技だ。君達は私に頼まれて戦った。今回はそれでお終いだ。君達が恥の上塗りをするかは今後の君達次第だ。しっかり授業を受けてほしい。しかし次、同じようなことがあれば容赦しないからそこは心に留めておいてくれ」

6人も自分たちが完敗し情けをかけられたことぐらいはわかる。ヴァレリーの実力は認めざるをえない。

「悪かった」6人はそれだけ言うとそのくさと帰って行った。

「初回から大変だったわね」

ルイズがヴァレリーに声をかける。

「まあ、これで今後喧嘩を売ってくるやつもいなくなると思えばそれが収穫かな？それより、教室では助かったよ。本当にありがとう、

二人とも」

「なに、友として当然のことをしたまでだ」「お礼を言われることのほどじゃないわ」

ヴァレリーは二人の友人と出会えて心より良かったと思う。

「さて！ヴァレリーの教師生活の始まりと決闘の勝利を祝い、一杯飲もうじゃないか！」

「それはいいわね。ギ シュもたまにはいいこと言っじゃない」

「あれ？僕は常がいいことしか言わないが？」

「はい、はい。いいから行くわよ」

それから3人はヴァレリーの庭で勝利の美酒に酔いしれたとか。

ところ変わって学院長室に話は移る。

部屋の壁にかかった大きな鏡にはヴェストリの広場を後にする桃色銀、金の髪をした3人の新入生の後ろ姿が映っていた。オスマンはヴァレリーの授業説明に全てをここから見守っていたのである。嬉しそうに頬を緩め、髭を一撫ですると呟いた。

「授業はまずまずといったところかのお。しかし、良き友に出会えたようじゃな。うむ、実に良きかな」

008 (後書き)

学生生活が始まると他のキャラが多くてなかなかオスマンが出せない
ので今回は始まりと結びだけ爺さんにやっってもらいました。

前半はギャグ気味、後半は一話のオスマンと吸血鬼の戦闘を除けば
初の戦闘描写という構成です。思いのほか肉弾戦になってしまいま
したが・・・w

忘れ去られていそうですがヴァレリーは吸血鬼とのハーフの設定で
すので力や運動神経は普通の人よりあったりします。彼自身はまだ
知らないですし、こもりがちなので使う機会は多くはありませんが。

ギ シュはやる時はやる子です！ルイズはもう少しお淑やかなはず
だったのですが・・・まあ、いいや！w

次はタバサとの高感度upのイベントでも書ければと思います。

魔法薬学の授業は毎日あるわけではなく週に一度しかない。というのも材料に限りがあるうえに、生成で使う基礎材料には下ごしらえに時間がかかるものもあり、それを生徒の人数分用意するとなるとけっこうな手間になってしまうからだ。

初回の授業説明で増強剤を作ると生徒に伝えていたヴァレリーは授業を受け終え、放課後になると基礎材料の生成に勤しんでいた。増強剤というのは魔法薬の中では中難易度だが今まで魔法薬を作ったことがないような者が作るにはいささか難易度が高い。蒸留塔を稼働させ、材料となる薬草の選別。生成の準備を終えたのは夜が白む頃だった。

以前までの魔法薬の授業ではヴァレリーが補佐として付いていたため他の魔法薬学の教師、特に一年生を担当していた者は随分と助かっていたようだ。二年生以上では選択演習となる魔法薬学だがわざわざ難易度が上がった授業を取る生徒だけにこの授業をとるとなるとそれなりに知識を蓄え、教師の手伝いも出来るようになるのだが、一年生ではそうもいかない。ヴァレリー自身が教師となった今、補助をしてくれる優秀なものがいなくなってしまったので誰か助手となり得るいい人はいないか？などを考えながら午前の最後の授業を受けるヴァレリー。

今は「風」の初回授業、受け持つのは「疾風」の二つ名を持つギト

「残念なことに今年はドットメイジばかりだな。仕方がないが基本からだ」

冷やかに告げるギトー。

授業内容は風の基本、「フライ」と「レビテーション」のようである。

「まさか、呪文を知らないなんて者はいないだろうな？先ずはフライからだ」

ギトーに従いクラスの生徒達が杖を抜き、詠唱を始める。

正直ヴァレリーが幼少時に最初に覚えた呪文はレビテーションであったし、フライも実戦で使えるほどの速さで飛べるので今回の授業は眠気も相まってかなり退屈だった。

かなり力を抜いて飛んでみたがヴァレリーよりも先に飛ぶことが出来たのはタバサ一人だけ、高度も無表情にしているタバサが一番高く、次いで寝むそうにしているヴァレリー、3番手にめんどくさそうに飛ぶキュルケである。

魔法のクラスが上がれば威力が上がる。フライに関して言えば高度と速さに影響してくるわけでトライアングルの3人とドットやラインの学生で違いが出てくるのは当然のことである。

「オールド・オスマンのは当然か、しかしその二人も「ドット」にしてはなかなかやるでないか」

二人とはもちろんタバサとキュルケである。

ギトーは留学生の入学書類までは目を通していなかった故の発言で

あつた。

「あ、いえ、ミスタ・ギトー。二人もトライアングルですよ」

「ん？そうだったか。ということは留学生か。ふん、嘆かわしいな・

・トリスティン魔法学院なのに本国のメイジが遅れをとるとは。悔しいとは思わないのかね？君達。まあいい、そのまま外壁沿いをフライを維持して5周だ。一度たりとも地に足をつけるな、全力でやれ」

国内の学生に挑発にも等しい檄を飛ばすギトーに生徒達は対抗心を燃やす。

「そのこの3人は他の者に1周差をつける、トライアングルなんだ、それくらい出来て当然のはずだ。後の者は絶対に3人に差をつけられるな。トリスティンのメイジとしての矜持を見せる」

指示に従い外壁沿いをフライで飛ぶ生徒達。

ヴァレリー達3人は1周差をつける必要があるのでどんどんと後続を引き離す。

「はあ、めんどくさいわね」

飛びながら愚痴をこぼしたのはキュルケである。

「すまない、二人とも。余計な事を言ってしまったようだ」

「悪いと思うなら今度の休日に町を案内してくれないかしら？ミスタ・ヘルメス？退屈なのよ。それに貴方がクラスで一番まともだし」

「うーん、かまわないが二人きりは遠慮したいな。ミス・ツエルプストは男子から人気だろ？この間もクラスのやつらが君をめぐって決闘してたじゃないか。巻き込まれたくないのが本音だな」

難色を示すヴァレリーにキュルケが言葉を重ねる。

「周りの人なんか気にしなくていいわ。私が自分から声をかけたのは此処に来て貴方が初めてなのよ。何も知らない留学生を助けると思っ、ね？」

「少しは周りを気にした方がいいと思うが。君を見るクラスの女子の目は正直良くない。このままじゃ恋人は量産できても友達ができないぞ」

ヴァレリーの言う通りキュルケは男子からは大それた人気だが女子からの印象、殊更キュルケに交際を申し込んだ男子を慕う者からはすこぶる悪い。暇を理由に全ての交際の申し出を受けたせいで一部の男子は決闘騒ぎをおこすうえに決着がついたと思ったらまた交際相手が増えてい、見かねて抗議を入れた女生徒は鼻で笑い追いつ返す始末。

「少なくともクラスに友達になりたい子なんていないもの。別に気にしないわ」

割と齒に衣着せぬ注言をしたヴァレリーだったがまったく意に介さないキュルケに溜息をもらす。

「いや、それは寂し過ぎると思うが・・・」

「とにかく、休日は案内よろしくね!」

キュルケがフライのスピードを上げる。

後ろを見れば一人の男子生徒が二人に追いつこうと頑張っている。

数少ない風のラインメイジでもあるド・ローレーヌだ。

ちなみにタバサは二人が話しているうちに黙々と進んで行ってしま

っていた。

ヴァレリーも速度を上げ、前に行くキュルケに並ぶ。

「あの子、ただの本の虫かと思ったら随分速いわね」

先に行くタバサを見ながらキュルケが評価する

「入学書類で見たが彼女は風の系統だしな。そうだ、休日の町案内は彼女も誘ってみよう。彼女は君と同じ留学生だからな。異議は認めないぞ」

オスマンから気にかけるように言われている二人は案の定、対人関係に難があつたがこの際、二人が友達になつてしまえば良いと思つたヴァレリーはさらに速度を上げ、タバサに追いつこうとする。

一周分を費やしやつとのことで追いついたヴァレリーがタバサの横へ並ぶ。

「ふう、やつと追い付いた。流石は風の系統だね」

タバサは一度ヴァレリーの方を振り向くとすぐに興味がなさそうに視線を前に向けた。

「ミス・タバサ、今度の休日にミス・ツエルプスト と町に行くんだが君も一緒に来ないか？ 馴染みの書籍商とか紹介するよ。君は本が好きなようだし私としても話が合いそうな君がいてくれる方が嬉しいんだが」

書籍商という単語に僅かに反応したように見えたが短く「行かない」と答えるとタバサがさらにフライの速度を上げた。こうなると同じトライアングルとはいえ風を系統とするタバサにヴァレリーは追い

つけない。

「気が変わったらいつでも言ってくれ」

タバサの後ろ姿にそう告げ、ヴァレリーはフライの速度を緩めた。

結局この外壁沿い5周はトライアングル3人が他の者に1周差をつけて終える形となった。

そもそも5周する間に地につけなかった者の方が少なく、大差をつけられたとはいえ完走したド・ロレー又は称賛に価するのだが彼は自身がクラスの中で一番の風の使い手だと豪語していただけに面白くないようだった。

「結局このざまか……。呆れてモノもいえない。3人は帰ってよろしい。他の者は授業の終わりまでレビテーションを維持しろ」

初回からスパルタ気味のギトーの授業を抜け出した3人はそれぞれ別行動を取った。

少し早目の昼食を取るとヴァレリーは図書館に借りていた本を返しに向かった。

図書館の中はまだ授業中ということもあり人は居らず、静かにゆったりと時間が流れているように感じ、窓から射す午後の陽射しが眠気を誘う。

司書に挨拶し本の返却を済ませると司書から少し席を外すからと留守番を頼まれた。司書の代わりにカウンターの席に腰かけ、貸出の

手続きをするべく生徒が来るのを待つ。
といつても元々図書館には人がいなかったのでヴァレリーは暇を持て余していた。

することがないので返却された本を適当に漁る。

小説、小説、伝記、お？魔法薬学の入門書発見。ちやんと下調べした真面目な生徒は誰だろうか？

返却された本に挟んであるカードから誰が借りたかを調べる。

ふむ、ルイズか。あとはミス・タバサも借りてるのか。勉強熱心でなによりだ

次にヴァレリーの目に留った本は一冊の魔法の研究書。

タイトルは「風の力が気象に与える影響とその効果」とある。

ほほおー、これまた随分と勉強熱心な者がいるな。さてさて誰が借りたのか？お、これもミス・タバサか。

ヴァレリーもこの本を読んだことがあるが部類としては面白いがなかなか難解な研究書だったと記憶している。このような本を読むタバサにヴァレリーは一人、感心していた。

「風の力が気象に与える影響とその効果」をカウンターで読み返していると一人の生徒が貸出許可を求めにやって来た。青い髪の小柄な少女、クラスメイトでもあるタバサである。

「留守番中なんだ。手続きは私も出来るから大丈夫だよ」

読んでいた本を脇に置き、タバサと向き合つヴァレリー。

タバサは数冊、本をカウンターに置くと「貸出許可を」と短く言って待っている。

「それじゃあ、このカードにサインをよろしく」

カードにサインを書かせるとヴァレリーは書類に必要事項を書いて行く。

タバサの目線が脇に置いた研究書に向いていたのでヴァレリーは書類を書きながら雑談を試みた。

「その本、結構興味深いよね。個人的には雷の発生に関する考察が良かったと思う。氷晶と霰のぶつかり合いが二つの雷の力を溜め、その差が雷を放出するってやつ。特に二つの力の正体が興味をそそると思わないかい？」

ヴァレリーがタバサについて知っていることと言えば入学書類にあったガリア王家であり、名前を偽る何らかの理由があることと、魔法が優秀なことぐらいだ。個人的な事は本をよく読むことと普段はまったくと言っていいほど喋らないことだけ。これでは情報が少なすぎてどう接していいかわからない。人を知るには直接会って話をするのが一番早いが誰しもいきなり「貴方はどんな人か？」などと聞かれても答え難いだろうと思う。相手の警戒を解くには何気ない雑談が効果的だ。

タバサは返事こそないものの同意する部分があったのか軽く頷く。

「君もそう思うか。やはり君とは話が合うようだ。今度よかったら実験室に遊びに来てくれ、図書館には無いような面白い内容の本も数多く取り揃えてあるんだ。最新の魔法薬学の本や、フェニアのラ

イブラリーから写した禁書すれすれのモノとかね。ああ、確かその
研究書の著者の追加の本もあつた気がするな。つとお待たせ」

手続きを終えて本をタバサに渡すヴァレリー。

短い礼と共にカウンターを後にするタバサにヴァレリーはもう一言、
言葉を発する。

「ミス・タバサ。君がなぜ名前を偽っているのかもどうしてこの学
院に通っているのかもわざわざ聞こうとは思わない。しかし、何か
あつたら君の力になりたいと私は思う。せつかく話が合う人を見つ
けたんだ。私は君と良き友人になりたいと思つているんだ。ダメか
い？」

入学式から一週間も経つてはいなかったがヴァレリーはタバサにカ
トリアとはまた異なる儂さのようなものを感じていた。一見すると
他人への無関心にも見えるが何かに関われ、彼女自身が自分を追い
込み、奮い立たせているようにも見受けられる。

きっかけはオスマンに頼まれたからだ。がヴァレリーはそんなタバサ
の様子を見ているうちにどうしてか放つておけないと思ひ始めてい
た。

振り向きはしなかったが一寸足を止めたタバサ。

彼女がヴァレリーの言葉から何を感じたかはわからないが学院に来
てから話しかけてきた他の生徒達と様子が違うということは理解で
きた。また、タバサが名前を偽るようになってから友人になりたい
と正面切つて言ってくる者は今までいなかった。自身が拒んでいる
節もあつたし、わざわざ愛想のない彼女に何度も声をかける者なん
ていなかったからだ。

「考えとく」

タバサはそれだけ告げると歩を進めた。

それは短く、素っ気ない一言だったが彼女が他人へと歩み寄ろうとした明確な左証であるといえるだろう。

図書館の留守番を終え、午後の3クラス合同の魔法薬学の授業になると一年生が続々と水塔の薬学実験室に集まって来た。オスマンから貰った黒のコートに着替え、ヴァレリーは教壇に立つ。

「さて、今回は予告通りに増強剤を作ります。初回にしては難しい部類だと思うのですが下調べは大丈夫でしょうか？」

ヴァレリーの問いに自信を持って頷く者と目線をそらす者。後者がやや多いのがすこしばかり不安である。

「まあ、生成に失敗しても死ぬような事故にはならないのですが一応、誰かに聞いてみましょうか。増強剤がどういったものかわかる人は？」

おそらく下調べをすっかりしたであろう生徒が手を上げる中、いち早く手を上げた金の見事な巻き髪の少女に答えを促す。

「では、その巻き髪が素敵な君、お名前は？」

「ド・モンモランシ家、モンモランシです」

「貴方がいち早く手を上げてくれました。ミス・モンモランシ。回答をお願いします」

「わかりました」

了承し、立ち上がるとモンモランシ がゆっくりと丁寧な説明を始める

「増強剤、今回、作るのは身体的な能力を上げるモノではなく魔力を上げるモノです。効果は薬の質によって変わってきますが概ね増幅の幅は1・2倍から2倍ほどで効果時間は長いモノで1時間。魔力が一時的に上がる代わりに興奮状態になりそれは効果が高ければ高いほど興奮状態も強くなります。一般的には1・5倍程度の効果を持つ増強剤を使うのが負荷が少なく、良しとされています。」

「おお、よく調べてありますね。その分だと材料と生成法もわかっているようですね。続けて説明してもらってもいいかい？」

「はい。材料はアナキクルス・ピレスルムの根、マンドレイク、クスノキの精油が一般的でしょうか。アナキクルス・ピレスルムの根とマンドレイクを刻み、アルコールで煎じたモノにクスノキの精油を加えつつ魔力を込めれば出来上がりです。確か、ミスタ・ヘルメスがお書きになった本にはもう一工夫されてた記憶があります」

モンモランシ の完璧な説明にヴァレリー共々、教室の生徒が感嘆の声をあげる。

「ありがとう、座っていいですよ。ミス・モンモランシは非常に優秀ですね。いやはや私の書いた本も読んでいましたか。なんだか恥ずかしいですね。そういえばミスは「香水」の二つ名を持っていたね。今後の授業でもよろしくお願いします」

モンモランシーがヴァレリーに微笑みかけて席に座る。
彼女の二つ名はヴァレリーが言ったように「香水」、得意教科は魔法薬学である。

ちなみに話にも出たがヴァレリーは何冊か魔法薬学関連の本を出していたりする。配合比率やら材料の違いで薬の効果がどう変わってくるのかまとめたモノや薬草の種類、効果を分類したモノと趣味全開の内容であり、魔法薬学に携わっていないと難しすぎて眩暈めまいがしそうな代物であったが、こと細かに書かれ、幾つもの実験結果が記されているそれは同業者からはかなりの好評を得ている。

魔法薬学は金のかかる分野であり、常に進歩する分野であるが、その発展には膨大な数の実験と臨床を繰り返す必要がある。個人がそれをやるにはヴァレリーのような環境を有するのがいいがそんなことが出来るような者は極少数であり、そうでない者が魔法薬の研究一筋で生活した場合は極貧生活は必須である。その点、ヴァレリーの書いた本は世間一般の書籍より値が張るものの知識の面でも経済的な面でも多く、魔法薬学者の助けとなっているのである。

そんな本を読んでいるくらいなのだからモンモランシーの魔法薬学の実力と意欲は高いものだと窺える。ヴァレリーが「彼女なら助手としていいかもしれない」と秘かに思ったのも当然のことかもしれない。

「ミス・モンモランシーが説明してくれた材料と作り方をすれば増強剤は完成ですが、折角なので少し手を加えましょう。先ほどの材料に女子は錨草、男子はアシユワガンダから抽出した液を少量加えます。効果はどちらも同じで興奮状態の分散と沈静にあります。これにより魔力を高める効果を下げずに比較的冷静状態でいられます。」

ただし注意しなくてはいけないのはこの抽出した液を入れ過ぎると通常の興奮とは違い性的興奮が増すので気を付けてください。教室内で発情は流石に困りますからね」

最後の一言はギ シュを見ながら言っておいたヴァレリー。念の為である。

「ああ、それと男子と女子で加えるものが違うのは男女で薬の効き具合が少し違うからです。また、アシユワガンダの成分に墮胎薬に使われるモノが含まれているので妊娠している生徒はいないとは思いますが念の為です。それと煎じたモノと精油を混ぜる際に魔力を込める者の血を少し加えると魔力を込めやすいですし効果も少し上がります。今回は入れませんが覚えておいてください」

あらかたの説明を終え、クラス毎に男子と女子でそれぞれ3、4人組みを作らせる。

結果、ソーンのクラスで二人ほど女生徒が班を作れず余った。キュルケとタバサである。

キュルケもタバサも我が道を行き過ぎているため正直言ってまったくクラスに馴染めていなかったからだ。

「あー、じゃあそこはミス・タバサとミス・ツエルプストーの二人で組んでください」

各班に材料が行き届いたのを確認すると生成を始めさせる。

「まずは材料を細かく刻んで煎じてください。雑にやると効果が薄

くなるのでしつかりと丁寧にやっつけていきましょう」

随時、説明を加えながら作業に取り掛かった学生達を見て回るヴァレリー。

中でも手際がいいのがやはりモンモランシーの班である。

次に優秀な班はルイズの班、魔法は失敗ばかりだが真面目で学力は高いルイズのことだから予習は完璧なのだ。

次に良かった班は以外にもタバサ、キュルケの二人組である。

二人というより主にタバサが黙々と作業している。

一通り見て回ったあとヴァレリーは各クラスから助手を一人ずつ選ばうと決めた。

シゲルからはモンモランシーを、イルからはルイズ、ソーンからはタバサに任せようと考え、作業に勤しむ各々に話をしに行く。前者二人からは快諾を貰い、残すはタバサの了承を得るのみだが彼女が引き受けてくれるかは大いに不安である。

「ミス・タバサはなかなかの手際ですね。そのまま弱火で10分ほど煎じたら锚草の液を加え、次に精油を少しずつ混ぜながら魔力を込めていけばいいです。魔力を込める際は一気にやらずゆっくりと、その方が馴染が早いですから」

ヴァレリーに言われた通り火の加減を弱めにするタバサ。

彼女はしゃべることこそ滅多にないが基本的に授業はしつかりと受けている。

「ミスに頼みたいことがあるんですが聞いてくれますか？」

タバサは首を横に振る。のっけから拒否全開である。

「いや、せめて話ぐらひは聞いて欲しいのですが・・・」

尚も首を横に振るタバサ

「いいです。勝手に話しますから・・・。実は各クラスから私の手伝いをしてくれる人を一人づつ募集しています。そこでうちのクラスからは是非、君にやってもらいたいんだ。うちのクラスで一番手際が良かったのは君だからね。そこまで難しいことは任せないが知識がある人の方が助かる。引き受けてくれはしないか？」

「やだ」

即答だった。

「どうしても？」

「どうしても」

「なぜに？」

「面倒」

「引き受けてくれたら私の実験室が使えるのと極秘の研究資料も見せちゃう豪華特典付きでも？」

「・・・」

「今、ちょっとやってもいいかなっと思いましたがよね？」

「思っていない」

「ミスは商売上手ですね。仕方ない、私の研究成果も一部開示しますよ。出血大サービスです」

「・・・研究はどんなことを？」

此処にきて初めて興味を示したタバサにヴァレリーは満面の笑みを浮かべる。

「魔法薬学の中でも治療に重点を置いているんだ。必ず治したい人がいるんでね。あとは毒全般も研究しているよ。治療に役立つからね」

「・・・研究成果を見てから決める」

「よし来た！放課後、実験室で待っているよ！」

今までほとんど周りの者と関わってこなかったタバサだけにクラス
の生徒は彼女がヴァレリーと会話をしているのに驚いていた。実を
いうとタバサ自身も話すつもりはなかったのだが彼女自身が知らな
いうちにヴァレリーに好感を持っていたようである。

しかし、タバサはその時、思いもしなかった。後に無邪気に喜ぶ彼
が彼女の心に積もった冷たい雪を溶かしてくれる存在になることに
この時はただヴァレリーの知識がオルレアン家の屋敷に軟禁されて
いる心を失った母の治療に役立つのではないかと思っただけのこと
だったのだから。

009 (後書き)

タバサとロレーヌの決闘辺りまで書きたかったのですが長くなりそうだったのでここで一旦、区切りで。この話の目的はタバサとの高感度upの前書きみたいな感じですかね。いや、ほんと毎度のことながら平たい内容になってしまいました><
すみませんorz

至らない文章ですが読んでくださった方には本当に感謝です！

〔補足〕

坊やがタバサを気にしていますが決して浮気ではないです
保護欲的な何かですw

坊やは目上の人と話す時と授業をする際は敬語で話します。

授業時も興奮すると敬語ではなくなりますが。

私的には敬語で話している時の方が好きなのですが同年代の会話なのでいた仕方ありません><

早く「カトレア様！」とか「エレオノール様！」とか言わせたいです。。。

たぶんその時が坊やが一番輝く気がするのですw

タバサ勧誘のやり取りはオスマンだったらどうするかヴァレリーが考えた結果です。どことなくオスマンに似ている気がしてくれば嬉しいです。

生徒達が作り出した増強剤に生成者の名前を書いたタグを取り付け評価をするために一旦全てを回収する。同じ材料で作ったからと言っても下準備の丁寧さや生成過程には違いが出てくるモノであり、それはそのまま魔法薬の質の良し悪しに影響してくる。

午後の授業を受け終えたヴァレリーは一人、実験室で回収した薬の品評に勤しんでいた。幾つか小分けした薬に反応剤を入れて正常な反応が出るかを見た後に実際に少し飲んでみるといったことを繰り返す。

今年の新入生は総勢90人以上はいるのでこの作業をするだけでも一苦勞であり、特に実際に試飲するのがヴァレリーを肉体的、(主に胃)に苦しめていた。アルコールを媒体としているので不思議な味の酒と言われれば飲めなくもないがおそらく市販で酒として販売せれてもわざわざ飲みたがる人はいないだろう。美酒には程遠い味である。

余談になるが酒と薬の歴史は重なることが多い。酒は百薬の長とよく言われるように人を開放的にさせる面は薬としての側面を表す。昔から酒は強壯剤や媚薬の認識を得ていたことに加え、薬の生成の過程で誕生したモノも多い。例えばリキュールなどがこれに当たり、リキュールは如何なる病も治す万能薬と謳われるエリキシル剤、(エリクサーと言った方が一般的だろうか)の生成にあたり誕生したものだ。

酒と薬、どちらにしても飲み過ぎていいモノではないことは確かだ

ヴァレリーの胃が荒れることは間違いない。既に20人ほどの増強剤を試飲したヴァレリーであつたが歩く毎に腹からはぼちゃぼちゃと水の音が聞こえてくる。それでも彼が意欲的に作業にあたるのは教えるからにはしつかりとした物を作れるようになってほしいと思う教師としての矜持からでもあり、父の期待に応えたいとする子供心からでもあつた。

タバサが約束通りに実験室を訪ねに来たのは一クラス分の評価を終え、流石に限界を感じたヴァレリーが休憩しようとしたそんな時だつた。

「やあ……。よく来てくれたね。とりあえずそこに座って待つてくれ。今、研究成果をまとめたものを持つてくるから……」

普段、勉強用に使っている一画にタバサを促す。

明らかに元気がないヴァレリーをタバサがじつと見ているのに気づき、力のない笑みでヴァレリーは理由を説明しながら鍵の付いた箱を開け、中を漁る。

「今まで皆の増強剤の出来を確かめていたんだ……。うぶっ、数が数だけにね」

取り出したのは15 سانتほどの厚さがある紙の束。ひもで結ばれたそれにはびっしりと今までのヴァレリーが試行錯誤し、努力を重ねた記録が記されている。

「持ち帰らず、ここで読んでもらいたい。他人の目につくとまずい薬とかの研究文書も含まれているからね」

タバサは頷くと椅子に腰かけ、研究文書を読み始める。

「ちよつと仮眠をとるから夕食時に起こして欲しい……。ああ・
・その辺にあるワインは飲んでかまわないよ。では、おやすみ」

文書を読み出したタバサの耳に届いたかはわからないがヴァレリーはそれだけ言つてベットへ横になった。普段の彼からしたら訪ねてきた女性を放つておいて寝るなどあり得ないが、増強剤の飲みすぎで動きたくないのに加え、前日の授業の準備のせいで眠かったことが言い訳といえる。また、読書中に話かけても迷惑だと思つたのも一つの理由だ。ヴァレリーはタバサが読書中に話かけられて反応を示したところを今まで一度見たことが無かつたし、自身の事に置き換えても読書中に話しかけられるのはやはり煩わしく感じることもある。ましてタバサが読んでいる研究文書は話しながら読むことができるほど優しい内容ではない。結果、ヴァレリーは仮眠を、タバサは書を解くのが最善の選択となつたのだ。

実験室には研究文書のページを捲る音とヴァレリーの静かな寝息だけが音を成し、時間が流れていく。

黙々と読み続けるタバサが文書から目を離したのは庭の花が優しい月の光に照らされた頃、晚餐の時間だつた。

「起きて」

どうやらヴァレリーの言葉をちゃんと聞いていたらしいタバサは静かに声をかける。

しかし、それでヴァレリーが起きることはなく、タバサは彼の肩を揺すり起こそうとした。

それはタバサの手が肩に触れた時だった。

「……私が……必ず……貴方を幸せにしてみせます……」

ヴァレリーがいきなりプロポーズのセリフをはいた。

これには流石のタバサも些か驚いた。

出逢って間もないのにこの人は何を言ってしまったのだろうか？ 気障な金髪の少年と一緒にいる所をよく見るし彼もまたその手の類なのか？ それともまさか小さな女の子を見ると脈拍が上がる人種か？ などと割と失礼な考えが頭をよぎる。

研究文書を読む限りでは彼の知識は相当に高く、評価できると思ったがその人柄についてはまだ決めかねる。自身の年齢に比べて体の発育が遅いことは重々承知していて未だ12歳前後に見られることもある。母の助けになるのならその身を呈すことも甘んじて受け入れる覚悟があるが彼が後者の人間であるならばいよいよ身を汚すこととなる。

思えば彼は随分と自分を気にかけているようであったし、まさか……
・本当に……？

タバサの中のヴァレリーの評価が物凄い勢いで下がる中、ヴァレリーが口を開く。

「・・・カトレアさまあ・・・んう」

聞こえてきたのは一人の女性の名前。
その後続くのは静かな寝息だけ。
此処に来てタバサは気付いた。

先ほどの彼の寝言であり、その言葉は彼の夢に今いるであろう女性に送られたモノであることに。

「・・・」

思わず周囲を見回したタバサ。

別に自分の考えを声に出していたわけではないが人に見られたくはない心境である。

周囲に誰もいない事を確認し、尚もすやすや眠るヴァレリーに視線を向ける。

起こすように言われていたので起こしてやろうとは思うがなんとなく納得がいかない。

邪推した自分が悪いのであって彼に悪意がないのはわかるが紛らわしいこと甚だしい。

そんな思いの中、今度は杖の先をヴァレリーの頬にぐいぐい押しつける。

一応、言っておくがあくまでヴァレリーを起こすためである。

決して行き場のない苛立たしさを八つ当たりしたかったためではないと思いたい。

「んあー・・・痛いです・・・エレオノールさまあ・・・きつと素敵な人が見つかりますからあ・・・」

何やらうなされているが起きる気配のないヴァレリーを暫しぐりぐりしたタバサは諦めて食堂に向かった。学生で賑わう食堂でかなりの量を黙々と食べ、ミートパイを二切れ、林檎を一つ包むと誰と話すこともなく実験室へと戻った。

ヴァレリーが目を覚ましたのはタバサが実験室に戻り、随分経った頃であった。

夢の中でのカトレアはやはり美しく、優しい笑みを浮かべていて、それだけで心が満ちるのを感じる。意を決して思いの丈を告げ、いよいよ彼女がその答えを口にしようとした時、背後からエレオノールがやって来て「何処かに素敵な殿方はいないかしらね」と言いながら頬を捏ね繰り返される。それを見てコロコロ笑うカトレア。笑う姿もまた格別なのだが今はヴァレリーにとって一大事であって、なぜいきなりこのような事態になったのか悩む。

夢であるからというのが全ての理由なのだがそれを知る由もなく、まして頬を捏ねるエレオノールの手が実際はタバサの杖であったことは気づくことは無い。

むくりとベットから体を起こすと辺りを見回すヴァレリー。タバサはヴァレリーが眠る前と変わらず、椅子に腰かけ研究文書を読んでいる、読み進めたページや外の暗さ、己の腹のすき具合から随分と寝てしまったのだと判断する。

水差しから一杯、水を注ぎ、胃の調子を整える薬草を噛み締めて口

に広がる苦みを水で流し込むとタバサに話かける。

「おはよう。随分と寝てしまったみたいだ」

「起きなかつた」

「そうか。それで、私の研究成果は君の役に立ちそうかい？」

ヴァレリーの質問に小さく頷くタバサ。

次いで食堂から持ち帰ったパイと林檎の包みを渡す。

「おお、ありがとう。助かるよ。助手の件は引き受けてもらえるかな？」

研究成果を見て助手になるか否かを決めるとタバサは言っていた。彼女がどういった情報を欲しているかはわからないが治療における魔法薬学の研究ならヴァレリーは自信があり、きつと引き受けてくれると思っている。

そんなヴァレリーを余所にタバサは彼が予想だにしなかつた質問をしてきた。

「一つ聞きたい」

「ん？私に応えられることなら」

タバサが持つて来てくれた林檎をかじりながらヴァレリーは応える。

「カトレアって誰？」

「えっ？」

てつきり研究文書の内容についてわからないところがあったのかと思っただけにヴァレリーは驚いた。ラ・ヴァリエール家は国外においてもある程度、名前は知れているが病弱で領地から出たことのないカトレアの名前が国外に広まるといことは考えづらい。

誰だ？と聞く辺りタバサも名前ほどしか知らないのだろうが彼女は一体どこでカトレアの名を知ったのだろうか疑問に思う。

「なぜ、その名を？ガリアから来た君があの方の名を知っているのが不思議なんだが」

「寝言で言ってた」

「うぐっ・・・！？もしかして名前以外にも何か言っていたりした？」

ヴァレリーが焦る。

夢で自分が何を言ったか覚えていたからだ。

「必ず幸せにしてみせる」

タバサが淡々と告げる。

ヴァレリーは手で顔を覆うが隠れていない耳が赤くなっている。

「聞かなかったことにしてくれ・・・」

タバサが頷くがカトレアが誰かについては重ねて質問してきた。

ヴァレリーからしたらタバサがなぜカトレアについて聞いたがるのか不明であったがタバサからしたら重要な問題だった。もしカトレアという女性が少女、もしくは幼子であったなら自分の身が危ない

からだ。可能性は薄いが念の為である。タバサの中にあるヴァレリーという人物は未だ危ない趣向があるかもしれないという評価を持っている。

そんな事とは露とも知らないヴァレリーはカトレアがどういった人物なのかを説明する。ヴァリエール公爵家の二女であること、その妹がルイズであること、彼女の境遇と自分との関係などを表面的にである。

「そう」

タバサはひとまず自身の考えを改め、ヴァレリーの知らぬところで彼の評価が危険人物から常人に戻ったのだった。

「助手、やってもいい」

どうやらヴァレリーの研究文書はタバサのお気に召したようで、ようやく申し出を引き受けた。

研究文書をまた読みに来ると告げ、タバサは寮へと帰っていく。ヴァレリーはタバサの小さな背中が夜の闇に溶けるまで見送った。

変な時間に眠ってしまったて、これから皆が寝静まる頃だというのに目が冴えてしまったがヴァレリーであったが、良く眠ったおかげで気分は悪くなかった。酒に酔いでもすれば眠れるだろうかと思いい、部屋にある酒を選び、テラスにてタバサが持って来てくれたパイと月に照らされ、春のそよ風に揺られる花々を肴にグラスを傾ける。

ミートパイに合わせるなら無難に赤か、それともこれからまた気持ちよく眠るために甘めのブランデーにしようか些か悩んだが結局二つとも持って来た。一つのグラスで飲み分けるようなことはせず、しっかりとグラスは二つ。混じって本来の味を損ねるのはよろしくない。

テーブルにグラスが二つあったためであろうか、ヴァレリーのもとにお客が一人やって来た。

「最近、話す機会がないので息子が寂しがって枕を濡らしているのではないかと来てみれば……。月見酒とはまた小洒落た真似をしおってからに」

「父上……。ていうか今更、親恋しさに泣きはししないですよ。どちらにします?」

「今宵はブランデーがいいかのお」

ヴァレリーがもう一つのグラスに琥珀色を飾るとオスマンは向かいの椅子に腰を下ろし、パイプに火をつける。吐き出された紫煙が薄っすら月光を陰らせ、そして風に流れていく。とても静か、されど何処か温かい時間を過ごす。

学生生活や友人、教師役について話した後、話題は二人の留学生についてになる。

「件の二人はうまくいっているかの?」

「今の所、あまりうまくはいっていませんね。ミス・タバサは人と

話そうとしませんし、ミス・ツエルプスターは恋人は多いですが友達は作れていません。もつともアレを恋人と言っていいかは甚だ疑問ですが……」

「恋人？決闘騒ぎを起こした子達かの？あれはお主の言う通り、恋人とは言わんじやる。良くは知らぬが、わしには彼女がただの暇つぶしの相手程度の認識しか持ってないと感じるのお。遊ばれているのを楽しむのならそれでもいいんじゃないが、いかんせん初心な者が多いからのお」

「まあ、まだ十代ですからね。彼女もその初心な反応を楽しんでいるんでしょうね」

「お主はどうなのじゃ？鼻屑目に見るわけじゃないがモテるであろう？誘われておらんのかえ？」

「今度の休日に町を案内する約束をさせられましたね。ですが、今後彼女と友人にはなれども、恋仲にはなりえません。彼女は魅力的ではありますが私にとっての一番はカトレア様であって、それは揺らぐことのない事象ですから」

「お主は大概、二女の虜じゃな。どれ、一つ詩でも詠んでみよ」

オスマンは呆れた顔で紫煙をくゆらす。

「唐突ですね……うん、整いました」

「していかん？」

「野に咲く花は散るが定め、されど我が内に咲きたるは桃の花。散らず、褪せず、咲き誇らん。猶、散るなれば、共に在らんと思ひし

蘭の君への逸りし心ぞ」

「かーっ、激甘じゃのお。蜂蜜水を飲んでおるようじゃ。お主、自分で言つて恥ずかしくはならんのか?」「」

「歌えと言つたのは父上じゃないですか。酒に酔っているのです。大目に見てください」

ちなみに桃の花は春の季語であり、花言葉は「貴方の虜」、ここではヴァレリーの心情を表しているのだろう。蘭の君とはもちろんカトレアのことであり、カトレアの花は蘭の女王と呼ばれる故の言い回しである。要するに野に咲く花と違って、私の胸の内に咲いた恋の花は決して色褪せたり、散つたりすることなく咲き誇るだろう。それでも散つてしまうと云うのならそれは想いが薄れたからではなく、カトレアへの想いが溢れたからであるのだ。といった意味である。

成程、激甘である。ギ シュも驚く、気障なセリフであろう。ヴァレリーも大概、気障ではあるが素面では先ず言わないだろう。

「まあ、良いがのお。して、件の二人に関しては引き続き、気にかけておくように。と言つても、人は出逢うべくして人と出会うものじゃ。案外勝手にうまくいくかも知れんがの」

「仮にそうだとしたら私が気にかける意味はあるのでしょうか?」

「誰かの後押しが必要な時もあるうて。それにあの手の者は一度、友と認めた者は裏切らぬ。お主にはそんな友を持って欲しいと思うのじゃ」

「そうなのですか？ 私にはまだ、そこまで人を見る目はありません。人に言われたから友達になるのもおかしいですし、まずは自身で感じる必要がありますね。父上の言葉を借りますが、彼女達が私の出逢うべき人ならきつとこの先、仲が深まる事もあるのでしょうか」

「うむ、選ぶのはお主じゃて、それがいいじゃろう」

それからまた何度か詩の詠み合いをして解散となった。

果たしてヴァレリーの恋の花は実をつけるのかはもう少し後で語る
としよう。

時間を流し、虚無の曜日に移る。

休暇である今日は授業もなく、学生は自室で読書に耽ったり、町に出かけたりと自由な時間を過ごす。ヴァレリーはキュルケから町の案内をするように約束させられているので甲斐甲斐しく馬車の手配を済ませ、正門でキュルケを待ちながら本を読んでいるところである。タバサを助手にすることは出来たが町への誘いは頷いてもらえなかったためキュルケと二人きりということになる。

待ち合わせ時間を少し遅れた頃にキュルケはやって来た。

「さあ、早く行きましょう。追いつかれてしまうわ」

誰に追いつかれるのだろうとヴァレリーは疑問に思ったがすぐに答えはわかった。

キュルケを追うように4、5人の男子生徒が向かって来ている。

大方、休日と共に過ごす約束をしていた者たちなのだろう。

キュルケに一言、言いたいところをひとまず抑え、馬車を走らせる。彼らに捕まるのも面倒だと思ったからだ。

彼らを振り切った後、ヴァレリーは改めて抗議を入れる

「他に約束があつたんじゃないのかい？面倒に巻き込まれるのは嫌だぞ、私は」

「さあ？他の人達の約束なんて忘れてしまつたわ。少なくとも私から言い出したんじゃないもの。私が休日と共に過ごしたいと思つたのは貴方なのよ。それ以外の約束は覚える必要があるかしら？」

悪びれずそんなことを言うキュルケにヴァレリーは思わず溜息がでる。最近、溜息をつく回数が多くなつてきている気がするヴァレリーである。

「それじゃあ、困るんだよ。誘いに乗らないにしてもしつかりと断りを入れるのが筋つてもものだろう。君が君らしく振る舞うのは悪いことじゃない。けれど守るべき線は守らなくちゃいけないよ。君は魅力的な女性だがその点を知ればより、美しくあるだろうと思うのに」

「もう、折角のデートなんだからお説教は聞きたくないわ」

「説教される内が花なんだよ。それに私はこういう人間なんだ。君から誘つたんだからその辺はわかつてもらいたいね。それで？今日は何処を案内すればいいんだい？」

「そうね、まずは王都かしらね。来週末の舞踏会用にドレスを新調

したいのよね」

「来週末？ああ、スレイプニールの舞踏会か。でもあれにドレスは必要ないぞ」

ヴァレリーの発言にキュルケは疑問を浮かべる。

「舞踏会なのにドレスを着ないの？」

「スレイプニールは仮装舞踏会さ。真実の鏡というマジックアイテムで己の理想の姿に化けるんだ。新入生歓迎の催しモノだが、家柄、地位、国籍、爵位に囚われず、学院では平等に学ぶためにとつという意味もある」

「ふん、そうだったのね。聞き流していたから知らなかったわ。じゃあ、翌月の舞踏会用にするわ。私に似合うドレスを選んでくれるかしら？」

「まあ、それくらいならかまわないよ」

馬車に揺られること数時間、二人は王都トリスタニアへと降り立った。

休日ということもあって通りを行き交う人は多く、広場では露天や大道芸に人が集まっている。

学院の生徒と思しきモノもちらほら見て取れる中、二人は老舗の仕立てやでドレスを一着、拵しむえさせる。続いて向かったのは流行りのランジェリーショップ。

ドレスの仕立てに付き合うならまだしも流石に此処は居場所が悪く、

外で待っているとキュルケに告げるも、半ば強引に連れられてしまったヴァレリーは店に来ている人からの注目の的であった。キュルケが試着で仕切りの奥へと消えると残されるはヴァレリー一人。好奇の視線に晒されながらただ待つことしかできず、この現状を知りあいに見られたくないな、などと思いつながら時間が早く過ぎるのを願うばかり。嫌でも目に入るのは女性物の下着であり、向こうが透けて見えるようなネグリジェや極めて布面積が小さいショーツがどちらを向いても並んでいる。

ようやく仕切りが開き、やっと店から出れると思いきやそこには際どい黒の下着姿のキュルケが立っている。

「どつかしら？」

どうやらヴァレリーに感想を求めているキュルケは挑戦的な笑みを浮かべる。

黒は女を魅力的に見せる色であるが、キュルケの褐色の肌と女性的な体つき、情熱的な赤い髪が合わさるとその魅力は乗霧乗霧の如く増す。しかし、ここで慌ててはヴァレリーの負けである。言うならばこれは男女の間の駆け引きである。

「良く似合っているよ。黒が君の美しさを際立させている。しかし、男の前でそう、易々と肌を見せるもんじやないと思うぞ」

あくまで冷静に諫めるヴァレリーに対し、キュルケも堂々としたものである。

「だって、脱がす側の意見も聞いた方がいいでしょう？それに女は見られて美しくなるものなのよ」

「一理ある。けれども君の肌はそんな安いものじゃないだろう？その対価を払える男はそうはいないさ。言わずもがな私もまたその一人さ」

「あら、随分と評価してくれるじゃない。これは買いね」

ヴァレリーの言い回しに気を良くしたキュルケは満足気に再び仕切りをかける。

褒めておきながら、やんわり否定し、空気を悪くすることもなく諭した辺り、この勝負はヴァレリーに軍配が上がったと見ていいだろう。

それから二人は王立図書館や王立魔法研究所アカデミーを見て周り、キュルケの提案により楽器屋へと足を運んだ。ここで彼女が買ったのはハープの弦。なんでもハープの演奏には自信があるらしく、初老の店主と楽しそうに音楽の話をしていた。

二人がトリスタニアから帰って来たのは夕暮れの頃。

馬車から先に降りたヴァレリーは紳士としてのマナーに則り、キュルケに手を差し伸べる。手を引かれ、馬車から降りたキュルケはそのままヴァレリーに枝垂れかかり甘く、囁く。

「もっと、貴方と一緒にいたいわ。ねえ、これから私の部屋に来ない？今日のお礼もしたいわ」

茜色に照らされ、さらに艶やかさを増した彼女が耳元でそんなことを言おうものなら初心な学生達なら十中八九、誘いを断れはしない。

しかし、そこはヴァレリーである。

「そのお誘いは非常に魅力的だね。お礼というなら是非、君のハープの演奏を聞いてみたい」

「やっぱり、そうきたわね。でもまあ、いいわ。弾いてあげる」

キュルケとしてはハープの音を聞かせるために誘ったのではなかったがヴァレリーがこのように返答してくることは予想できていた。なかなか自分に傾かないがそれ故、面白い。追われるだけが恋じゃない。また、色恋沙汰を抜きにしてもヴァレリーという人物は些かジジくさく、説教じみている所はあるが、人として魅力的である。などという考えに至り、演奏してみせることとしたのだった。

キュルケの部屋に行くのは他の学生の目があるので避け、演奏は実験室のテラスで聞かせてもらうことにしたヴァレリー。

キュルケが持つて来たのはラップハープと呼ばれる、膝の上で演奏する形のハープである。

弦の数は26と、この型にしては多い方であろう。音叉を膝で打ち、耳元にあてるとキュルケは一本一本、音程を合わせて行く。

「さて、それじゃあ一曲」

キュルケが目を閉じ、ゆっくり弦に手を置き、そして弾く。^{はじ}

紡ぎだされる音はとても澄んでいて、それを奏でるキュルケも普段とは違いとても落ち着いた佇まいで、お淑やかに見える。

ヴァレリーはキュルケの演奏に音の綺麗さだけではなく、優しさの

ようなものを感じていた。きっとそれもまた彼女の本質なのだろうと思う。

「どうだったかしら？」

一曲弾き終えたキュルケがゆっくり目を開き、ヴァレリーに問う。演奏の余韻が残っているせいか、その瞬間のキュルケは今日一番の魅力を放っていて、ヴァレリーも自然と今日一番の笑みを浮かべる。

「美しかった。その音も、君自身も」

それは意図せず口にした言葉。それ故、素直に相手に伝わる。

「ふふ、少しは私の魅力が伝わったようね」

キュルケも笑みを浮かべる。

ただそれはいつもの男を誘う笑みではなく、もっと澄んだそれである。

「貴方もなにか弾けないの？折角だから合わせましょう」

「一応、ピアノとチェロは習ったが君ほど上手には弾けないぞ？」

「かまわないわ。大事なのはそこじゃないもの」

「そうか、わかった。ちょっと待っていてくれ」

ヴァレリーは実験室の奥から一つのチェロを持ってくる。

貴族にとって、楽器を嗜むのは一つの教養でもあるので何かしらの楽器に覚えがあるものも多い。特に女性においては腕の良し悪しはあるが大抵の者は楽器の経験はある。余談だがヴァリエール家の娘

もそれに余らず楽器が弾ける。エレオノールはヴァイオリンが上手であったし、カトレアはピアノを弾けた。ルイズはフルートの練習をしていたものだ。

些か埃を被っているケースからチェロを取り出し、丁寧に拭き、弦を張ると調子を確かめる。

若干の歪みはあるものの聞けない音ではない。

弓に松脂を塗り、4つの弦をそれぞれ撫でれば、芯があり、よく通った音が庭に響く。

「よし、準備完了だ。曲は何にしようか？」

「デユオだから・・・そうね。「シャーロットの姫君」辺りかしら？弾ける？」

「うむ、なんとか」

ちなみに「シャーロットの姫君」とは外界を見てはならない呪いにかかり、塔に閉じ込められているシャーロットの姫と騎士ランスロット卿を歌ったモノに曲をつけたものである。

目で合図を送り、キュルケが前奏をし、ヴァレリーがそれに合わせる。

チェロの音がリードをとるとキュルケがハープを弾きながら歌い出す。

それは思いつきで合わせたとは思えない調和のとれた演奏であり、風に揺れる花々はそれを称賛するようである。

ゆったりとした曲調の中、しっかりとした強弱と余韻を残し、キュルケの歌を映えるようにヴァレリーが奏で、間奏ではチェロが引き立つようにキュルケがハープの調べを紡ぐ。

チエロの低音で曲を終えた二人は向き合う。
されどそこに言葉はなく、穏やかな笑みのみを交わす。

後にキュルケはしばしばヴァレリーと音を奏でるようになるが今日
がその初め。

そして彼女が学院でなんの銜いもなく過ごした初めての時。

言葉で伝えねばわからないこともある。

しかし時として人は奏でる音でその人の性質を知ることできる。

今の二人がそうであるように。

010 (後書き)

私に詩の才能なんてなかった!!

坊や同様、私も酒に酔っていたのですよ! たぶん(汗

今回のお話は引き続き高感度upのお話です。

音楽の力は偉大です! w

キャラの妄想をする時、そのキャラが弾きそうな楽器をイメージする癖があるのですが今回のお話に書いたようにヴァリエール家の娘の楽器のイメージはあんな感じですよ。

ちなみにマリコル又は大笛、ギ シュはヴァイオリン、モンモンは鉄琴、タバサはトライアングルという勝手なイメージがありますw

「シャーロットの姫君」という曲は実際にある曲です。

ニコ動に上がっていたので興味がある方は「ハープ」で検索すると聞けるかと。

いい曲ですよ!!

入学式から二週間ほど経ったフェオの月、最後の週であるティワズの週の中頃はギ シュが好きな薔薇を始めとする花が美しさを主張し始め、いつのまにか緑が濃くなっているのに気付く月である。

今週の魔法薬学の授業は前回の授業で作った増強剤を返却するところから始まった。生徒達が作ったそれに五段階で評価をつけ、改善点を書いた紙を括り付け、渡す。文句なしの最高評価を得たのはモンモランシーとルイズ、タバサの3人で特にモンモランシーの薬はヴァレリーが作るものとさほど遜色ない出来であった。

今回の授業は何かの薬を作るというわけではなく、座学、といったも講堂でヴァレリーが教鞭を振るって生徒達がそれを書き留めるといった形式ではなく、庭で薬の材料となる植物を実際に見ながらどういった効能があり、何に使われるのかをヴァレリーが説明していくという形で行っている。

ヴァレリーが生徒達を集め、説明し出したのは薔薇が咲き誇る一画。単に薔薇ひばいと言ってもその種類は多く、ヴァレリーの庭に咲く薔薇を系統で分けるならアルバ、ブルボン、ガリカ、ダマスク、モス、ノアゼットに分けられる。形や色も違いがあり、見る者を楽しませてくれる。

アルバ・ローズのセレスティアルは淡い桃色をしており、同じ桃色でもダマスク・ローズのヨーク・アンド・ランカスターはフリルのドレスのように花弁が広がる。ブルボン・ローズのバリエガータ・

デイ・ボローニヤは紅白のストライプで窄んだ型をしているし、ガリカ・ローズのオフィキナリスは赤色を、カーディナル・ド・リシュリユーは濃紫色の奥ゆかしい姿を見せる。

何人もの生徒がうつとり見惚れる中、ヴァレリーが説明を始める。

「多くの者を魅了し「花の女王」と称される薔薇にも多くの効果があります。安眠効果や血液循環の活性化、抗炎症作用、止血作用などが挙げられます。魔法薬学的には精神安定剤としての使用が多いですね。また、ここにはありませんが「夜の貴婦人」と呼ばれる黒の薔薇はそれそのものが魔法的効果があり、禁制の惚れ薬の材料の一つとなっています。あつ、そうそう、余談ですが皆さんが使っている大浴場に香り風呂がありますよね、花の香りだったり柑橘系の香りがするアレです。実はあの風呂の香料は私が作っているんですよ？何か希望する香りがあれば言ってください。私の授業を受けてくれる皆さんのリクエストは特別に受け付けちゃいますよ」

ヴァレリーは生徒達の要望に耳を傾け、切りの良いところで締めくくると次の説明をするべく移動をする。

ちなみに学院の大浴場は昔は湯着を着用して、男女の区別なく入浴するのが常であったが戒律の厳しくなったロマリアが宗教的理由から禁じたため今は男女別になっている。その古い習慣が存在した時代に生まれなかったことを深く恨むやからもいるらしい。ギ シュもまたその一人であるとか。しかし、前述した理由は表の理由であり学院の風呂が男女別になった真の理由はギ シュの祖父が「やらかした」からだというのは今となってはオスマンしか知らない事実である。

男女別となった浴場における女湯の防御は要塞のような鉄壁を誇る。

半地下構造にそれを守る5体のゴーレム、その先には強力な固定化の魔法がかかったマジックミラー、加えて魔法探知装置なるものが存在し魔法を使つての突破を許さない。これらの障壁の前に多くの愛の狩人達が血と涙と共に散つて行つたようである。

嘗て、オスマンが色事に関しては豪の者と認めたまひ、シュの父も果敢に戦つた。

またそれを継ぐ3人の息子達も立ちはだかる大きな壁に挑んだ。しかし、楽園への扉は堅く閉ざされ、その先へ進むことは叶わなかつた。

それでも彼らは理想郷^{ユトピア}を追い求めた。

ある者が尋ねた。なぜそこまで追い求めるのか？と。

ある者が語る「それが愛の狩人としての誇りであり運命^{カルマ}なのだ」と。また別の者が語る「胸に滾る熱い情熱^{パトス}が頂を求めるのだ」と。

たとえ叶わずとも彼らは正しくその道の勇者であつたのだと知ることがができる。

そして今年の学生にもその熱き心と愛の狩人の血を継ぐ者がいた。

彼の名はギシュ・ド・グラモン。彼もいつか挑むこととなろう、薔薇^{ローズ}を胸に理想郷^{ユトピア}を求め、かの要塞へと。果たして彼がこの先得るのは失意の絶望か、それとも輝かしい栄光か。それは神^{ミラ}のみぞ知ることである。

ヴァレリーが次に説明をしたのは薄青色や鮮青色の小さな花を多数つけた忘れな草が生える一画。

「この花の名前はゲルマニアの悲恋伝説に登場する主人公の言葉に因んだものなんですがミス・ツエルプストーは知っていますか？」

生徒達の中でゲルマニア出身の者はキュルケだけであつたのでこの花の名の由来を説明するには彼女が最適であつた。

「ええ、知っているわ。それは昔、騎士ルドルフとその恋人、ベルタの物語。ドナウ川の岸边を歩く二人はその花を見つけたわ。」「ねえ、ルドルフ様、あの花はとても可愛らしいですわね。」「

キュルケが演劇染みたセリフをヴァレリーにかける。
これにヴァレリーは乗ってみせる。

「ああ、愛しのベルタ。君の美しさには敵うまいて。どれ、一つ君にあの花を捧げよう」そう言つてその花を摘もうとルドルフは岸を降りたが誤つて急流に飲まれてしまふんだ」

ヴァレリーが件の花を摘み、セリフを続ける。

「ルドルフは最後の力を尽くしその花を岸に投げ言つた。」「どうか、私を忘れないでくれ!」「」

ヴァレリーは摘んだ花をキュルケに投げる。

「それが彼が残した最後の言葉。残されたベルタはルドルフの墓にその花を供え、彼の最期の言葉を花の名にしたわ。それがこの花、忘れな草の名前の由縁」

キュルケが話を結ぶと感嘆の声が生徒達の間にも漏れる。

この話を聞けな話と捉えるかロマンチックな話と捉えるかは聴く

者によるが演劇好きの貴族達は多くが後者の理解をしたようである。

「ありがとう、ミス。っとまあ、こんな感じだね。皮肉だが魔法薬学ではこの花は忘却剤の材料として使われます。また余談になりませんが先ほどの物語に由来しこの花の花言葉は「真実の愛」、「私を忘れないで下さい」といったものになります。地方によっては若者がズポンのポケットに、この花を入れて行くと若い娘に気に入られると言いつたに、この花を入れて行くと若い娘に気に入られると左の腋の下に入れて家路をたどると、途中で出会った最初の人が無名配偶者の名を覚えてくれる。なんてのもありましたね。実は学院内でもこの花が自生している所が幾つかあります。試してみるのも面白いかもしれませんね」

授業の合間の教師の雑学がその授業の魅力の一つであるのはこの世界でもきつと一緒にいるのだらう。その点においてヴァレリーの魔法薬学の授業は早くも学院、屈指の人気授業となっている。それはヴァレリー自身の見た目と人間性に依るところも多いが彼の教師としての腕も確かであることの証明でもある。

それからヴァレリーは生食すると「七色の夢を見る」と言われ、幻覚剤の材料となるウバタマや麻酔として古くから伝えられるアヘンなどの説明などをして今回の授業を終えた。

時間を進め、その日の放課後。

風系統のラインメイジであり、自身の魔法に大それた自信を持っていたヴィリエ・ド・ロレー又は魔法薬学で返却された増強剤を試し

に飲んでみた。括り付けられた紙には「興奮作用の分散と沈静が薄い」との注意書きがあったのだが彼は別段、気にとめることもなく服用してしまつたため事件は起きた。

ロレー又はなんとも微妙な味のそれを飲み干すと体が熱くなるのを感じ、自身の感情と魔力が昂るのを実感していた。湧いてくるのはクラスに存在するトライアングルメイジの3人への嫉妬の炎。風系統の名門の生まれで、その才覚を發揮し入学時では数少ないラインレベルであつた彼はクラスはおるか学年で風の授業では一番になれるだろうと思つていた。しかし、待つていたのは一番どころか二番手にも三番手にもなれない事実。今まで風の魔法を鍛えるべく領地で教わつてきたし努力もしてきた。それなのにあの3人は事も無げに自分の上に行く。自分の努力が否定されたようでそれが許せなかつた。

そんな折、ロレー又は図書館から帰路につくタバサと出逢つてしまつた。自分より幼くして風の第一位の彼女への対抗心は3人の中で最も強く、またタバサがどれほど過酷な道を歩んできたかを知らなかつたが故、興奮状態の彼は己を律することが出来なかつた。

本を読みながら歩を進めるタバサの前に立ちはだかりロレー又は言う。

「ミス、貴方に「風」をご教授願いたい」

タバサはそれを無視し、本から目を逸らすことすらせずに通り過ぎようとした。

それがさらに彼の神経を逆なでした。

ロレー又はタバサが読んでいる本を叩き落とし、怒りを露わにする。

「人がモノを頼んでいるんだ！礼儀を知れ！」

落ちた本を拾い、汚れを払うタバサはそれでもロレーヌをその瞳に映すことは無く、無視して通ろうとする。

「なるほど、君がどうやら私生児というのは本当のようだな。最低の礼儀すら解さないとは。きっと君は母の顔さえ知らぬ哀れな子なのだろうよ。そんなのだから母に捨てられ、礼儀知らずの臆病者になってしまっただ。いいだろう、可愛そうな君は本の世界にだけ生きるがいいさ！」

ロレーヌがそう言い残し立ち去ろうとした時、ようやくタバサがロレーヌを見た。

その感情の窺えない碧眼の瞳の中には雪風が吹き荒ぶ。

「やる気になったか？」

二人は距離をあけ、杖をかまえる。

「君のような庶子に名乗る謂れは無いがこれも作法だ。ヴィリエ・ド・ロレーヌ、謹んでお相手つかまつ仕る」

しかし、タバサはそれでも答えない。

「ふん、この期に及んで憐れだな。その身に相応しく地に伏すがいいーいざー！」

ロレーヌが唱えたのは「ウィンド・ブレイク」。
もともと強力な魔法だが増強剤の効果も相まって荒れ狂う風が密を成しタバサに迫る。

タバサはロレーヌが增強剤を使用していることを知らなかったため、予想以上の強力な魔法に些か驚いた。短い詠唱と長い杖を振り、ロレーヌの攻撃を逸らす。

タバサとしてはロレーヌにそのまま返してやるつもりであったがそれは叶わなかった。

渾身の一撃を流されたロレーヌに向け、タバサが「エア・ハンマー」を放つ。

ロレーヌは「エア・シールド」を慌てて唱えるが盾もるともタバサの風の槌に吹き飛ばされ壁に叩きつけられた。

痛みに喘ぐロレーヌに向け氷の矢を無数に飛び、彼のマントや服が壁に縫いつけられる。

身動きできないロレーヌに当たれば死んでしまうだろう大きな氷の矢が飛んでくる。

「嫌だ！死にたくない！！」

思わず叫ぶと氷の矢がロレーヌの眼前にびたりと静止し、溶けだす。それと同時に体を壁に縫いつけていた戒めも溶け、ロレーヌは壁からずり落ち、ガタガタと震える。

圧倒的な実力の差を見せつけられ、死の恐怖を味わった彼に既に戦意は無く、增強剤による興奮状態も完全に冷え切ってしまった。

タバサは腰を抜き、立つことすらできない彼を一瞥すると何も言わず再び本を片手に寮へと戻って行った。

残されたロレーヌの頬を一筋の涙が伝う。

それは恐怖からか、悔しさからか。きつと両方なのだろう。

さて、タバサとローレーヌが決闘をしているちょうどその頃、ヴァレリーはそんなこととは露とも知らず、実験室に訪れた友人の対応をどうしたものかと考えていた。

ちよこんとベットの上で枕を抱えてしょぼくれているのは幼少の頃よりの付き合いのルイズである。

もともと小さいルイズが更に小さく見えるのは気のせいではないのだろう。

座学や一般教養としての魔法薬学や魔法生物学は優秀な彼女であるが、系統魔法の授業は散々な結果に終わっていた。例えばヴァレリーらが難なくこなしたギトーの風の授業では周囲の生徒達を幾人も巻き込んで爆発した後、汗をかきながら外壁沿いを一度も飛ぶことなく5周した。土のクリエイト・ゴーレムによる造形の授業では地面に一人が入れそうなクレーターを作り上げた。それでもルイズは気丈に振る舞い、各系統の教師に教えを請い、努力した。ただ、その努力が実ることはなく、教師としても「そのうち出来るようになるのでは？」と言うことぐらいしか出来なかった。

入学から二週間、爆発しか起こせていないルイズのことを笑う者も出始めていてそろそろ「たまたま失敗しただけ」なんて言い訳が通用しなくなってきた。流石にこれはルイズも落ち込まざる得なく、小一時間ほどヴァレリーのベットで愚痴をこぼした後、疲れたのかしゅんとしているのが今の状況である。

「ねえ・・・ヴァレリー？」

ルイズが枕に顔を半分埋めながら話かける。

「ん？」

ヴァレリーはなにやら生成しながら返事をする。

「私・・・どうしたらいいの？」

「うん、とりあえず飴ちゃん食べる？」

「真面目に聞いてよ・・・馬鹿」

「私も父上によく言われるが馬鹿になることも時には大事なことなんだよ。っと完成」

ヴァレリーは今しがた出来上がったばかりの小さな固形物を持ってルイズの横に腰を下ろすとおもむろにルイズの頬を引っ張る。

「・・・なによ」

「いいから口を開ける」

「ん・・・」

素直に従い、小さく口を開けたルイズにヴァレリーはその固形物をぽいっと入れる。

「お味はいかかでしょうか、お姫様？」

「甘い・・・」

「それは私特製の元気が出る飴ちゃんさ。一粒、1エキューします」

「高いわよ」

「私の真心が籠っているからね。おいしいだろ？」

ルイズは口の中で飴をコロコロ転がしながら頷く。

それを見てヴァレリーはルイズの頭に手を置き優しく言う。

「なぜ、魔法が爆発してしまうのかはわからない。しかし、前にも

言った通り、君にはトライアングル以上になれる資質があると私は思っている。私は君を嘲笑ったりはしないよ。私の大事な友達だからね。辛ければ泣いてしまえばいいし、愚痴が言いたくなったら言えればいい。私が君が泣きやむまで傍にいるし話も聞くから。飽きるまで此処にいていいからさ、飴ちゃんだってあげちゃうよ？だからさ、落ち込むだけ落ち込んだらしゃんと胸を張って歩くんだ」

「ぐすつ・・・ヴァレリー・・・貴方つてば」

ヴァレリーの心よりの言葉はルイズに届いたのだろう。涙ぐむルイズはヴァレリーを見つめる。

「あつ、しかし君には張る胸が無かったか」

「私の感動を返しなさいよ・・・馬鹿」

今度はルイズがヴァレリーの頬をつねる。それはもう、思いっきり。

「ひたひ、ひたひ！こら、励ましてやった友人になんたる仕打ちか！？」

「どうせ、私はちい姉さまとは違うわよ！この、よくも、美少女つかまえて、胸がないとか！」

じゃれる二人。といってもヴァレリーは割と本気で痛がっているがもつれ、ベットに倒れ込めばルイズがヴァレリーを押し倒したような形となる。

ルイズの髪がヴァレリーの頬にかかり、女の子らしい甘い匂いがする。

仲が仲ならキスの一つもするのだろう。

しかし、二人は友達同士。

「少しは元気になったかい？」

「ふん、飴・・・もう一個」

「一粒、2エキュールしますか？」

「さっきより高くなってるわ。こんな美少女が友達で嬉しいでしょう？^{ただ}無料でよこしなさい」

「仕方がないな、美少女に免じて特別にもう一つ飴ちゃんをあげよう」

ルイズにもう一つ特製の元気がでる飴をあげ、ヴァレリーは起き上がると魔法薬の生成に戻った。ルイズは猶もベツトの上に座っていたが今はもうしょぼくれてはいない。実験室にはヴァレリーが作業する音だけ。口の中の飴がすっかり小さくなった頃、ルイズがヴァレリーに話かけた。

「ねえ・・・ヴァレリー」

「ん？」

「その・・・ありがとう・・・」

ヴァレリーの方を見ずにルイズが言う。ルイズはヴァレリーがわざと軽口を言ったことぐらいわかる。だからこそ正面からお礼を言うのは恥ずかしかった。そんな彼女の心境もまたヴァレリーはわかる。だからヴァレリーは振り向くことはせず、作業をしながら一言だけ告げる。

「どういたしまして」

ティワズの週の虚無の曜日。

いよいよ本日はスレイプニールの舞踏会。

宝物庫から真実の鏡がダンスホール的人口まで引き出され、それを

黒いカーテンでしきり、誰が今、姿を変えているのかわからないようになっている。毎年恒例ながら蝶の形のマスクをしたミセス・シユヴルーズがノリノリで生徒達を導く。シユヴルーズは土の系統魔法を教える教師だが2年生の担当であつたため多くの一年生はそこまで面識がない。一年生は「あんなマスクをしなきゃいけないのかな」などと不安を覚えるがそれはミセスの知らぬところ。

ヴァレリーの番になり、仕切りの中の真実の鏡の前に立つ。上からかけられた布を除けば虹色に光る鏡面が現れ、一寸溢れた光がヴァレリーをのみ込み、視界を奪う。光が不意に消え、鏡を見ればそこには自分であつて自分でない姿。己の理想、なりたいとされる誰かの姿。

やっぱりか

ヴァレリーも自分がどういった姿になるのか大方予想できた。

白く長い髪にこれまた同じく白く長い髭、刻まれた顔の皺は今まで生きてきた証。

その姿は学院長であり、ヴァレリーの尊敬する父親、オスマンのそれであつた。

ホールへ向かうと、そこには伝説の勇者や偉人に加え、年配の紳士淑女やクラスメイトそのままの姿と様々な人で溢れていた。ヴァレリーの姿をしたものも数人いたので本人は苦笑いで顔の皺を増やした。

生徒達が全員集まつたのを確認し本物のオスマンが壇上へ現れる。

「諸君、今宵は親睦を深める舞踏会じゃ。なぜ姿を変えたか？それは家柄、地位、国籍、爵位に囚われず、学院では平等であることを知らしめ共に学ぶため。なぜ理想の姿か？それは諸君らに理想を追

い求め、その理想に負けぬよう生きてほしいからじゃ。新しき年、多くを学び、良き友を作り、貴族たる様を身につけよ！以上じゃ」

オスマンが言葉を述べると音楽が奏でられ舞踏会の始まりとなった。

皆が皆、ダンスの相手に誰を誘おうか悩む中、ヴァレリーもどうしたものと長い白髭を撫でていた。なんとなく髭を撫でるのに憧れていたヴァレリーはこの姿になってから、やたらと髭に手をのばしている。ひとまずワインでも飲みながらルイズやギ シュでも探してみることにしたヴァレリーは脇にのいて、料理をつまみながらホールを観察しているとカトレアの姿を見つけた。当然ここに彼女がいるわけではないので誰かが化けた姿である。もっとも誰が化けたものかは想像できるが。

件のカトレアは先ほどから幾人もの相手にダンスを誘われていたわたししている。意中の相手が複数の男に言い寄られるのは複雑な心境でもあるが「あの方ならば当然だろう」とも思う。病弱故、社交界にあまり顔を出せないが本来なら社交界の花となりえる存在なのだから。

ようやく件のカトレアがダンスの相手を選び、音楽に合わせ踊る。優雅かつ軽快にステップを刻む彼女を見ているとヴァレリーの心が苦しくなる。きっと本当のカトレアはあんな上手には踊れない。病がそれを許さないからだ。

ヴァレリー自身もカトレアの病気を何度か診させてもらったが多くの人達と同じように治すことは愚か、その病の根源がなんなのかすらわからなかった。魔法の行使で咳込むことから肺、もしくは脳に異常があるのではないかとの意見もあるが確証もない。自分より実力の上の水メイジの治癒の呪文でも治らないだから魔法の威力、云

々というよりは根本的な所が違うというのはわかる。そもそも魔法による治癒は傷ついたものを癒すのであって、切断された腕を繋げることが出来ても腕自体を新しく生成させることは出来ない。その面を見ても魔法による治癒にも限界があるし、先天的な病に効果があり見込めないのも治癒を専門に扱う者ならわかる。

有識者の中では生命力それ自体を削る何か彼女の中に存在し、併発した病は治癒での対処、それ以外は薬や魔法で生命力自体を高めるしかないとの見解で一致している。ヴァレリーもその見解を支持しているので魔法では上をいく者がいる以上、自分にできること、具体的には生命力を向上させる魔法薬の開発に取り組んでいる。以前、ヴァレリーがタバサに見せた研究文書もそういった魔法薬を開発するための基盤であった。

いけないな、きっと今の私を見たらカトレア様は怒るだろうな。あのお方は聡いから。

自身を諫めるヴァレリーに不意に声がかけられた。

「やあ、君はヴァレリーだね」

低く渋い声、それに見合うがっちりした体つき、それでいてどこか知り合いと同じ空気を放つ金髪の貴族。

「そういう君は、ギ シュだな。君の父君かな？やはり似ている」

ヴァレリーに声をかけたのは陸軍元帥でもあり、現グラモン家の当主である父親の姿になったギ シュであった。ヴァレリーもオスマンの姿であるがわざわざオスマンの姿になるような学生はヴァレリ

「くらいであつたためギ シュもわかりやすかつたのだろう。」

「ああ、そうさ。正直僕は自分が何に化けるかわからなかつたんだよ。ほら、僕、既に理想の姿だし？でもやはり父は偉大だったな」

「まあ、息子は父親の背中を見て育つものだしな。というか君は踊らないのかい？理想の姿とあつて美しい人も多いただろう？アンリエツタ姫殿下なんて5、6人いるし」

「君だつて踊つてないだろ？皆が皆というわけではないが、美しい人が理想の姿の人は自身に美しさが足りないと感じている人だと思ふんだよね。真に美しい人というのはその行動に表れるものさ。今は観察中なんだよ。ところでヴァレリー？僕達はそろつて父親の姿になつたわけだけど僕達に足りないモノつて何だと思ふかい？」

なかなか真に迫るギ シュの言葉にヴァレリーは考える。

「うん、すぐに浮かぶものは威厳とか深みかな？」

「確かにそうかも、でもそれはなかなか難しいな。僕達はまだ十六だぞ？」

「まあね。だからこそ今の姿があるのかも知れない。ギ シュ、君は何が足りないと思う？」

「そうだなあー。うん、わからない」

「おいおい、人に聞いといてそれはないぞ」

「だつてわからないのだから仕方がないじゃないか。でもね、僕は思うんだ。足りないモノなんてこれから生きていく中で自ずとわかることだし今を楽しむことが重要なんじゃないかと。刹那的と言われればそうかもしれないが楽しんでこそその人生。それに僕達はまだまだ若い。出来ない事も多いけどこれから出来るようになることも

多いはずさ」

自分に足りないモノは何か？そしてどうあるべきかを考える二人。それはこの舞踏会の趣旨の一つでもある。ヴァレリーはギ シュの言葉にあり方の一つを教えられた気がした。

「そう言えば、君はさつきからあの桃色のブロンドの女性ばかり見ているな。立ち振る舞いもなかなかだしきつと中身もそれ相応な子なんじゃないかな。うん、彼女は合格点だ。君はああいう女性が好きなのかい？」

話題が変わってギ シュらしい話になった。

「好みもなにもあの方は私の意中の人だからな。彼女はカトレア様とってルイズの二番目の姉さ。どうだい、素敵な方だろう。その容姿もさることながら性格も愛らしく、コロコロと笑う様は天使のそれ。奥ゆかしく優雅、品と知性と遊び心を兼ね備えた麗しの蘭の君なのだ」

まるで自分のことのように自慢するヴァレリーにギ シュは些か驚いた。

「君がそこまで言うか。随分と夢中のようにだね。そうか、そうか。君は僕同様、モテるのに全然学院の女の子に興味を示さないから不思議だったんだがこれで納得がいったよ。で？どうなんだ？どこまでの仲なんだい？」

普段は澄ましているヴァレリーもやはり男なんだと再確認するギ シュの目が輝いている。

「いや、まあ、なんだ、その、まだ告白していないんだ。それなりの好意は示してるしカトレア様からも悪くは思われてないと感じるんだが……。夏になったら告げようと考えてる」

「おお！なんだが今、僕は君が凄く近くに感じるよ！うはは、応援するぞ。さあ、乾杯だ！」

ギ シュがワインのグラスを手に取りはしゃぐ。

「う、うむ。このことはあまり人に話さないでくれよ？」

「わかつてるさ。それじゃあ君の恋が咲き誇ることを願って」

二人はグラスを掲げ、一気にワインを啣る。

そこに一曲踊り終えた件のカトレアがやってくる。

「学院長になってるのはヴァレリーね。そちらはギ シュかしら？合っている？」

「ああ、そうさ。ルイズはカトレア様になったんだね」

「ええ、だってちい姉さまは私の理想だもの。それにしても二人はなんだか楽しそうね。何かあったの？」

ルイズの質問にギ シュが嬉しそうに答える。

「それは秘密さ。男同士の固い絆に基づくな」

事の経緯を知らないルイズは首を傾げ、不思議そうにしている。

ギ シュはルイズにもワインを持たせ、もう一度乾杯を促す。

「さあ！いざ行かん！我々の輝かしい未来へ！」

カトレアの病気の考察は多くの方が作中でなされていますが、それを読み比べるのも面白味の一つではないかと思えます。

私自身は脳の異常がカトレアの生命力を削っていると考えているのですが既存の病ではなく、魔法がある世界なので現代医学の範疇にない病気という曖昧な設定のまま書いていこうと思っっています。

カトレアがヒロインですので例の如くカトレアの病気を治し結婚という形を目指しそうですがテンプレにならないような病気への対応と結末になるよう善処致します。ちなみに作者は報われないエンディングが割と好きです。むふふ。

ロレーヌの方は原作と変化がないですね><

何か違う話の進み方でキュルケとタバサが仲良くなるイベントが起こしたいところです。。。

余談ですが最近、植物の資料を漁るのが楽しいのです。

薔薇についてはダマスク・ローズのヨーク・アンド・ランカスターがやたら可愛らしいので自分で育ててみたいですね。

ウルの月に入り、第二週目のヘイムダルの週。
週末には新入生歓迎の舞踏会が行われることになっている。

薔薇が咲き誇るこの月の魔法薬学の授業では夢見の薬と変身剤を授業で扱い、生徒達はその効果を身を持って味わい、魔法薬学の面白さに引きこまれて行く。

前者の夢見の薬はウバタマを主原料としたモノで服用し眠りにつく
と何とも不思議な夢が見れるという一品であり、副材料を変えること
によって摩訶不思議な夢や、心温まる夢、魔まされるような悪夢を
見ることが出来る一品である。

後者の変身剤は材料に変身したい人物の体の一部を用いて、その人物の姿になれるというモノである。注釈としては著しく形が違うモノ、例えば猫や犬に姿を変えることはできないし、男女間の変身はできない。変身剤の効果が発揮しないというわけではないが毛むくじやらになるか男でもあり、女でもある体になるといった中途半端な結果になる。

魔法薬学界の研究文書の中にはわざと動物になる変身剤を作り、聴覚や嗅覚など、部分的に鋭くすることの研究がなされてもいるが悉く失敗に終わっている。

ただ、この分野には一部の酔狂な研究者がいて今も猶、研究が続けられている。

なんでも「獣耳や尻尾は男の浪漫だ！」と主張しているらしい。

その熱意が果たして純粋な能力向上か性的趣向から来るものなのかは定かではないが以外に結構な数の支援者がいて研究資金には窮することがない分野であるのはこの業界のなんとも言えない面である。

話がどんどんと脇道に逸れていくが魔法薬学界では月に一度、ハイムダルの週に発行される月刊情報誌がある。国によって変わってくる面もあるが、概ね研究成果の発表や新しい発見、第一人者のコラムや色々な分野の特集記事が載っていたりする。

また、これが割と重要なのだが各研究者や研究施設のパトロンの募集も毎回掲載されている。

今月号の募集欄の一番上には資金潤沢のくせにデカデカと件の浪漫を探求するもの達（彼らの団体名は「ケモナー」である）の援助募集がなされている。

別に此処は毎度のことなので別段かまわないのだが問題は今月号の表紙にあった。

表紙には丈の短いメイド服を着て、縞々のショーツが可愛らしい少女の絵が刷られており、猫耳と尻尾、猫ハンドの手袋まで付けた完全装備でポーズを決めている。

ロマリアから差押えられそうな宗教的に危ないその表紙に定期購読しているヴァレリーは目を疑った。今回は買うのを止めようかとも思ったが内容自体は普通であるので買うに至ったが、書店からの帰り道は人目が気になって仕方がなかった。

加えて、学院の自室に戻った際も助手として手伝いに来てくれたル

イズ、タバサ、モンモランシーの3人や演奏を合わせに来たキュルケはその表紙を見てドン引きである。

この時ばかりは周りと馴染めていないタバサやキュルケも分け隔てなく冷たい目でヴァレリーを見た。幸い、モンモランシーが覚えがあつたこととヴァレリーがすぐに弁明したことで人格を疑われずに済んだがこの本の編集者と傍から対岸の火事を決め込みニヤ付いていたギ シュを軽く恨んだヴァレリーだった。

ちなみにモンモランシーの覚えというのは魔法薬学界にはそういった分野があることを知っているとという意味であり、彼女が猫耳等をつけるのが好きという意味ではないことを彼女の名誉の為に補足しておく。

さて、普段は恋人の量産や無視を続けるキュルケとタバサであるが、ヴァレリーを通して研究室に集まるメンバーとは険悪な関係というわけではなく、ことタバサに関して言えば、最近では彼女がヴァレリーのことを好きなのではないかとの噂まで立っている。

というのも普段はクラスの者とは話さないのにヴァレリーとは話しているのを見かける上に、魔法薬学の助手まで引き受けていて他の者との差が明確だからである。

タバサにしたらヴァレリーが役に立つこと、興味があることを話かけてくるから話しているだけであるが、そんなことは当人しかわかる由もなく、噂というのが一種の娯楽でもあり、また十代の恋多き生徒達故、上記のような話になってしまったのだ。

そんなこととは知らないヴァレリーは、週の中頃、授業を終え、オスマンの執務の手伝いをこなし、すっかり暗くなった学院から研究室へと帰るところであった。

地を照らすのは月明かりのみではあるがそれがヴァレリーにとって心地がよく、辺りが暗くとも夜目が利く為足取りは軽い。どちらか吸血鬼の血の成せるモノであるが当の本人はそれが理由だとは露とも思うことは無い。

ヴァレリーが明かりが灯る学院の門のところまで来た時、一迅の風がふいた。

「…………ツ!？」

その風はヴァレリーの銀色の髪に触れ、闇に消える。

明らかに不自然な風に後ろを振り返るもそこに人の姿は無く、そして気付く。

結んでいたリボンごと髪が一束切られていることに。

これにはヴァレリーは慌てた。

髪を切られたことにはなくリボンが切れてしまったことである。髪を結っていたリボンはカトレアから一番最初に貰った黒のモノであり、それはもう大事に扱ってきたのだが無残に真ん中辺りから寸断されてしまっている。しかも切れた片割れが何処を探しても見つからない。

翌朝の朝食になってルイズやギシュがヴァレリーの様を見て驚いた。

服やマントは汚れ、顔には疲れが色濃く表れていて普段の品の良さや優雅さというものがまるで感じられないのだ。

「ちょっとツ！？どうしたのよ、ヴァレリー！？？」

ルイズの問いに切れたリボン^{リボン}を夜を徹して探していたと答えるヴァレリー。

「リボンって・・・それだけの為にかい？」

ギ シュの疑問は当然と言える。

普通はリボン一つの為にここまでならないだろう。しかしヴァレリーにとっては一大事である。

「あのリボンはカトレア様と初めてお会いした時に貰った私にとっての特別なモノなんだよ・・・」

泣きだしてしまうのではないかと思うくらい沈んだ声音で説明するヴァレリーにルイズとギ シュの二人は言葉に窮する。

結局その日は受ける授業にまったく身が入らず、座学はただ教室にいるだけ、魔法の授業はドット並みの効果しか出せないという落ち込みようであった。

放課後になり研究室に戻ったヴァレリーはふて腐れてベットに倒れ込み、枕に顔を埋める。どう考えても落ち込み過ぎだとは自分でも自覚してはいるものの儘^{まま}ならない心境であり、そもそも昨晩の風は人為的なモノであった故、考え始めると誰にぶつけることもできない腹立たしさが湧いてくる。

こんなんじゃないダメだな・・・

むくりとベットから起き上がり、気持ちを入れ替える為に早々に湯に浸かる仕度をする。

思えばある程度、拭いたとはいえ、徹夜で学園中を搜索したせいで随分と汚れている。

身嗜みの乱れた者は心も荒ぶということを見事に体現している今の自身の姿はカトレアの伴侶になる男として相応しくないだろうと思いい、冷静になり、余裕を持つように努める。

大浴場は時間が早いこともあってまだ誰も湯に浸かっておらず、広い空間にヴァレリーが一人だけ。

なんとなく魔法で湯に流れを作り、流されるままぶかぶかと漂う。このような時、肌身離さず持つていられる指輪が魔法の媒体だと便利である。

何も考えず、目を瞑り、ぶかぶか。

「おわあっ！？なにしてるんだよ、ヴァレリー！？」

土左衛門よろしく、浮いていたヴァレリーの姿に驚いたのは大浴場に入ってきたギ シュである。

「ん？ギ シュか・・・いや、ちょっと無の境地に達しようかと。というか君、なんでこの時間に？」

「君が大浴場に向かうのを見かけたからさ。見るからに落ち込んで
いる君を友としては放っておけないだろ？」

「むう・・・そうか。すまないな」

ギ シュは髪を洗い始め、ヴァレリーは変わらず湯を漂う。

「それで？無の境地とやらには達したのかい？」

ヴァレリーの方へは向かず、髪を洗いながらギ シュが問う。

「いや、考え出すと気分は塞ぐし、イライラしてくる・・・。明らか
に意図的に作り出した風だったし、私は誰かに恨まれているのだ
ろうか？」

「うーん、それはわからないな。仮に恨まれていたとしても誰しも
恨みの一つや二つはかうものだろう？まあ、僕は皆から愛される存
在だけだね。そう言えば一つ聞いていいかい？」

「答えられることなら」

「君はもしかして気分転換の都度、そうやって浮いているのかい？」

「別に毎回というわけじゃないが・・・研究に行き詰ったり、気持
ちの整理が出来ない時は偶に」

「ふーん、こう言っちゃなんだけど・・・馬鹿みたいだよ？」

「自覚はしているよ。しかし、存外これが落ち着くんだ。私にとっ

ては特別だけど傍から見ればたかがリボンでどれだけ心を乱すんだって思うのは理解しているんだ。だからこそ今、こんなことをして平常心を保とうと努めているんだよ」

「なあ、ヴァレリー。自身を省みることが出来るのは君の美点だけど変に大人になり過ぎるのもどうかと思うんだ。君はルイズを慰めた時、思うようにすればいいってというような旨を言っていたけど、それは君自身にも当てはまることだよ。ルイズもそうだけど少し真面目過ぎる気がするよ」

「真面目過ぎるか・・・」

「そうさ、楽しくいこうじゃないか」

「うむ、善処してみる。・・・ところでなんでルイズとのやり取りを君が？」

「あの場に僕もいたからさ。なんだかい雰囲気だったから部屋に入れなかったけどね。てつきりキスでもするのかとドキドキしてたんだが・・・」

「ルイズとはそんなんじゃないさ」

「あれだけ仲がいいのに不思議なモノだ。まあ、僕としても君達二人がそういう仲になってしまつと3人である時に居場所に困るから助かるけど」

体や髪を洗い終えたギ シュが湯に浸かる。

猶も浮いたままのヴァレリーを見て何を思ったかギ シュは目を細め、眼前に指を2本横に立てる。

「ん？なにしているんだ？」

「いや、こうして胸とか股とか隠して遠目に見ると女の子が浮いているように見えるから・・・あだっ!？」

香り付けのために風呂に浮いていたオレンジをギ シュ目がけて投げつけるヴァレリー。

「なんちゅう目で私を見てるんだ!？」

「ただの一般的見解というか・・・事実というかって、待て!？魔法を使うのは卑怯じゃないかッ!？君もルイズの時は最後に茶化してただら!??？」

「そうだが、生理的に不快だ!そおい!」

ヴァレリーが魔法で拳程の大きさのお湯の塊をギ シュに飛ばす。

「なんのこれしき!」

ギ シュは風呂桶で水弾を撃ち落としガード。浮いているオレンジを投げて応戦。

「のわっ!?!ならば数で勝負!」

今度は小さな水弾を無数に飛ばすヴァレリー。

「あまい!!--!」

ギ シュは桶でお湯をすくい、盛大に前方にぶちまける。
いわば、簡易的な水の壁である。

「読んでいた！」

塞がれた水弾を囷にギ シュが前方に意識を向けている中、ヴァレリーはお湯を冷水に変え、ギ シュの背中にかける。

「ひややあゝツ!?!」

堪らずギ シュが温かいお湯の中へ逃げる。

指輪が魔法の媒体故、風呂場でも魔法が使えるヴァレリー。
加えて水を操るヴァレリーにとって風呂場は絶対的有利である。
しかしその慢心が油断をよんだ。

ギ シュは湯に潜ると浴槽を蹴り、そのまま潜水でヴァレリーの足を
元をさらったのだ。

「ぬっ!?!」

すっ転んだヴァレリーは湯に倒れる。

両者、ぶわっと湯から立ち上がり、お互いに視線を交わす。

最早、魔法を詠唱する距離でもない。

それはヴァレリーもギ シュも知るところ。

それ故、手に握られている物を見てお互いの意図が同じだと気付き
不敵に笑う二人。

「これが最後の一撃になるだろう」

「ああ、そのようだ」

「「いざー!!」」

二人が握っていた物、それは湯に浮かんでいた瑞々しいオレンジである。

湯に浸けていたため随分と柔らかくなったそれを相手の眼前にて潰そうというつもりなのだ。

そんなことをすればどうなるか？

答えは簡単。

飛び散った汁が目染みるに決まっている。

「ひっさあああつつ!!」

「めつぶしいいつ!!」

両者は同時にオレンジを相手の眼前に掲げ、同時に爆ぜた。当然の如く四散する柑橘系の爽やかな香りと汁。そしてそれが目に染みるといふ自明の結果。

「「ぎゃーーッ!!?目があああああ!!?」」

深緑が色を増し、風薫る夜。

ゴールデンペア第一回決戦・ギ シュ対ヴァレリーの大浴場の攻防
勝敗：泣く泣く引き分け。

決定打・瑞々しいオレンジ

012 (後書き)

今回はちょっと短かったですね><

そろそろ更新しないと忘れ去られてしまうのではないかと焦った次第でございます。

最近流行りの東方×ソードワールド動画を試しに作っていたら春眠の如く時間が過ぎていました。

さて、ウルの間、ヘイムダルの週と言えば留学生ペアの大事なイベントなのですが今回のお話はその前書きのようなものです。

ギ シュと馬鹿やっただけのような気がしますが(汗

絵図的にアレなので二人はきつとタオルか何かを腰に巻いていた
と思いたい・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2248u/>

オールド・オスマンの息子

2011年10月5日04時23分発行